

氷雪の魔王と愉快な帝 具使い達の話

椿リンカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公ことモブ子（露子）はある日、異世界移動させることを生業とする株式会社「レイクオブスワン」のモニターとして選ばれる。100人のモニターが「アカメが斬る！」の世界ヘトリップ・転生・憑依をすることに・・・

無力なモブ子に突きつけられる現実、そして彼女は悪役になることを決意した

一話目のあらすじは以上。2話目からはギャグ＋シリアス（＝シリアル）

本編登場オリキャラは株式会社「レイクオブスワン」の社長のみ

前書き・後書きにはモブ4人程度出てきます。

【更新状態】完結済みなのですが、後日談がいくつか作成したのでちよこつと更新させていただきます。一部はT w i t t e rのSS名刺で作成したものを収録（2本）あとは完全新規作品です。

目次

原点編

モブが最終的に悪役になって100万
回繰り返し返してみんなを生存させる話

1

モブ子先生のプロフィールく株式会社
レイクオブスワンにてく

24

転生編

タツミの決意とシユラの憂鬱

28

36
新米將軍ナジエンダさんの一幕

渡る世間はロリコンばかり

44

羨ましいからそこ代われ

51

クズはやはりクズだった

58

皇帝陛下の真意とブドー大將軍の苦慮

68

外伝：タツミ憑依のモニターさんその

後

75

大浴場ではお静かに

86

外伝：皇帝陛下と●●のベルベット

ルーム

94

変換編

緊急！選抜試験阻止事件開始

100

樹海の王者ターザン現る

108

ノリで発言すべきじゃない

114

少女アカメの日常

122

	覗きは犯罪行為です	129	行)	196
	外伝：株式会社レイクオブスワンのメ		帰宅編	
	ンバー紹介	139	オネスト大臣と露子の昼下がり	前篇
	1話目からきつと読者も思っていたこ		オネスト大臣と露子の昼下がり	204
	と	147	後篇	
	とある男の初恋話	157		210
	ドMは地上最強の生物 前篇	166	外伝：ナジエンダ先生の恋愛教室	
	ドMは地上最強の生物 後篇	171	217	
	正義の味方じゃない前篇	177	実家に帰らせて頂きます	223
	正義の味方じゃない後編	183	実家に戻って参りました。	231
190	ロリとシヨタの仮装祭での一幕		外伝：ドMとペドの雑談編	237
			実家に帰省しております	242
			外伝：皇帝陛下と悪魔の話	248
	教主様は通常運転(ただしドリフト走			

露子さんの本音の話	254
それぞれの夜	260
美食家で人間好きの悪魔と、ただの人	272
間の話	272
皇帝陛下の決意	278
結婚には責任を持ちましょう	287
後日編	
家出騒動の後日談	293
t e n y e a r s a f t e r	299
【後日談】それからどうなった【日々は	
続く】	305
【書き下ろし】おまけのおまけ【後日談】	

原点編

モブが最終的に悪役になって100万回繰り返してみんなを生存させる話

【ある女の独白】

オリジナルでも二次創作でも夢小説・・・それらの物語群で1つのジャンルとして確立しているもの・・・転生やトリップ、憑依といったもの。

ありがちな異世界転生や異世界トリップなんてものは、ほとんどが作者の自己満足だと思ってる。この私だってそうだ。自分が満足して書きたいから、色んな物語や、二次創作や夢小説ならIFの世界を妄想する。

ハーレムにしたり、ちやほやされたり、戦いで無双したり・・・

誰だって、主人公になりたい、誰かのために何かをしたい・・・そう思って生きていく。

私だってできることなら、「アカメが斬る！」の世界の人たちを助けたい
全員ひっくるめて、だ

ナイトレイドも、イエーガーズも、羅刹四鬼も、ワイルドハントも、全部まとめて……
……けど、チート無双したり俺TUEEEは、自分には合わない

いや、否定はしないのだ。自分もそういう作品も書いてるし、好きなものを書いてるつもりだ

読者もついているし、なによりも私が満足して、楽しく書いている

ただ、私は……人間の可能性を信じている

ただの人間だって、何かできるはずなのだ

こんなどうしようもなくクズでノロマで、何の価値もない人間でも誰かを救えるといや、「救う」って言葉自体がおこがましいだろう。

私は何様なんだ……

せめて何か、手助けできるなら……

私にはきつと……主人公なんて、似合わないのだから

【ある悪魔との邂逅】

パンパカパン！

おめでとうございます！あなたは見事に当社のモニターに選ばれました。

私、株式会社「レイクオブスワン」の社長兼営業担当のロッドバルトと申します。当社ではお客様を異世界へと転生・移動・憑依させることを生業としております。

もちろん、コースによって特典も可能です

現金払い・クレジット・現物取引やローンもできます。

ですが！今回、貴方は当社の特別モニターとして選ばれましたのでタダでトリップや転生ができますよ？

・・・そんなにうまい話があるはずない？

そうですね・・・では、お話ししましょう

貴方の行く世界は「アカメが斬る！」という・・・こちらの世界では漫画作品になっている、異世界に行ってください。

実のところ我々は異世界への移動を取り扱っているのですが、安全を兼ねてモニター派遣をしてから当社で取り扱うか、どういったコースを用意するか決めています

ほら、並行世界ってあるじゃないですか？異世界の中にも並行世界が何百万とありましてね・・・その中の一つを試しに使うのです。それに利用客同士が被った場合の対処がしやすいですからね、並行世界万歳！

今回は貴方を含めた100人にぜひとも試していただきたいのです

モニターですから特殊な力等もタダで付けれます・・・えっ？それでかまわない、ですか・・・

奇特なお方ですね。

もちろん、向こうで死亡したら我々社員がお迎えにあがり、蘇生させてこちらの世界にお戻りできます。

モニターですからね、それぐらいは致しますよ

・・・まあ、お気に召されたら、ぜひともご利用ください

それでは、転生・憑依・トリップ・・・どれになさいますか？

・・・ふむ、トリップ、ですか。

では、このドアを通れば向こうの世界にたどり着きます。

・・・では、ゆつくり楽しんでください

【幸せな日常】

不思議な男の思惑に乗り、私はこの「アカメが斬る！」の世界にトリップしてきた。

モニターが100人いるとは聞いていたが、実際にトリップすると聞いたことない帝

具で活躍しているナイトレイドやイエーガーズ、帝国の軍人などがいるようだ

・ ・ ・ どうやら、私以外は皆 ・ ・ ・ 原作改変のためになんとか頑張っているらしい
私はというと、特典が何もない状態で帝都にやってきた。

最初は清掃婦として雇ってもらい、アルバイトをしながらも、作品を書いて出版社に
持ち込みをした

内容は桃太郎の現代版アレンジ ・ ・ ・ と、いったところか

東方の昔の物語を下敷きにしたと銘打って、帝都ではそこそこ売れている。

こちらでは東方は未開の地として認識されているし、やはり異国の物語は誰しも興味
があるものだ

「ああー先生じゃないっすかー」

立ち寄った貸本屋でラバック君に声を掛けられた。

エプロン姿がとてもよく似合っているが、これで暗殺稼業をしているのだからすごい
ものだ

「久しぶりですね。元気でしたか?」

「元気だつて。この間の新刊!俺も読みましたよ!面白かったです!」

「ありがとうございます ・ ・ ・ ああ、資料用にこの本とこの本、借りますね」

ラバック君は出版社関係で偶々知り合ったのだが、話しやすく助かっている。

こうして資料を探しやすいように貸本屋に仕入れてくれてもいるし、感謝しても足りないぐらいだ

いつかは彼とナジエンダさんをモデルにした恋愛小説でも書いてみようか・・・とは思っている。

「いいですよ！あ、レオーネ姉さんも先生に会いたって言っていました」

「それは・・・また肩こりが酷くなったら行きますね。それじゃあ」

「じゃあ先生！また！」

貸し本屋でラバック君と分かれて、行きつけのカフェへと赴いた。

静かな雰囲気で、ここのベリータルトはとてもおいしいのでよく利用しているのだ。

「ん？ああ、先生か」

「どうやら先客・・・エスデス將軍と三獣士がいたらしい」

今日は休日なのか、彼らも私服姿でこのカフェ自慢のベリータルトとハーブティーを頂いていた。エスデス將軍はなんだかんだで身内には甘いのだ。

いつもは見かけ・・・他のモニターがいなくて見ると、どうやら仕事が入っ

ているか、原作改変のために動いているらしい

「よお！先生さんも元気そうだな」

「先生！ねえねえ、次はどんな話なの？」

「ニヤウ、次の楽しみが無くなるだろう」

「皆さんも休日を楽しんでいるようですね・・・新作も来月あたりには出版できますから、楽しみにしてください」

「そうか・・・芸術的なことはよくわからんが、お前の書いている物語は好きだぞ」

エスデス将軍や三獣士の方にこう言ってもらえるのは喜ばしい

「ありがとうございます」

ちようどいいので、皆さんに混じって午後の一時を楽しんだ

何万人と殺してきたことは知っているけれど、それでも普段の彼らは好感が持てるどころもあるのだ

カフェから出てきて、少し歩いていると声を掛けられた。

「先生！」

「ああ、セリユーちゃんか」

セリユー・ユビキタス。帝都警備隊所属の・・・将来、イエーガーズに入る子である。

「同じ年ぐらいだったけど、その笑顔は10代女子を思わせる輝かしいものだ
先生、今日は面白い物ですか？」

「ああ、今から宮殿に用事があつてね・・・セリユーちゃんはパトロール？」

「はい！あの、また先生の新作読みました！面白かったです！」

「ありがとう」

「やつぱり、正義は悪に勝つんですね！今回の話もとてもよかったですよ！」

「あはは・・・」

接してみてわかるが、彼女は純粹なんだと思う

あまりにも純粹すぎる水のように・・・魚や生き物が棲めないぐらいに清いのだ。

そりやあまあ・・・多少は濁ることも覚えないと、歪むのだろうか

とはいえ、私ほど濁つてしまうのも考え物だと思うが

基本的にセリユーちゃんは悪い子ではないのだ

むしろ普通に付き合う分には良い友人にもなれるだろう

「では、これからまたパトロールがありますので」

「ああ、じゃあねセリユーちゃん」

セリユーちゃんと分かれて、私はすぐに宮殿へと向かった。

いつもの門番の方に挨拶して、研究室へと向かう

「スタイリツシユさん、こんにちは」

「あら、遅かったじゃないの・・・今からコーヒー入れるから、そこに座りなさい」

「はい」

Dr. スタイリツシユは私が書いている作品の一部・・・まあ、ようするにBL作品の大ファンだったりする。

どうやら帝都ではあまり同性愛を扱った作品は無かつたらしく、私が趣味で書いたものを編集長が勝手に盗み見てドハマリ、結果的に出版されて・・・一部の方々に大人気となったのだ。

スタイリツシユさんとは偶々サイン会で出会い、意気投合した。

というか、私のほうからネタのためにお話を・・・とのことで近づいたのだが

「次はどんなものを書くの？年下下剋上攻かしら？」

「実は今度は・・・スタイリツシユさんをモデルに書こうかな、と」

「あら、あたしがモデルに？」

「いつもネタ出しに協力してくださってますから」

「それぐらいいいのよ。もう・・・あんたがイケメンだったらよかつたのに」

「私なんて、男になったところで凡人ですよ」

「凡人だなんて・・・そんなに自分を卑下しないの！あんたの悪い癖よ？」

そう言いながらもお茶請けを出してくれるあたり、気に入った人間には結構優しいのだと思う。

「けど、私のはあくまで、昔語りを下敷きにしたり、設定が物珍しいだけで・・・帝都にはほかに素晴らしい作家さんがたくさんいますよ。私のは何番煎じと言われてもおかしくありません」

「そうかしら？大ヒットとはいかないけど、そこそこは売れてるわけでしょ？」

「でもそれも流行みたいなものですから・・・」

「あんたねえ・・・まったく。」

スタイリッシュさんの言いたいこともわかる。

私はあまりに自分に自信が無い。いや、自信が無い振りをして、それを逃げ道にしてるんだと思う。

なんて自己愛が強く情けない、汚い人間なんだろう

「それじゃあ、そろそろお暇しますね」

「もう帰るの？」

「はい、それじゃあ・・・」

そうしてドアを開けようとすると、先にドアが開いた。

「おいスタイリツシュ話が・・・って、先生か」

大臣の息子であるシュラさんがいた。

どうやらスタイリツシュさんに用事があるらしい

「あら、シュラじゃないの。どうしたの？」

「お前の玩具について聞こうと思ったが・・・先生がいるなら別だな。来いよ」

「えっ、あ、あの」

「ついてこいって。大臣の息子の俺に逆らう気か？」

「あのもつ、私、今日は買い物とごはんが・・・それにシュラさんに権力があるわけじゃないですよ？か、勝手に名前使ったら、大臣様も困りますよ」

「・・・本当にお前、さっさとそういうこと言えるな。相変わらずすげーなお前」

有無を言わず、腕を引っ張られる。

やっぱ力が無いせいか抵抗できずにそのままついていく形になってしまう

シュラさんと知り合ったのは、最初の本が売れた頃のことだ

帝都で少しばかり有名（一過性の流行だとは思うが）になって、私が女だと知ったからか会いに来たのだ。

今思うと、東方未開の地に興味があつたから、それを知っている（と思われる）私か

ら話を聞こうと思っただろう

私はどうと・・・まだ原作キャラに未遭遇だったせいで、いきなりの訪問で思考が停止しかけた

実際に会ってみると緊張しかないというか、何を喋っていいのか分からなくて大変だったんだ・・・

まあ、その、つい・・・こう・・・

父親のために努力してるのはすごいとか、父親に愛情を持つているから情が無いわけじゃないと思いますとか、私がシユラさんについて思ってたことや考えてたことを延々と話してしまったというか・・・

そのせいか妙に懐かれてしまった

いや、玩具として珍しいからかもしれない。とかく興味を持たれたらしい

「でも、私、ごはん・・・作らないと・・・」

「飯なら食ってけよ」

「えっ!? そんな悪いですよ! いきなりお邪魔してご飯なんて・・・」

「別に。どうせ親父は皇帝陛下と一緒にだし、一人で食ってるよか、先生がいたほうがいい」

「あの、私なんかより、もっと可愛い人とかと・・・シユラさんモテそうですし」

「そりやまあ、その気になればいくらでもいるけどよ」

「じゃあなんで・・・」

「東方の話も聞きたいしな、お前と話してるほうが面白い」

・・・気を抜いてる時は、表情が幼く見えるな

シユラさんが私よりも年上だなんて思えない・・・あと、ゲス顔しなきや基本イケメン。

最初の褒め殺しが効いてるのか、それとも私の言動が面白いのか・・・

今のところ暴力を振るわれたことが無い

というか、ここところは逆に私の自虐をスタイリツシユさん共々諫めているぐらいだ。

「飯だけ食ってけよ」

「あの、いいんですか、その、テーブルマナーとか苦手だしその」

「気にすんなよ。好きに食えばいいだろ」

「でも・・・その、私なんて、一緒に食べてても・・・へ、変な噂がたつたら、困りませんか？私みたいなやつとなんて」

「・・・ちったあ自分に自信持てよ」

「でも、私なんてほんとクズですし、いても、迷惑なんじゃ」

「そんなこと言うやつがいたらさっさと処刑すりゃいいから、お前は気にするなよ」
「・・・」

そのあと、一緒にご飯を食べて、家まで送ってもらった。

こういう時に自分の顔が凡人で助かった。きつと美少女や美女なら襲つてたりした
だろうしな・・・

まあ、凡人だから手も出されずに済んでるんだろう

執筆作業に取り掛かりながらも、この日常がずっと続けばいいと願う。

けれどあと1年かそこらで・・・原作軸に入るだろう

そうなればきつと、原作キャラ達も・・・モニターの方々も本格的に動くはず・・・

現時点でかなりの数が水面下で活動しているはずだ

・・・私はその時になったら、何かできるのだろうか

話し合えば、分かってくれるのだろうか

【絶望】

話し合えば分かってくれる

全員を助ける道もあるんじゃないか

そう思っていた

モニターたちが協力すればできると、そう思っていたのだ

だが実際にはどうだ

モニター同士の争い、自陣営を救うため、自分の欲望のため、……混戦してしまった

目の前には、死体ばかりだ

ぎりぎりまで、みんな生きていた、生きていたのだ

それなのに、どうしてこうなったのだ

革命軍が来る直前に、帝都は死の街になってしまった

全員死んだ、死んでしまった

「……おい、生きてるのか?」

ふと、声が聞こえた

「えっ、あ、シユラ、さん……」

「死んだかと思ってたが、生きてたか。ひとまず逃げるぞ。宮殿の危険種共が逃げてる

からな」

いつものように腕を掴んで歩き始める

「でもつ、あの、みんなが・・・」

「いいから行くぞで」

機嫌が悪い・・・というよりも何か怒っているような我慢しているような

ああ、そういうえば、宮殿もほとんど崩れてるし火の手も上がっている

・・・あの様子だと、宮殿にいた人々も・・・

つまりは、大臣も

「・・・あの」

「・・・」

・・・帝国の腐敗は確かにオネスト大臣にも原因はあつた。悪人と言えば悪人だし、許されるものではないだろう

だが、腐敗全てがオネスト大臣のせいではない

国が長く続くということはそれだけ腐ってしまう者たちもいるのだ。

それに・・・どれだけ悪人だろうと、いらぬならあつさり捨てるような最低な親でも

・・・目の前の、彼にとっては大事な親だったのだから

私は何も言うべきではない

言っではいけない

「大丈夫ですか」「仕方ないですよ」みたいな無責任な言葉を口に出せるほど、私はまだ厚顔無恥ではない

ふと、帝都の門の前に誰か立っていた

その姿は間違いない、タツミ君だ

初めて見ても分かるが、そうか、この子が帝都に来る前に全部……全部終わってしまっただのか

「……なんだお前」

「あ、あの……」

「……」

タツミ君は……無表情で立っていた。

おかしい、原作の彼は喜怒哀楽がはつきりしている。こんなことになっていれば誰かを助けようとしたりするんじゃないだろうか

違和感を覚えた、次の瞬間

「ツ……!?!」

私の腕を掴んでいたシユラさんの手が、離れた

どさり、と体が崩れ落ちて地面を真っ赤に濡らし始めた

目の前に返り血のついたタツミ君が：タツミ君の振りをした誰かが嬉しそうに笑った

「あーあ、折角タダでモニターになったのにな。まあ、これでゲス野郎は始末できたからいいか」

「・・・同じ、モニター・・・？」

「ん？なんだよ、あんたこのクズ野郎の女かと思ったたらモニターか。無理やり連れてこられたんだろ？可哀相にな」

「ち、ちがつ・・・」

まさか憑依型のモニターだったとは思わなかった。

いや、その前にできる限り治療しないといけない。怪我だらけではあるが、なんとか治療できれば・・・

「ん？なんで助けるんだよ。そいつクズじゃん」

「で、でも、殺さなくても」

「あー？ボルスさん一家殺したりしてんじゃん。ワイルドハント全員胸糞悪いクズばっかだし、生きてる価値もないだろ。殺したほうが世のためってやつだ」

「そんな、こと」

「死んだほうがいいんだよ、さっさとぶち殺したほうが世の中のためだしな。つっても、もうこの感じじゃ他の奴らがやっちまった後か、しやーないな、次の世界で金払って無双すつか」

「・・・」

「お前もそいつなんか捨てろつて。クズ助けたところで意味ないじゃんか。そんな奴は死んだほうがいいんだつてば。それとも何？惚れてんの？男の趣味悪いなー」

「・・・」

「まだ生きてるならさっさと俺が殺してやるから、どけよ」

「・・・」

誰しもそれぞれ理由はある

原作のキャラ達も、モニターにだって、何かを守りたいとか、何かを成し遂げたい、そういうものがあると思う

それは否定されるべきではない

誰だって幸せになりたいのだ

誰かを幸せにしたいと思っっている人もいる

でも、どこかで折り合いをつけないと、何かを犠牲にしないといけない
全員を幸せにするには
そうか、それならば

【ある悪魔との契約】

・・・お疲れ様でございます。いかがでしたか？

ええ、モニターの皆様は継続して再チャレンジするご予定ですか？

貴方は・・・最後まで、もう一人の方共々生き残ったあなたはどうする気ですか？

・・・えっ？

モニターたち全員同じ世界線に設定しろ？

ど、どうしたんですか？いきなり、大体それは他のモニターにも許可を・・・

・・・どうということですか？

貴方は何をなさるおつもりで？

・・・なんと！そうですか

ご自分が、モニターとあの世界に住む全員の・・・世界の敵となると？

・・・なるほど、共通の敵がいれば仲の悪い者たちも協力すると申しますからね

ですがそれは、貴方自身の幸福全てと引き換えになりませんか？

・・・それで貴方様は良いのですか？

貴方様とて人間でしょう。多少なりとも自己愛も自尊心も、生きたいと思うこともあ
るはずですよ

・・・そうですか。それらもすべて、大好きな彼らに、おまけにモニターのみなさん
の幸福にまで繋げると・・・

ふふふ、ふふふつ・・・愚かですね、自己犠牲というレベルを超えていますよ
ですがよろしいでしょう。私は社長である以前に悪魔です。

だから、そういう人間を見るのが・・・そういう人間が苦しむのは楽しくて仕方あり
ません。

何度も何度も失敗するでしょう。

安心してください。

貴方を最高の悪役に仕立ててあげます。何度でもやり直せるとご好評のループ能力
を核に、悪役に相応しい力を与えます

・・・私のポケットマネーですので、ご安心を

これほどまでの逸材とは思いませんでした。では準備いたします。

【100万回やり直した魔王（あるおんな）の顛末】

1000年続いた帝国には、一つの昔話がありました

魔王と始皇帝が戦い、魔王が封印されたというありきたりな昔話ですが、おとぎ話に出てくる魔王は本当にいたのです。

魔王は長き眠りから覚め、帝国全土を雪と氷で覆いました

それに立ち向かったのが、帝具使い達と特殊な力を持った者たちでした

革命軍も帝国軍も民衆も関係なく、かれらは祖国を、大事な者を守るために戦ったのです

戦いは熾烈を極めました、誰ひとり欠けることなく・・・魔王を倒しました

最後のトドメを刺そうとしたインクルシオを纏う少年の前で、ぼろぼろになった魔王は笑っていました

帝具使い達の幾人かは、その魔王の素顔を、その微笑みを、どこかで見たような気がしたのです

そして少年は魔王に、最後の一撃を与えました

平和になった帝国で、彼らはそれぞれ新しい日常を過ごしました

【ある悪魔の独白】

・・・これで終わりですか

100万回も繰り返して、やっと手に入れたのですね

自分以外の幸福を

・・・何度も何度も気が狂いそうになりながら、最後に達成することができたのは賞賛されるべきものです

社員一同、我が社の記録に残るであろう貴方の全てに尊敬の念を抱きます

・・・どれだけ悪役として振る舞っても、貴方の信念は主人公の彼らと遜色ないものです

貴方の魂は私が保管させてあげますゆえ

しばしお待ちください

・・・こんな極上の魂、食べたいぐらいですが・・・

・・・ここまで頑張ったあなたへの、私から、いえ、社員一同からのボーナスステージです

次の世界では、幸せになってください

モブ子先生のプロフィールく株式会社レイクオブスワンにてく

1 話目時点での名前表記：モブ子先生

本名：久多良木 露子（くたらき つゆこ）

転生後：露子（ツユコ）

性別：女

年齢：20歳前後

性格：自虐思考が強く、自己評価が低いが、実際は我が強くて頑固

理想を抱いて溺死する典型例な生き方をしている。

上記の事柄についても自覚はあるが治そうとしないあたり、割と怠惰的魔王として死んだ後、転生したため絶賛混乱中。

常識人枠のほず。常識人であつてほしい。

外見：メガネ！三つ編み！（作者が思う萌え要素）

髪色は黒、目の色は魔王化の影響で黒と赤のオッドアイ（笑）に

別名：氷雪の魔王（笑）

魔王スキル一覧

・ループ能力

典型的なループ能力であり、使用者が指定する時間へと巻き戻る

同じ世界で巻き戻しをするので、並行世界を移動とかそういう類のモノではない。

・Let it Go!

某雪の女王よろしく触れたものを凍らせたり天候操作して雪を降らせるなどが可能となっている。

魔王版ということで上位互換されており、その気になればガチなレリゴートも可能。

使用者の精神的なものを凍らせることも可能なため、露子はこれで何百回と殺した記憶を凍らせて精神崩壊しないようにセーブを掛けていた。

が、凍っているだけだったので氷解はする。

100万回目はすでに精神崩壊一歩手前だったりした。

・不老不死

最後は死亡で締めくくるためにオンオフ可能となっているラスボススキル

・模倣

技の模倣が可能となる。知っている技なら直接確認しなくても使用可能・・・なので、

漫画で見ただけ、VTRで見ただけというのでも利用可能。

格闘術などの不備を補うためのスキル

ただし魔法等は実際に目視しなければ使用不可

・ドレイン

相手の精气（エネルギー）を奪って自分の体力に変換するスキル

半径500メートル以内が有効範囲

こちらはオンオフができないものの、強弱が可能。エネルギーを一気に奪うこともじわじわと奪うことも可能。

対象の体力や精神力によつて持っているエネルギー量が違うため、すぐに倒れる者もいれば、中々倒れない者もいる。

・帝具の無効化

ありがちなラスボススキル（笑）

主に帝具独自の機能を停止させる能力であり、効果は20分が限界
有効範囲は半径1キロ。

遠距離からの攻撃は防げないため、パンプキンなどでの超遠距離攻撃は有効

・言語調整

魔王として生きとし生ける生物の言葉を理解する能力

また、帝具であるコロの言葉なども理解可能

その気になれば無機物の言葉も聞き取ることができる

・猛獣使役

危険な動植物や危険種などを問答無用で従わせる能力である

魔王として部下がいないのは困ると思つたロッドバルトが付け加えたものの、実際使うことはあまりなかった。

次回から転生した露子さんの物語

転生先も考えてありますが・・・どういう方向性がまだ未定

シリアスなものもちよつとは考えてますが、大体はゆるーい感じの内容になりそうです。

ではでは失礼いたしました。次回からはゆっくり更新です

転生編

タツミの決意とシユラの憂鬱

タツミの故郷は雪が積もる辺境の地である。とはいえ、比較的四季は楽しめるのだけれども……

タツミには姉がいる。

名前は露子、父によく似た黒い髪だったが……目の色だけは両親と違っていたし、目の色も色違いであった。

何故だかよく分からないが、聞いてはいけないような気がしてしまい、直接聞いたことは無い。

露子はタツミが幼い頃から一緒に遊んでくれていて、面倒見も良かった。

彼女は不思議な力が使えていて、大人からも頼られていた。危険種を追い払うこともできたし、氷で滑り台なども作れた。

自分は不思議だと思っていながらも、村の人たちは何も言わないし何も聞かない。姉の不思議な力を不思議だとは言ってないし、当たり前のように受け入れていた。

……タツミが7歳、露子が10歳になった頃、辺境の村に帝都の兵士がやってきた。

何の話をしていたのか幼いタツミには分からなかったが、どうやら姉を連れて行くとのこと

まだまだ姉に甘えていたタツミはもちろん泣いて引き留めようとした。

「ねーちゃん！ いっちゃんやだよ！」

「タツミ、ごめんね。お姉ちゃんは帝都に行く用事があるから」

「やだよだ！ ねーちゃんがいなくなるなんてや」 だあ” あ” あ” あ” ！」

両親も村の人も困るほど号泣して駄々をこねていたものの、露子は結局帝都へと向かってしまった。

そして彼は決意する

いつか姉を迎えに、帝都に行くこと

「タツミだけかよ覚えてないの・・・」

「タツミ以外のみんなが覚えているっていうのにな」

泣きじやくるタツミを両親が宥めている間、彼と同年であるイエヤスとサヨが呟いた。

そう、タツミ以外の故郷の人々はみな・・・ループ時の記憶があった。

最初の記憶も、何度も繰り返した記憶も、（読者の人々に分かるように例えるならば）原作と同じルートの記憶も

だからこそ、氷雪の魔王が生まれた時は皆が驚いたものの、普通に受け入れたかつては彼女が故郷を守ったこともある、その記憶もあつたからだ

もちろん滅ぼされたこともあるのだがそこはご愛嬌、要約すれば彼女が前の世界で成し遂げた目的を知っていたりする。

知らないのは・・・タツミだけ、だ。

「でもオネスト大臣がツユコを呼ぶってどういうことだろうな」

「オネスト大臣も前の世界の記憶があるのかしら？」

「仮にも氷雪の魔王を呼び出すなんて、また死にたいのか？」

「露子がそんなことするとは思わないけど・・・そもそも露子は転生してるじゃない」

「だよなあ・・・しかもタツミの姉貴だしな」

「・・・帝都が圧政を敷いてるなんて噂も効かないから安心はしてるけど」

「・・・まあ、露子が本気を出せばなんとかなるだろ」

2人はそんなことを言いながらも、明日からタツミをどう慰めるかに頭を抱えるのだった・・・

私はループ能力はあるが、転生能力は無い

つまりこれは・・・あの株式会社レイクオブスワンの社長か、その関係者が何かしたのだろうか

私は確かに、あの時死んだのだ

何度も何度も経験した死の痛みを味わったはずだ

私を帝都に連れて行こうとする兵士たちはループしていた時の記憶は無いらしいが、故郷の人々はあつたし・・・これは、今まで無かったことだ。

イレギュラーだらけだったけれど、魔王のスキル・・・基本的なものは残っているらしい

・・・でも、なぜ私が呼ばれたのか

・・・オネスト大臣には記憶があるのだろうか

・・・私のことを手駒にする予定なのか、よく分からない

何度かそういう経験があつたけれど・・・

不安だらけだが、とにかく大人しくしておこう。

周囲を凍らせないための手袋を外す機会が訪れないように祈るしかない

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミに会いたい

タツミを全部支配したい

タツミの笑顔がみたい

私がそう思ったのは記憶を思い出してすぐ思ったことだ。

そのためにながざわがざわ5歳の時に母を危険種から救い、父に認めてもらって帝都へと移り住むことにした。

私だけかわからないが、どうやら元々の強さを保ったままらしい

これよりもさらに強くなり、絶対にタツミを逃がさない

タツミは帝都に来るのはループしていた記憶で知っている

だからこそタツミが来るその瞬間にタツミを捕まえて私のものにしよう

何度も何度も繰り返した記憶が今でも夢で現れる

最初の2回は露子がない世界

3回目は露子と出会った世界

そして、4回目からはあいつが・・・

馬鹿な奴だな。他人助けようとして自殺みてえなことしやがって

露子の前で、俺がタツミの野郎に殺された記憶をまだ思い出す

タツミの野郎は最初から知ってて、だから俺を殺したのか

・・・露子の野郎も知ってたあたり、問い詰めてえところだが・・・

・・・あの時の必死そうなの、泣きそうな顔を今更ながらに思い出してイライラする

今度会ったら一発殴ってやる

「親父、何してんだ？」

朝起きると、親父が何やら忙しそうにしていた。

他の兵士たちも使っているようだし、宮殿に賊でも出たのか？

「いえ、実は新しく家族を迎えようと思ひまして。確か10歳ほどの少女ですね」

「・・・は？」

「かなりの才能を持った少女なんですよ、それこそまるで魔法が使えるような」

「！」

「だからこそ家族として迎え入れようかな、と」

おい、それってまさか・・・

「名前は露子といます」

やっぱりか！

親父は・・・でも、親父もループしてた時の記憶はあんのか？

俺に一度もそんなこと・・・いや、俺も親父にそんなこと話してないしな。

そんなことはどうだっていい！

それよりも露子がここにいいのか！

「それじゃあ、俺の義理の妹とかになるってことか？」

「違いますよ」

・・・？

「後妻にします」

その日、俺は初めて親父を殴った

新米將軍ナジエンダさんの一幕

私の名前はナジエンダ、花も恥じらう17歳。ついでにモテ期真っ盛り！な帝国將軍だ

そんな私には前世の・・・いや、違うな。何度も人生を繰り返してきたという記憶がある。不思議なことだが、覚えているのだから仕方がない。

何度も何度も似たような人生を歩んできた

帝国の將軍となり、革命軍へと移り、ナイトレイドのボスとして生きて・・・

その多くの人生は、魔王によって殺されることで終わっている。

いや、正確に言えば魔王の「やり直し」とやらに巻き込まれたと言っておこう。

前回はやつのことで魔王を倒したわけだが、どうやらまた最初に戻ってきたらしい。

・・・記憶を思い出した時、私は5歳だった。

これからどうすべきか考えていたものの、今までの人生と違って、今回はどうやら帝国は平和らしい。

だからこそ、もう一度私は帝国の将軍になったのだが……

「ナジエンダ、帝国の国境警備ご苦労であったな」

「はっ……しかし、陛下、その」

「なんだ？」

「いえ、また褒美は部下に与えてください」

「うむ」

目の前にいる皇帝陛下に一礼して謁見の間から外の廊下に出た。

おかしい

確か私がナイトレイドを指揮していたところに陛下が今の年齢になっていたはず……陛下が今までよりも早く生まれているのだ

おまけにその陛下は類稀なるカリスマ性と戦略性で、この年齢にして皇帝として見事な手腕で帝国を治めている。

「ああ、これはこれはナジエンダ将軍ですか」

「オネスト大臣、ですか」

左頬に大きな湿布を張っているオネスト大臣が、骨付き肉を食べながら私に話しかけてきた。今のところ、皇帝陛下を傀儡にしている様子はないものの・・・油断はできない。

「あの、どうなされたんですか？」

「いやなに・・・息子に殴られましたな」

「えっ!？」

「あの子ども反抗期なんですかねえ・・・そんなに私が後妻を迎えるのが嫌なんでしょうか」

「後妻・・・ですか」

「ええ、後妻です」

大臣に正式な妻はいなかったはず・・・やはりこの世界は今までとはかなり違うらしい。しかしこのオネスト大臣が後妻に迎えるとなると、もしかしてかなり悪女なのは・・・

「あの、どういう方なんですか？」

「おや、ご興味がお有りです？」

「ええ・・・大臣の息子様が反抗なさるほどですから、どういう相手かと」

「見た目は普通だと思いますが・・・少しばかり若いせい、心の整理もつかないのでしよう」

「お若い・・・となると、かなりの年の差になるんですかね？」

「彼女が10歳ですからね、シユラも複雑だったかもしれない」

「・・・」

「どうなされました？」

「・・・10歳の年の差ですか」

「10歳の年の差ではなく、10歳の後妻です」

「・・・」

「後妻として迎えると言った直後に殴ってきましてね」

「・・・そう、ですか」

初めて大臣の息子の対応がまともに見えてきた

私も今すぐにも殴りたくなったからな・・・

「東方の昔語りで、自分好みに妻を育てるというものがありましたな」

「ソウデスカ」

「私もなかなか好みの女性に会えませんでしたが、会えないなら自分で育てれば良いと気が付いたのです」

「ソウデスカ」

今すぐにも殴り殺したほうが世のためなのではないだろうか

「それではまた」

「え、ええ・・・」

上機嫌で去っていく大臣の背中を見ながら、今すぐにも大臣を暗殺したくなつた自分を必死に諫めた。

足早に宮殿の自室へと戻る。

胃がぎりきりと痛むのは気のせいだろうか。

宮殿の自室に入る直前、声を掛けられた。

・・・皇帝陛下と同じく、今まで無かつたイレギュラーな存在なのだが・・・

「ふふん、また功績をあげたのだなナジエンダ！」

・・・帝国最年少将軍エスデス（12歳）が私の同僚となつて居るということだろうか

「・・・あ、ああ。そうだな」

「見ていろよ！私ももつと功績をあげる予定だ！」

「そ、そうか・・・」

「む・・・なんだ、私の顔に何かついて居るか？」

「いや、そんなことはないぞ」

適当に誤魔化してその場を後にする。

今までのトラウマもあるのだが、何よりも……この“エスデスは記憶持ちなのだ。私が記憶を持っているとバレているかは知らない

ただ、前にエスデスの手帳を拾ったときにひたすらタツミの名前やタツミを描いたイラストがあつたから間違いない

……思わず思考停止したほどだ。

むしろ何か悪化しているような気がして怖い

タツミがもし来れば監禁しかねないほどの愛情深さに戦慄してしまう。

「それよりも分かってしているか？茶髪で緑の目をした男がいたら私に教えろよ！」

「あ、ああ、分かっている……エスデスが探している男の子だからな」

「ああ！いたら言ってくれ、すぐにでもかけつける」

そう宣言するエスデスの腰には首輪と手錠がいつもベルトに引っ掛けられている。本人いわく「絶対に逃がさないため」らしい

「そ、それじゃあな」

「お前もちゃんと休めよ」

エスデスに別れを告げ、自室に戻る

「ただいま・・・」

「ああ、お帰り」

自室には私の帝具であるスサノオが夕食を作って待っていてくれた。

スサノオは私が遠征の折に発見し、起動したのだが・・・どうやらスサノオは今まで世界の記憶はないらしい。

・・・だが、いてくれて助かった。

「今日も美味そうだな」

「ああ、腕によりをかけて作った」

「いつもすまない」

「なに・・・主人の身の回りの世話をするのも俺の仕事だ」

「・・・お前は変わらないな」

「？」

「いや、なんでもない」

大臣がロリコンだろうが皇帝陛下がしつかりしていようがエスデスがヤンデレだろうが・・・帝国の民衆が平和に過ごせるなら、それは良いことなのかもしれない

何より・・・こうして変わらない、大事なものもあるのだから

渡る世間はロリコンばかり

帝都に到着すると、私知っているよりも賑やかそうに人々が行きかっていた

帝都での圧政は聞かなかつたが、どうやら今回は平和な世界・・・らしい

実際はどうかわからない。100万回繰り返し返して、ずっと同じような世界だったから・・・

「・・・」

きよろきよろと見渡していると、そのまま馬車は宮殿へと入っていく

どうしようか・・・大臣に利用されるのだろうか

いざとなれば凍らせてしまえばいいのか、でも、そんなことするのは・・・じゃあドレイン（強）なら逃げられるかもだし。

ただ、逃げるだけだと、帝都の人たちも故郷の人たちが危ない・・・それは嫌だけど、でも、もう殺すのは・・・

「着いたぞ」

「あ、あの、はい」

「このまま大臣と会うことになってる」

「あの、でも、服とかこれでいいんですか?」

「皇帝陛下との謁見でもないし、大丈夫だ」

「は、はあ・・・」

迎えに来た軍人3人が私を案内し、宮殿の中を歩く

懐かしいな。何十回何百回とここを最期の場所にしたから嫌でも思い出す。

セリユーちゃんのコロに食べられたり、エスデス様に拷問されたり、そういえばワイルドハントのみなさんの玩具になって死んだこともあるなあ。

スタイリツシユさんに改造されかけて死んだのも記憶に新しい

逆に、ここで全員殺してリセットしたこともある。

嫌な記憶

でも、まだこの世界は大丈夫なのかもしれない

前方のほうから、女性を伴った男性が歩いてくる

あの姿は・・・チョウリ大臣とスピアさん!?

まて、スピアさんの見た目が原作の時間軸と同じ・・・?

「これはチョウリ大臣とスピア様!」苦労様です!」

「そんなにかしこまらなくても良い」

「そうですよ」

この世界は今までの軸とは違い、年齢操作もされて・・・とそこまで考えたところで私の思考は途切れた。

なぜかって？

スピアさんが私の足もとまで綺麗に滑り込んでスカートの中を覗いてきたのだ。

「ツツ・・・!!?」

「あ、すみません。つい女兒を見かけるとパンツの色を確認したくて・・・」

「えっ、あ、ば、ばんつって・・・」

「白と水色の縞模様なんてベタですが、とてもかわいらしいと思いますよ」

「口に出さないでくださいわああああ!!!」

スピアさんがどうやら状態異常のようです。

「こちらスピアダメじゃないか」

「すみません父上」

ああ、良かった。チヨウリさんはまともなようだ

「まずは履いている靴下をもらうことから始めないと」

前言撤回、おかしかった

「あ、あのこちらの少女はオネスト大臣の客人なのですよ」

「すみませんが時間もおしているので・・・」

「申し訳ありませんが・・・」

軍人トリオは顔を青ざめつつも先に進もうとチヨウリさんとスピアさんに進言する。

この様子からみるに普段からこれなのか・・・

廊下を進むと、大臣が暮らしているフロアへとやってきた。

オネスト大臣は居住区と執務室を含め、宮殿の一面を与えられているのだ。これは今までの世界と変わらないようだけど・・・

そのまま扉を開けると、オネスト大臣が執務室の机に座って待っていた。

軍人トリオは扉の前に待機し、私は少しずつ前へと進む。オネスト大臣は椅子から立ち上がって私の前までやってきた。

「待っていましたよ、露子さん」

「は、はじめ、まして・・・です。オネスト大臣様」

「あなたが来るのを一日千秋の思いで待っていました」

「は、はあ・・・」

「ここからどんな難問をふっかけるのだろうか。」

暴力で解決はしたくないが、でも・・・

オネスト大臣はその場で跪き、私の左手を掴んだ。

薬指に嵌められる、私の右目と同じ深紅の宝石が彩られた指輪

「私と結婚してください」

・・・ん？

「私の後妻になってください」

「あ、あの・・・」

「欲しいものならなんでも与えますよ」

「いえ、あの・・・」

「もしかして自分の能力目当てだと疑ってますか？ いえいえ、そんなものではありませんよ」

「えっと・・・」

「その証拠に今からでもベッドにいつて私と共に」

そのあとに続く言葉を聞く前に天井から誰かが大臣を押しつぶした

「それ以上はやめんかああああ!」

思わず驚いて尻餅をついてしまう。

すぐに誰が落ちてきたのか確認すると・・・大柄な男がそこにいた。

・・・シユテンさん、かな。少し若いみたいだけど、おそらくそうだ

「何をするんですか!あなたは部下でしよう!」

「大臣、さすがに10歳児の少女に手を出すのは倫理に反します」

「愛があれば関係ありません!」

「知り合ったばっかりだろうがああああ!!!」

そのまま綺麗に大臣の腹部にパンチをぶち込むシユテンさん

ごもつともなツツコミをありがとうございます。

ああ、うん、今もちよつと状況についていけないが・・・貞操の危機だったのだろうか。いや、その、まあ・・・凍らせたりできるけどさ・・・

そもそも貞操の危機なんてワイルドハントに面白半分玩具にされた時ぐらいだったからなあ・・・どつちかと言えばグロメインで、エロメインじゃなかったけど・・・

まさか自分の凡人クオリティでこうなるなんて思ってたよ

「大丈夫か少女よ」

「はい・・・」

「怪我が無くて良かった」

「そ、うですね・・・ありがとうございます」

「気にすることは無い」

「この世界のシユテンさんはまともなのだろうか？

魂の救済とかそういうことを言わないあたりはまあ・・・

この様子だと多少おかしいところもあるが、大丈夫な感じなのかもしれない

「少女は慈しむものであつて触れてはならぬからな。イエスロリノータッチだ」

・・・この世界は大丈夫じゃないのかもしれない

羨ましいからそこ代われ

オネスト大臣と会話（と呼べるのかは謎だが）した後、宮殿内の一室に引越し作業をすることになった。

私の荷物なんてそんなに無かったのだが、オネスト大臣が用意したらしい。

基本的な家具類や調度品はあるが・・・そういえば服が無いなあ

そんなことを考えていると、復活したらしいオネスト大臣が「おや、ここにいましたか」と声をかけてきた

回復速度早いな・・・いや、まあ、もしかしたらシユテンさんが手加減したのかな？

割と本気で腹パンしたようにも思えたが・・・

「あ、あの、洋服が無くて・・・」

「一緒に買い物にでも行こうと思いましたが」

「・・・大臣様と!?!」

「ええ」

なんだろうか、身の危険を感じてしまう。

どうにかできないことはないが、私自身・・・魔王のスキルはあまり使いたくないか

らなあ．．．

「．．．」

「なんでも買ってあげますよ」

「え、あの、いえ．．．服はそんなには、というか下着なんかもあるので、その」

「それこそ私が選びますよ」

「やめてください．．．」

ブラフなのか本当なのか分からないが、少なくとも下着を選ばせるほど私は女を捨てていない（はず）

いや、恋人同士なら下着を選ぶこともありうるだろうが、恋人でも何でもない相手に選んでもらうのは．．．しかもこの場合、下着を全部把握されるという恐ろしい事態にもなりかねない。

「そ、それに、オネスト大臣も忙しいでしょう？」

「いえいえ、後妻になる相手の服を選ぶんですから時間もやりくりしますよ」

「さ、さすがに、その、それは．．．迷惑になるんじゃない？」

「迷惑だと思いませんよ、それよりも下着を選ぶほうが有意義じゃないですか。選べないです」

できればしないでほしいです

「えっと・・・あの・・・」

「ああ、もしかして緊張してるのですか？ふむ・・・少し待っていてください」

そう言つて大臣は席を外した。

この間に部屋の様子を確認して、おかしなものや何かのギミックが無いか調べてみた。

・・・疑心暗鬼に陥っているのだろうか、100万回も繰り返してきた経験からチエックしているだけだ。

・・・もう死んでもいいかもしれないけれど、故郷に残してきたタツミ君がいるからなあ

タツミ君の記憶が無いのは、多分モニターのせいなのだろう

だからこそ、故郷の村の中で唯一私のことを覚えていない、いや「知らなかった」のだ。

タツミ君はとても純粋だ。真っ直ぐすぎるところがある。

だからこそ今のまま、幸せになってほしいと思う・・・憧れの主人公としても、弟としても大事だから

「こちらです」

「そうか」

可愛らしい声と共に大臣の声が聞こえてきた。

大臣が連れてきたのは・・・小さい頃のエスデス様ことロリデス様そっくりの少女だ。

「こちらは帝国最年少の将軍であるエスデス様です」

「・・・露子、か」

「あ、あのつ、は、はい・・・露子と言います」

この年齢の頃のエスデスさんって確か帝国の辺境にいたんじや・・・というか殺気を
！感じるんですけど！怖い！

魔王を生業にしていたせい、殺気には敏感になっている。だからこそ余計に、肌を
刺すような殺気を感じる。全身にナイフを刺されているような気がしてくるレベルで
の殺気と言えば、少しは伝わるだろうか。

「私も準備して参りますゆえ、その間にお二人で話しててください」

大臣が席を外した途端に、エスデスさんに一気に距離を詰められて押し倒された。

「貴様、記憶はあるのか？」

「え、あ・・・」

「魔王としての記憶があるのか？」

エスデスさんの視線は恋敵を発見した時と同じような、それこそ視線で殺すと言わ
んばかりの殺気を宿している。

「ひゃ、ひゃい……」

あんまりに怖くて半分泣きながらも返答する。

魔王をしていたからといって、何度も死んだからといって……怖いものは、怖いのだ

「……そうか」

殺気を消して、馬乗りになったままのエスデスさんが髪を掻きあげた。

掻きあげる仕草も様になるのだから、美人つてやつはすごいと思う

「あ、あの……」

「相変わらずお前はよくどもるな。しかしそうか、記憶があつてわざわざ来たのか」

「はい……その、えっと」

「貴様の目的は前の世界で果たされたのだろうか？」

「そ、その、そうなんですけど……私もよく分からなくて、気が付いたらタツミ君の……」

「タツミ!？」

私がタツミ君の名前を出した瞬間に私の両肩を掴んで嬉しそうに顔を赤らめる

「タツミがいたのか!？」

「あ、あの、なぜかタツミ、じゃない、タツミ君の、姉として生まれ変わつてて、その」

「なん……だと……!？」

珍しい驚愕した表情のエスデスさんに戸惑ってしまふ。

確かに驚くことだとは思いうけれども・・・

「露子、お前がタツミの姉・・・なのか？」

「あ、はい・・・でもタツミ君、まだ7歳だからこっちは連れてきてなくて」

「7歳のタツミか・・・羨ましすぎる」

まさか天下のドS將軍であるエスデスさんに羨ましがられる日が来るなんて思わなかった。

「大丈夫かなあ、すごい泣いて駄々こねてたから、ちよつと心配になってきた」

「なんだそれは、タツミのそんな姿を見たのか、私にも見せろ」

「さ、さすがにそれは・・・」

「魔王ならできるだろう」

「えっ、あ・・・が、頑張ります、けど・・・」

「お二人とも準備ができま・・・」

部屋に入ってきたオネスト大臣がその場で硬直してこちらを見ている。

そういえばエスデスさんが私に馬乗りになってたから、襲われて殺されそうになって

いると思ったのだろうか？

「大臣、タイミングが悪すぎるぞ」

「え、えつとですね・・・」

「エスデス様、羨ましいのでそこ代わってください」

「こちらも目が本気である」

「エスデスさん、全力で弟の姿を見せてあげるので大臣と代わらないでください」

男性特有の獣の目って、怖いですね・・・

クズはやはりクズだった

それがかつて体験した記憶だと気が付いたのは、成人してからのことだった。

それまではただの既視感や夢の類だと思っていた、いや、思い込むようにしていたのだ。

この世の中に魔王なんているわけがない、と

ただ、現実是非情である。

初めはいなかったはずの存在が、当たり前のように存在するように

殺されるまで自分の思う通りだったことが、障害がいつのまにか増えることに

・・・ただの出自不明の作家が、魔王になったように

何かの意図が感じられるかのように、同じ人生を何度も繰り返してきた

なぜ今になって思い出したのかは分からないが、一番最後の世界で魔王を倒したから
なのかもしれない

思い出してまず真つ先に考えたことがある

皇帝陛下よりも魔王を手に入れたほうがいいのではないか？

相手はエステス將軍やブドー大將軍も霞んでしまうほどの能力を持っている。

だが、その力に反して彼女のメンタルは弱い

いや、籠絡しやすいと言えればいいだろうか。

彼女のことを優しいと皇帝陛下はどこかの周回で言っていた。だが違う。

私からすれば「他人から嫌われたくないがゆえに、他人の長所を見出して対立を避けている」ように見える。あまり敵対心を持ちたくないのか、それとも敵対心を持たれることに恐怖しているのか・・・どちらにせよ、その気になれば籠絡することはたやすいはずだ。

彼女自身を手駒にできるのであれば僥倖である

・・・が、年を経て、シユラが生まれてきた。予定調和と言えばそうなるが、嬉しさは特になかった。シユラは繰り返してきた周回で何度も失敗を犯しているのだ。

やはりクズはクズでしかないだろう。

母体を選びぬいて、今度は失敗しないようにしなければ・・・そう思っていた時に気が付いたのだ

彼女でなくともかまわない

いつそ、彼女の産んだ子供でもいいのではないかと

露子を手駒にするよりも、露子に自身の子を産ませて手駒にしたほうが遥かに良い
すぐに占いを司る帝具の使用者に掛け合い、露子がこの世界にいるか調べさせたの
だ。

それから少しずつ彼女の現状や住んでいる場所、年代も調べ上げ・・・そして、見つ
けた。

だが気が付かれてはまずい

臆病ではあるが、あれでも何万回何十万回と人を殺してきた魔王なのだ。

いざという時には牙を向けてくるのは明白である。

定期的に皇拳寺の者や私兵を遣わせて連絡させ、時折私も彼女の様子を観察した。

そして

恥ずかしながらいつのか私の方が先に好意を抱いていた。

ぶつちやけると一番最初に知り合った時から周囲にいないタイプの女性だったので
興味を持つてはいたのだ

まあ、わざわざ手を出すのも面倒なので傍観して楽しんでいましたが・・・

あれですね、幼女ではありませんが見ていて可愛いですね。

「ついつい「子供ができたらあんな感じなんでしょうね」って何度も思いましたよ、ええ。」

もちろん何も知らない相手からすれば私がペドフェリアかロリータコンプレックスに見えることでしょう

シユラにも初めて殴られ、シユテンからも腹にパンチされ、後妻ができるとブドー將軍に報告したら便所蟋蟀を見るような蔑んだ目線を向けられましたからね。

ですが私はめげません

予定としては早めに子供は欲しいので3年以内には手籠めにしたところですしね
この世界では幸せな家庭を築くんですから！

そんなことを思いながら、大臣は帝都にある女性用下着屋の前のベンチに座って待っていた。

もちろん周囲から目立っているが、今の彼は気が付いていないようだ。

「大臣が外で待っていてくれるのは助かりますね」

「下着屋だから自重させたぞ」

12歳ながらも色気のある下着を物色するエステス

露子は遠慮がちに地味な下着や安い下着を買い物かごに入れながら苦笑いをした。

「さすがエステスさん……大臣の手綱握ってますね……」

「手綱もなにも、私は支配する側だからな。しかし露子……まさか大臣に求婚されるとはな。世に言うモテ期でもきたんじゃないか？」

「あはは、そんなことないです。きつと私が物珍しいから所有したいだけなんですよ」

「そうか？確かに能力が珍しいが、能力目当てならば私のように同盟を組むだろう？」

「それは……好意を抱かせて魔王の力を思い通りにしたいのかもしれないかもしれませんが……私自身は何のとりえもない、ただのクズで役に立たない人間なんですから」

あながち間違いでもない（むしろ半分は正解している）考えにエステスも少しの間沈黙する。

しかしエステスは「それは違うぞ」と露子に返答する。

「お前は確かにメンタルも器量も甘いが、お前自身が思っているよりは長所はある」

「長所、なんてそんな……」

「大体お前は自虐も過ぎているし、なによりもそれを自覚していながら直さないだろう。」

その悪癖をまず直せ」

「は、はい……」

「だが、お前の甘さを優しさだと……ウェイブやランは言っていた。そういった部分を長所として捉える人間は多いそうぞ」

「そうなんですかね……私の優しさなんて、自分を守りたいだけの偽善ですよ」
「自覚できているだけ貴様はマシだ」

さて、聡明な読者はすでに気が付いているかと思うが、彼らは見た目は10歳と13歳の少女

そしてここは帝都の普通の店……女性下着専門の店である。

彼女たちのおよそ子供らしくない会話に、店員も他のお客も一歩引いている光景が目に浮かぶことだろう

実際、その通りの現状になっている。

「(なにかしらこの子たち……)」

「(最近の若い子は意識が高いのね)」

こんな感じの感想を持たれていたのだが、彼女たちが知ることはないだろう。

女性の買い物はなぜ時間がかかるのでしょうか？

この疑問については私が女性に生まれ変わらなと分からないことなのかかもしれない。
い。

宮殿にやっと戻ってきた頃、私の私室前にシユラが待っていた。

「親父、やっと帰ってきたのか」

「ただいまです。何か用事ですか？」

「・・・新しく家族になるやつ、顔を見に来た」

まだ納得してないのか、ふてくされたような顔をしながらシユラが呟いた。

「ええ、それならあちらの部屋に今はいるかと」

「ありがと。じゃ、ちょっと行ってくる」

・・・シユラの様子になりますね。

シユラがループしていた時の記憶を持っているかはわかりませんが、気を付けることに越したことはないでしょう。

私室に戻り、秘密の抜け道を通って、壁を隔てた彼女の部屋に赴く。

部屋に付けられたマジックミラーから部屋の様子が分かる仕組みだ。

これから気が向いたらこれで部屋を観察する予定でしたが、さつそく役立ったので嬉しいですね。

〈おい、露子〉

〈えっ、あ……えと……〉

〈……〉

〈……〉

〈……もう本は出さないのか、先生さんよ〉

〈!!〉

……なるほど、シユラは覚えていたようですね。

しかしシユラ、少しずつ距離を詰めていくやり方はどうもいただけませんね。まるで貞操を奪おうとしているように見えます。

私の後妻なのを知ってるはずなのに……まったく、困った愚息ですね。

〈あ、あの……〉

〈……〉

そのまま距離を詰めたかと思うと、露子を殴りつけました。

綺麗に頬を殴られた露子はそのまま床に倒れこんで……シユラは後で叱りつけておかなければなりませんね。

〈ツ・・・!〉

〈ふぎけんなよ、あ“あ”?・・・八方美人もいい加減にしやがれ〉

〈あ・・・のっ・・・〉

〈自己犠牲だなんて自己満足に浸ってんじやねえよ、んなことして誰が喜ぶんだ〉

〈そのっ・・・あ、の・・・〉

〈てめえの人生を、他人のために使ってんじやねえよ。てめえの人生はてめえのもんだろうが〉

〈ご、ごめっ・・・んなさい〉

〈謝ることじゃ・・・〉

〈ごめん・・・ひつく・・・〉

〈!?なっ・・・なんで泣くんだよ!?〉

いや泣くでしょう、いろんな意味で

少し呆れながらも、いつもとは違った姿のシユラに何か感じた瞬間、天井からシユテ
ンが降りてシユラを勢いよく踏みつけました。

ナイスですシユテン、あとでポーナスでもあげましょう。

〈イエスロリ!ノーヴァイオレンス!〉

〈わけわかんねえこと言ってるじゃねえ!俺は大臣の息子だぞ!?上司の息子にてめえ何

してんだー！

〈ロリを泣かす者に死あれ〉

〈おいてめえ殺す気か!!!〉

〈あ、あの・・・殺しちゃ・・・〉

〈ロリに免じて半殺しで済ませてやろう・・・小僧、かかってこい〉

〈上等じゃねえかこのロリコン野郎・・・キツチリ殴り殺してやんよ〉

・・・まったく・・・

さて、エスデス將軍かナジエンダ將軍でも呼んで収拾でもつけましようか。

皇帝陛下の真意とブドー大將軍の苦慮

皇帝陛下と帝都を守ることは、代々受け継がれてきた家訓だだからこそ私は・・・オネストを警戒している。

將軍は政治に口を出してはいけない。しかし、それ以前に奴の動向は皇帝陛下を脅かすものではないかと睨んでいる。

陛下に害を及ぼすならば今すぐにでも処罰するが、まだ決定打が見つからない

・・・それ以前に10歳児を後妻に迎えると言っていた時点で社会的に抹殺したほうが良いかもしれないが

「ブドー、気にするでない。オネストも大事な家臣だ」

「・・・陛下」

「お前は帝都の守護に専念してほしい」

「・・・御意」

陛下は齡12としては類稀なる才覚で帝国を治めている。

他の將軍や文官は陛下を一目置いているが・・・しかし時折、私には陛下の考えが分からないことがある。

何かを抱えているような、何かを秘めているような憂いた表情をしていることがある
・ ・ ・ いや、何かあれば私は陛下の盾となればいい

「皇帝陛下との謁見？」

「謁見といえますか．．．皇帝陛下が個人的に貴方に今から会いたいと」

露子にそう伝えると、おろおろと焦って俯いてしまう。

ああ、可愛いですね本当。いやそうじゃない、なぜ陛下が彼女に会いたいといったのか．．．真意を図りかねますね

陛下も記憶があるのでしようか？

「あ、あの、わか、りました．．．」

「いいのですか？」

「うあ．．．は、はい．．．その、偉い人から、言われましたし．．．」

しどろもどろで顔を赤らめて話して．．．早く手籠めにしたいですね。

それはともかく、陛下のところまで連れて行かなければ

露子の力を知っていて、興味を持ったのだろうか

・・・ループ時の記憶があるのだろうか？

いや、あるとするならば私はすでに処刑されているだろう

この世界では、シユテンやチョウリたちのように性格が少し変化しているという考えが妥当ですね

「あ、あの、どうしたんですか」

コートの端を遠慮がちに掴んで、上目遣いで露子が尋ねてきた

「ああいえ、なんでもありません。考え事をしていただけですよ」

「そうですか・・・」

・・・前髪が長すぎますね。メガネも邪魔です。

折角のオツドアイが見えにくいですし、何よりも表情が見えにくいのが難点です。抱くときに表情が見えるほうが興奮しますからね!!!

「それでは外で待つておきます」

オネスト大臣はそう答えて部屋から出ていく。

今、皇帝陛下下の私室には・・・私と、陛下だけだ。

空気が重いとまでは言わないが、気まずい空気というか、押しつぶされそうになる。

陛下を何度も殺したことがある私からすれば、罪悪感しかない

陛下は陛下で黙ったまま私を見つめてくる。ループしていた時とは違い、天真爛漫とは違うようだ

「お前が露子か」

「は、はい……」

「不思議な力があるそうだな」

「あの、その、ちよつとだけ……ですけれども……」

手袋をはずして、そつと机を触る。

ひんやりと空気が凍り、触った部分が凍っていく……机が全部凍る前にすぐに手を離して手袋を嵌め直した。

「……その、素手で触ると、凍らせてしまう、ので……」

「……そうか」

少し残念そうな、憂いた表情をしてそう答えた。

なぜそんな顔をするのだろうか？も、もしかして私何かしたのだろうか、下手なことしたのかな……

「・・・露子は、オネストと結婚するののか？」

「えっ、あ、ま、まだ・・・それは・・・その」

「・・・そうだな、まだ決めれないだろう」

苦笑いをして、皇帝陛下が私に近づいた。

自然な流れで手を取り、両手で私の手を包み込んだ

そして、にっこりと私に笑いかける

「何かあれば、余にいつてくれ。力になるぞ」

「えっ・・・あ、は、はい」

その笑顔は、私の知っている皇帝陛下の笑顔と似ているようで、どこか違っている気がした。

「・・・それにしても、オネスト大臣も何を考えてんだかな」

ゴズキは天井裏でぼやきながら頭を掻いた。

羅刹四鬼として仕事はこなすものの、やはり上司のロリコン趣味は辟易しているようだ。

「ロリを嫁にしたい気持ちは十分理解できるがな」

「理解すんじやねえよ」

・・・正確に言えば、同僚と上司のロリコン趣味に辟易している

「そういえばお前、そろそろ交代の時間だろう？」

「おつとそういえば・・・」

「また娘のところか？」

「当たり前だ。俺の可愛い娘の顔を観に皇拳寺までな」

「悪いとは言わないが、家族愛とやたらに浮かれていますといつか足を掬われるぞ」

「幼女に興奮してるてめえにだけは絶対に言われたくないな」

「・・・お前の娘は良いロリだ」

「ぶつとばすぞ」

お互いに憎まれ口をたたきながらも警戒を怠ることは無い。

帝国が平和とはいえ、やはり皇帝陛下やオネスト大臣の命を狙う賊や政敵は数多い・・・暗殺者が送り込まれることもある。

そのために羅刹四鬼はこうして陰ながらに活動しているのだ。

「ま、いざとなれば俺には村雨があるからな」

「帝具を過信するなど言っているだろう」

「分かつてるって・・・そういや、今度はオネスト大臣が暗殺者育成するってんで帝国中から子供を集めるらしいぜ？」

「帝国中のロリが集まるのか・・・」

「その言い方はやめろ」

そんな天井裏の会話を、皇帝陛下は聞いていた

「・・・そろそろ、か」

「?何がですか?」

露子は不思議そうに首を傾げる

「いや、なんでもないぞ」

外伝：タツミ憑依のモニターさんその後

ガンガンJOKERは愛読書で、アカメが斬る！も1話目からずっと追いかけていた。できる限りグッズは全て手に入れたし、公式情報だつて誰よりも早く仕入れるようにしていた。

アカメが斬る！のファンだからこそ、そこまでしてきたのだ。

好きで好きで、こんなにも好きになった作品は無かった。

だからこそアニメで増えた俄かや腐女子の類は嫌いだったし、対してグッズも集めてなくせにファンを自称しているような輩が嫌いだった。

アカメ関連の二次創作は全て目を通して、ダメな作品には相応の批評をしてやった。

ダメな二次創作なんて原作を汚すだけでもんな。

そんな俺に、悪魔が目の前に現れた

「パンパカパーン！」

話を端折りまくると、異世界転生やらトリップができるらしい

「お試しですよ、お試し」

「・・・お試しかあ」

「最後の一人なのでからサービスしますよ?」

「つつても、原作を崩すつてのもなあ・・・あー、でもこんなチャンスないよな」
「気長にお待ちしますよ」

基本的に原作を崩したくない

それはひとえに、アカメが斬る!が良い作品だからだ。ダークファンタジーらしい作風と世界観、殺し屋としての矜持と非常な運命

・・・もちろん、シエーレやチエルシーのように死んでほしくないキャラもいるわけだが

何よりタツミは要領が悪すぎる

俺ならもつとこうしてああして・・・

いやでも、タツミだからこそあの話の流れだし・・・

だが、ワイルドハントやセリユー・ユビキタス、クロメは許さないし嫌いだが戦犯と言つてもいいだろう。

あとはアニメのランとかもな。何の役にも立つてないのになんで生き残つてんだつて感じだ。

あれはアカメのアニメにおいて数少ない欠点と言つてもいいだろう。

延々と悩んで、タツミ憑依を選んだ。他のモニターもいるってきいたが、憑依系はかなり少ないらしい。

まあ、憑依系ってのは割と値段が低いらしい・・・転生のほうがかなり高額になるらしく、それこそ資金力のない一般人に向いてないそうさ。

「それでは特典はどうしますか？なんでもお付けできますよ」

「特典って・・・トリップ特典とかそういうのか？」

「ええ、神様転生などでありがちな過多設定もモニターなのでタダでお付けできます」

・・・こいつ口が悪いな。

まあ、わからないでもない。時折驚くほどに設定を多くし過ぎて使いきれないパターンがあるのは事実だ

「・・・普段はどんぐらいするんだ？」

「そうですね・・・ローンを組まれる方もいるぐらいには。1000円程度から数千万まで組み合わせ次第です」

「数千万!?!」

「億とかいくことも時折ありますね。その場合は臓器や肉体でも賄えますし、一族郎党の資材や人材全てを犠牲になさる方もいらっしゃいます」

「・・・そりゃ酷いな」

「何百人を犠牲にしても叶えたい願いはありますよ」

「ふーん」

「そういえば先ほどから心の中の言葉を聞きましたが・・・好きなんですネ」

「当たり前だろ？全部好きだぜ！」

「・・・そうですか」

そのあと、俺はタツミに憑依した。

10歳ぐらいからだったから大変だったがサヨが可愛くてな・・・その分修行も頑張れた。

元々タツミのポテンシャルは高いもんな

だが、タツミはどうやら故郷でも可愛がられたみたいっつか、年上から好かれていた

元の俺なんて童貞だったのにお前・・・タツミこれその気になれば食い放題じゃないか。羨ましい

・・・これで無双とか楽しそうだな。あー、サービスしてもらったときやよかった
そしていよいよ原作の流れ・・・

だが、俺が帝都に到着する直前に帝都で動乱があったらしい。俺以外のモニターどもが何かしたらしい。

チツ・・・俺が活躍する前に話が終わったらどうすんだよ！折角修行もしたのによ！
つまらないな・・・

本格的に客になるか？それもいいかもしれない。

俺のほうもつとうまくやれるって示さないとな

帝都の入り口まで行くと・・・あのシユラがモブっぽい女連れて歩いてた。

あいつ生きてたのか、しかも女と一緒に・・・また強姦でもして殺すつもりか？

さっさと始末すつか

油断していたシユラを殺すのは簡単なことだった

「あーあ、折角タダでモニターになったのにな。まあ、これでゲス野郎は始末できたからいいか」

「・・・同じ、モニター・・・？」

「ん？なんだよ、あんたこのクズ野郎の女かと思つたらモニターか。無理やり連れてこられたんだろ？可哀相にな」

「ち、ちがつ・・・」

女は戸惑った様子を見せながら治療しようとしてた。

「こいつ、モニターなら原作かアニメ知ってるはずだよな？なんで助けてんだろ

「ん？なんで助けるんだよ。そいつクズじゃん」

「で、でも、殺さなくても」

「あー？ボルスさん一家殺したりしてんじゃん。ワイルドハント全員胸糞悪いクズばっかだし、生きてる価値もないだろ。殺したほうが世のためってやつだ」

「そんな、こと」

「死んだほうがいいんだよ、さっさとぶち殺したほうが世の中のためだしな。つつても、もうこの感じじゃ他の奴らがやっちまった後かー、しゃーないな、次の世界で金払って無双すっか」

「・・・」

「お前もそいつなんか捨てろって。クズ助けたところで意味ないじゃんか。そんな奴は死んだほうがいいんだってば。それとも何？惚れてんの？男の趣味悪いなー」

「・・・」

「まだ生きてるならさっさと俺が殺してやるから、どけよ」

「・・・」

そのあと、悪魔の奴がやってきて「終了です」と連絡してきた。

とりあえず休憩室つてのに通されてしばらく待ってた。モブ女と何話してんだらう

な？

あの女の話が終わったら次は俺のつてことなのに

「終わりました。貴方の特典を聞いておきましょう」

扉を開けて、あの悪魔が入ってくる。やけににこやかなのが、なぜか引つかかった。

騙された騙された騙された!!!

ずっとあのモブ女にいっぱい食わされてた！

・・・俺はもう、何度繰り返したんだ？あの女のせいで何度もループする羽目になつてたなんて

「くそがつー！」

何考えてんだあのクソアマ！

そう思っていると、窓のほうか物音が聞こえた。急いで振り向くと、そこにはあの悪魔が窓際に座ってこちらをにやにやと見ている。

「おやおやどうしましたか？」

「つ・・・てめえ、知ってたのか!？」

「・・・知っていました。それが彼女が支払ったものだったので」

「・・・俺も追加して、このループを突破してやる」

あの女、絶対に殺してやる

「追加ですか？これ以上の追加となると・・・私との個人契約になります」

「個人契約・・・？」

「ええ、私と直接契約すれば、勝てますよ？」

「・・・勝てるのか」

「ええ、魔王となった彼女に勝てます。条件として魔王以外を殺さないことというものが・・・」

「やる。魔王だけぶち殺してやる」

「おや、即答ですか」

「あんなモブ女にずっとループさせられてたなんて悔しい。どうせ大した願いでもないんだろ」

「・・・さあ？とかく、個人契約ですね。了承しました」
にやりと、あいつが笑った。

魔王を倒した後、俺の人生は順風満帆だった

欠けることのない満月のような人生だ

天寿を全うして、俺は死んだはずだった・・・

目が覚めると、あの時の休憩室に俺はいた。

「・・・!？」

「お久しぶりです」

「お前は・・・」

「個人契約の、代償を受け取りに参りました」

やけに丁寧にお辞儀をするが、なんだか薄気味悪さを感じる。

「だ、代償って・・・金か？」

「いえいえ、そんなものではありません」

「・・・じゃあ、なんだよ」

「あなたの魂です」

「つ・・・た、ま、しい・・・!？」

「ええ、そうです」

「ふ、ふざけんなよ！今まで金や他人の命だっただろ！」

「個人契約ですから。それに・・・説明を求めてないでしょう、あなた」

悪魔が、こちらに近づいてくる。

後ずさりするが、すぐに壁に追い込まれてしまった。

「あ．．．い、いや．．．ま、まて．．．」

「最近流行りの、自己責任ってやつですよ？」

「だ、だって、あの時はお前から」

「当たり前じゃないですか。人間の弱みに付け込むのが悪魔です」

「な．．．な．．．」

「悪魔と契約したのですから、ね？」

目の前が、真っ暗になった

そして俺は気が付くとタツミとして．．．いや、女として生まれたタツミとして転生していた

．．．生まれただ時から、ハーレムスキルが付けられて、そのほかろくでもねえスキルが付属されていたのが判明するのだが、それはまた別の話だ

大浴場ではお静かに

宮殿には個室に風呂場もあるのだが、実は大浴場も存在している。

先々代の皇帝が作らせたらしいのだが、なぜ作ったのか理由を多くは語らなかつた。

あえて言うならば「覗きは男のロマン」ということだろうか……どの世界でも男という生き物は不変なのだろう。それがたとえ皇帝でも、だ。

「露子さん、大浴場に一緒に入りましょう?」

「イエスロリ! ノータッチ!」

オネスト大臣からの申し出に、思わず天井裏で警備していたシユテンがいつもの如く上から降つてきた。

「苦労様です」

「あ、あの、大浴場はちよつと……一緒に入るつてことはあの、私が男湯につてことですよね」

「当たり前じゃないですか。私としては別に女子風呂に入つてもいいんですよ?」

「どちらにしろ、あの、ダメです。みんながいるところで一緒には……」

さすがに一歩引きながら露子が遠慮がちに断る。

しかし変態は変態だからこそあきらめない、不屈の精神を持つことこそ変態の条件。

「二人つきりならいいんですね!？」

「いいわけあるかああ!!」

見事なボディブローに大臣は撃沈する。警護する人間が警護対象をぶちのめす光景に慣れてきた露子は小さくため息を吐いた。

ちなみに天井裏でコンビを組んでいるゴズキも同じくため息を吐いているのだが、露子は気が付いていない。お約束というものである。

「あ、あの、お風呂あるなら入りたいな……」

さすがは日本人

大きな風呂や温泉には本能が疼いてしまうのか……露子も例外ではなく、大きな風呂などの類は好んでいる。

「それじゃあお風呂セットでも用意して……」

「そんなものをロリに見せるなあああ!!」

「どんなものなのだろうか？」

露子は少し気になったが、見ても精神衛生上よくない気がしたのでやめておいた。

宮殿の風呂ともなると、やはりそれなりに内装も豪勢である

少しばかり賑やかすぎて落ち着きにくいのが、それでもやはり温泉は良いものだ

「いい湯ーだーなー、はははんっ♪」

つつい小さいくはあるが歌ってしまっても、まあ、仕方ないだろう

温泉は人のテンションをいとも簡単にあげてしまう

例えばそれが露子でも、だ

「機嫌が良さそうだな」

「!!?」

エスデスが自然に入ってきた瞬間、露子の思考はフリーズした。

これぞまさにデモンズエキスの瞬間冷凍とも呼べるだろう

「アツ・・・あ、あ・・・」

「どうした？歌わないのか？」

「・・・ごっつ、ごめん、なさい」

「どうしてそこで謝る」

条件反射で。そんなことも言えずに聞かれていた恥ずかしさとつい大浴場で歌ってしまった自分のバカさ加減に水中土下座したいぐらいの後悔を抱く露子。

エスデスはそういったことは気にしないことぐらいは承知だが・・・まあ、自身の罪

悪感や恥の問題なのだろう

「ああ、先客がいたのか」

タイミングが良いのか悪いのか、どうやら次に入ってきた人間がいるらしい。

「・・・ナジエンダか」

「えっ、あ・・・」

「・・・エスデスに・・・そつちのは・・・大臣の後妻だったか」

スラリとした肢体に、同性ながらも魅力を感じてしまう露子。

ドギマギしながらも簡単な自己紹介を済ませておく

「(若い頃のナジエンダさん綺麗だなー、エスデスさんも2歳年上なだけに艶っぽいなー)」

「(露子も記憶もち、か?しかし確信は持てないな。何よりもエスデスの前で記憶もちとバレルと後々面倒だ)」

「(・・・露子は記憶があつたが、ナジエンダはイマイチ確信が持てないな・・・さて、どこで引つ掛けるか)」

三者三様、思うことは全く別方向だったが表面上は温泉を楽しんでいた。

「みなさん楽しそうですね」

そこにやってきたのはスピアである

この世界での初邂逅が「パンツを覗かれた」という酷い内容のせいか、露子は思わずエスデスの背後に隠れた。

「安心してください、何もしませんよ」

にこやかな笑顔でスピアは露子に笑いかける

「私は女の子がパンツを履いている姿に興奮するだけなので、安心してください」

「（それ真正の変態ですよん）」

「父も女の子が履いている靴下を愛でて興奮するだけなんですよ。だから手は出しませんよ。靴下はねだりませんが」

「（父親も真正の変態だった）」

心の中でツツコミを入れるものの、言葉に出してツツコミを出せない露子

出したところで変態行為が止むわけでもないし、変な反論を出されて事態が悪化しかねない

「そもそもパンツや靴下を履いていることは普通のことだと思っただが」

ナジエンダのツツコミは最も過ぎるものである

・ ・ ・ むしろ履いていないとそれはそれで問題だろう

宮殿の大浴場は露天風呂も完備している。

スピアとエスデス、ナジエンダが話している間に露子はそちらへと場所を移した。
やはり人の多い場所は少し落ち着かない。

彼女たちが嫌いなわけではないが、元々はぼつちになりやすい性格なせいか、一人の
ほうが落ち着くのだ。

ふと、声が聞こえてくる。

どうやら女子風呂の露天風呂と男湯の露天風呂は隣接しているらしい

「 ・ ・ ・ なんだろう? 」

へシユラ、どきなさい! 今なら不可抗力で女子風呂を覗くことができるんですよ! へ

へ止めるに決まってるだろうが! 親父がそんなことしてみろ! 俺の立場もないだろ! へ

へ ・ ・ ・ 不可抗力なら、ロリの裸を ・ ・ ・ ロリの裸体をまじまじと ・ ・ ・ へ

へおいシユテン、お前が犯罪行為に走るなら俺は止めてやるぜ ・ ・ ・ 命をかけてな へ

・ ・ ・ 何の会話をしているんだろうか ・ ・ ・

まず覗いている時点で不可抗力も何も無いような気がするのは自分だけか。露子はそ
う考えるが、まあ、間違いではないだろう。

〈シユテンさん、ボーナスアップしますから協力しませんか？〉

〈ロリの裸を見るところまでは協力します〉

〈するなよ！馬鹿かてめえは！〉

〈チツ・・・まさかここで始末することになるとはな〉

シリアスなのかふざけているのかよく分からない会話だな、と露子は思う。

シユラとゴズキの二人がいるし、まさか本当に覗けるわけもないだろう

とはいえ、何かあつたら危ない。

そう考えた露子が湯船から立ち上がった瞬間、露天風呂の柵が吹っ飛ばされた。

『あ』

なんとというテンプレート

なんとというお約束

これも悪魔（ロッドバルト）の采配なのか、はたまた偶然なのか

男4人の視界に入ってきたのは、あられもない幼い裸体を晒す少女

手袋をしたままなせいか、一種何かしらマニアックな雰囲気醸し出している

対して男勢も基本は全裸であった

漫画でありがちなたオル規制なんてなかったんや・・・

「あ・・・」

「やあこれはこれは露子さん、いい全裸ですね」

「あつ」

「ありがたい・・・！」（尊崇のポーズ）

「おっ・・・あー・・・嬢ちゃんだけなら良かった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツツツ!!」

《裸を見られた上に4人分の異性の裸体を見て、思わずドレインを強くしてしまった》

《シユラさんとオネスト大臣、シユテンさんとゴズキさんが気絶したのはやりすぎってしまったと思う》

露子は後にそう語った

外伝：皇帝陛下と●●●のベルベットルーム

自分の私室とそっくりな造りをした部屋で目が覚める。眠り始めるといつもこの場所にやってくるせいとか、普段からあまり眠った気分とは言い難い。

机に突っ伏して寝ていたのだろう。椅子から降りてベッドへと向う

「まだ眠っているのか？」

「ん……」

「起きろ」

「……んっ、ああ、お前か……」

「今日も公務が終わったのでな」

「……そうか」

眠っていた少年にその声を掛ける。余の若い頃に少し似ている顔立ちのせいとか、何やらドツペルゲンガーという伝承を思い出してしまふ。あれは確か出会えば死ぬというものだったな……縁起が悪いことこの上ない。

しかし、決定的に余とこやつでは違うことがある

こやつは……そう、ループ時の記憶を持っている。

余はそういった記憶は一切持っていない……いや、そもそも余はこやつとは違う人間なのだから、違っていて当たり前か。

世の中でいう「二心同体」という状態……なのだろうな。

普段の公務は余が使い、プライベートではこやつに体を使わせている。

「露子とやらに会えたようだが、どうだった？」

「……余よりも幼い姿だったな。少し新鮮だった」

「良かったな。気に入っていたのだろうか？」

「……ああ、気に入っていた。しかしオネストの後妻になるかもしれないとはな」

「やはり気に入らぬか？ 余が更迭しておいてもいいが」

「そつ、それはダメだ！」

「……相変わらず情に流されやすいな。余とは大違いだ」

「そ、そんなことはないぞ！」

「説得力が無いな」

……余とは違い、あまりに幼くて純粋な者だとは思っている。

少しだけ羨ましいと思うけれど、皇帝陛下としては不向きなのだろう……信じすぎ
るのだ、こやつは。

オネスト大臣のことも、未だに捨てきれないのがその証拠だ

皇帝としての人を見る目……心眼が圧倒的に足りない。人生経験の浅さ以上に、人を信じたいという善意が強すぎる。

「反乱分子は処分すべきか、それか自身の力を見せて圧倒させるほかはないぞ」

「……余には、全く足りぬな。そのような力は余は持っていない」

「お前はまだ幼い。それに箱入りで育てられたのだ、致し方ないだろう」

「……そう、か？」

「未熟だと思うならばもう少し表に出て人と……家臣たちと触れ合うがいい。生の人間とのやりとりこそ経験豊かになるといふものだ」

幼い少年にそう応えるものの、余からすればあまり皇帝には向いていないと判断している。

余のカリスマ性を受け継いでいるものの、あまりにも経験値不足が目立ちすぎる。

「……また眠くなってきたな」

「またか……いや、子供だから仕方あるまい」

「……すまない」

「あまり気にするな、それにお前を狙っている刺客もまだいるのだ。身の安全が確保されるまでは表に出るのを控えたほうが良いだろう」

「……うむ、そうだな……」

「……」

「……その、そろそろ名を教えてくださいぬか？」

「お前が立派な皇帝になったら、教えよう」

「……意地悪だな」

「そんなことはない。そう思う前に学ばばいい」

毎日似たようなやり取りをしながら、また目の前の少年がベッドで眠る

……やれやれ、子の扱いは千年も前から慣れないものだ。

ベッドの縁に座って、少年の頬を撫でる

こんな幼いうちに皇帝の重責を背負うとは……

「こんばんは、お元氣みたいですな」

耳障りな男の声が聞こえた。

……いつも通りに、部屋の机にいつの間にか銀髪の悪魔が座っていた。作法のなっていない無礼者だな……

「……元氣も何もないだろう」

「二心同体生活には慣れたようですね」

「……悪趣味な悪魔め」

「悪趣味なのはあなたでしょう。いい加減、貴方の正体を教えて差し上げればいかがで

すか?」

「……」

「彼はきつとあなたを二重人格か何か、そういうものだとは認識していますよ?」

「……それで余はかまわぬ」

瘡に障る悪魔だ……いや、悪魔だから当たり前か

千年前にも似たような輩はいたが、それよりも悪質には違いない。

「しかし、露子さんのためにここまで準備しておいてよかったですよ。見ていて楽しいです」

「……人間を玩具扱いしているゲスが」

「当たり前じゃないですか、人間という存在は最高の玩具で人形で……美味しそうな食事ですから」

「……」

「あなただって、人を使う側の人間じゃないですか」

「……」

「始皇帝たる貴方も私も、同じ穴の貉ですよ」

嫌味ついたらしい表情で言い切る悪魔を睨みつける

……本当に嫌な奴だ

「あなたはまだまだ、皇帝陛下の心の支えになってあげてくださいね。さぼっちゃだめですよ。」

「……言われなくとも分かっている」

「そのためだけに、貴方の魂を皇帝陛下の中に入れてのですからね」

にやにやと童話の笑う猫のような笑みを浮かべている奴を殴りつけたくなる

……何を考えているかわからない、いや、ただ単に面白がっているのだろう

「……貴様は、なぜあの露子という女に入れ込んでいる？」

「面白いから、ですよ。彼女が苦しんでループしているときはとても笑いましたし、その分、魂の輝きも素晴らしいものになりました」

「……悪魔なら、魂を食べるのか？」

「ええ、そうですね。ポーナスステージが終われば、食べる予定です」

「……本当にクズだな、貴様は」

「最高の褒め言葉つてところですね。ありがとうございます」

……あの女もろくでもないモノに目を付けられたのだな

ふと、あの女を思い出して少しだけ憐れんだ

……やっと手に入れた幸せの後は、悪魔に食われるだけなのだから

変換編

緊急！選抜試験阻止事件開始

虫の知らせというものが世の中にはある。

そして今、何かこう嫌な予感がしたのだ。

・・・起きたばかりで嫌な予感つてのも、目覚めが悪いけれども

100万回も人生を繰り返してきたおかげか、スキルとは呼べないが直観力は鍛えられたと思う。

・・・そりや、奇襲攻撃されたり不意打ちされたり助けようと思った人間が次の瞬間に殺されたりしたから・・・

「・・・」

適当に着替えてダイニングルームへと向かう

オネスト大臣とシユラさんはすでに食事中のようで、香ばしいトーストの香りやイチゴジャムの甘い匂いが鼻孔を擦ってくる。

「おはようございます露子さん」

「おはようございます、オネスト大臣」

「……」

「シユラさん、おはようございます」

「……おう」

さて、とりあえずこの嫌な予感は何なのだろうか

この直感は大体、何かしら人が死んだり負傷するときのものだ

……今の時間軸で負傷や殺人となると暗殺者が紛れ込むのだろうか？

「……あの、オネスト大臣」

「なんです？」

「今日はその、警護担当は誰ですか？」

「羅刹四鬼のシユテンだけです」

「……？」

シユテンさんだけ？

確か警護は2人以上じゃなかっただろうか。何かあった時のために、と。

いつもはシユテンさんとゴズキさんがコンビで組んでることが多いのに、今日はシユ

テンさん一人だけ……か

……シユテンさんか、大臣か、シユラさんか……誰かが怪我でもするのか？

いやでも、もしてかしてゴズキさんが何かトラブルに巻き込まれるのだろうか

「あの、ゴズキさんは？いつもコンビですよね？」

「え？ああ、彼には別の仕事を頼んだのですよ。大事な仕事ですよ」

「大事な……？暗殺とかじゃないですよね」

「いえいえ、ただ今日は試験監督……いえ、なんでもありません」

……試験監督？

ゴズキさんが何の試験を監督するんだ？

……まさか

「試験ってなんですか」

「……いえ、貴方には関係ありませんよ」

「……」

……アカメちゃんやクロメちゃんたちが、樹海を脱出するあの試験か

帝国が比較的平和だとはいえ、皇帝や大臣などを狙う暗殺者は存在している。

暗殺者育成機関を作ってもおかしくはない

「……関係ない、なんて、そんな」

「貴方はゆつくり過ごしててください、できれば私と一緒に」

「……妻として、ですか？」

「もちろん」

「・・・後妻として迎える人間にも、言えないことがあるんですね」

「い、いえそれは・・・まあ、仕事のことですし」

「・・・」

「そんな下つ端の使い捨てるような人間のことなんて、貴方はこれから気にしなくても良いのですから」

「・・・」

親父と会話して、すぐに静かに立ち去る露子の後を追いかけた。

「おい、先生さんよ、いったいどうし・・・」

「・・・」

「どこ行くんだよ」

「・・・」

そのまま露子は黙りこくって危険種たちのいる厩舎まで歩いて行つた。

俺もそれについていく形にはなるのだが、「どうした」と後ろで声を掛けられた

立ち止まらずに振り返ると、小さな少女がこちらについてきていた・・・少女つー

か、知つてる相手だが。

「エスデスの姉ちゃんかよ」

「大臣の息子、どうしたんだ？」

「露子の奴、親父と話してて機嫌が悪くなってよ……なんか、試験がどうか言つてたが」

「……試験。ふむ……暗殺者育成機関が先日立ち上げになったのと関係があるのかもな」

「そういや親父がそんな話してたな」

「確かアカメやクロメの奴が機関に收容されて育つたはずだが、その試験があるのかもな」

「……あんたもループしてる記憶があんのかよ」

「隠しているわけではない。そもそもお前もあるのだからお互い様だ」

「……気が付いてたのかよ」

相変わらず我が道を行く女つつーか、恐ろしく勘も働くよな

……タツミの野郎がある意味哀れに思えてきたな

そうこうしているうちに厩舎に到着すると、いつもは少し騒がしいはずの危険種たちが大人しくしていた。

いや、なんつーか怯えてるのか？

隅っこのほうに縮こまって様子を伺っていると、いったほうが正しいだろう

「……ほお、露子のやつ、こんな能力も持ったままだったのか」

「……あん?」

「知らないのか? 奴はあまり使ってなかったが、危険種を従える力もあるのだぞ」

「まじかよ」

「ああ。あまり使ってなかったようだったが……おっと、いたぞ」

エステスの姉ちゃんに言われて視線を移すと、露子が厩舎の管理をしている奴に足止めされていた。

帝具で危険種を従えているからこそ、危険種たちの様子がおかしいことに気が付いたらしい。

「おい露……」

声を掛けようとしたと同時に、厩舎の管理者がぶつ倒れた

「っ!」

「……エネルギードレインの力も健在、か」

急いで露子のところへと向かう

「おい、何してんだよ!」

「……」

俺が問いただしても黙ったままだ。

前髪とメガネで分かりにくいのが、表情は心なしか怒っているような気がする。

「露子、これからアカメ達の試験をぶち壊しに行くんだらう？」

エスデスは露子に近づいて、不敵な笑顔を浮かべている

なんでこいつはこうも楽しそうにしてんだ・・・

露子は黙ったまま頷いた

・・・っておい、まじか

「そんなことやったら親父だつてさすがに・・・」

「・・・」

俺が説得する前にエスデスの姉ちゃんは露子の手を掴んで危険種の背へ乗ろうとし始めた。

露子は特に抵抗もしていないようで、自分も乗ろうとし始め・・・ってまって！なんで

そうなつてんだよ！

「お前らなんで乗ろうとしてんだよ！」

「・・・」

「試験会場に行くには手っ取り早いぞ」

「そういうことじゃねーよ！」

「私もついていこう、露子」

「……ありがとうございます」

「おい!話を聞け!てか俺のことを放置していくなんてふざけ……」

「なんだ?別にお前はついてこなくてもいいぞ」

「……」

「……う、うるせえな!俺も行くに決まってるんだろ!」

乗せられた気もしなくもないが、仕方ない

……つーか、これ、露子怒ってるのか?

怒ってる姿は見たことねーけど……親父のフォローをしとくか

……ついでに、今のうちにクロメとアカメのやつを自分の部下にしちまうか

使えるし、それに自分のものにしとけばウェイブの野郎への意趣返しになるからな

そんなことを思っていたシユラではあったが、エスデスはこつそりと「なるほどこういうのがツンデレというものなのかもしれないな」とか思っていたのは秘密である

樹海の王者ターザン現る

「・・・大臣、先ほどのはさすがに失敗なのでは？」

天井裏からシユテンが降りてオネスト大臣に進言する。

進言というまでもないかもしれないが。

「失敗とは・・・何がですか？」

「いくらなんでも対応が冷たいと思うのですが」

「暗殺者を育成するだなんて、可愛い後妻には言えませんよ」

本当のところは露子が記憶を持っていた場合、試験を中止させようとするのが目に見えて分かるからだ

記憶が無かったとしても・・・なるべく秘密にはしておくべきだろう

オネストはそう考えて、先ほどの対応をしたのだ。

彼女のことは無論好きだろうが、好意と欲望は別のモノである。

露子のことは愛している

けれども彼女との子を為して、その子を使って帝国を乗っ取り欲望のまま生きる目的は捨てていない

要するに、オネストは良いとこどりをしたいのだ

・ ・ ・ 元々、子供である皇帝陛下に重責を背負わせて、いいところだけ自分で利用していたのだから、仕方は無い。

「たつ、大変です大臣！」

「オネスト大臣！いらつしやいますか！」

シユテンと大臣のいる部屋に兵士2人が飛び込んでくる。

顔を真っ青にしながら、兵士たちは大臣の前へと駆け寄った。

「何事ですか」

「大臣が奥方と紹介していた少女が危険種に乗ってどこかに行きました！」

「どうやらシユラ様と一緒にのようです！」

数瞬後に、オネスト大臣の本気の絶叫が宮殿の敷地に響き渡ったのは言うまでもない

エアマンタの背に乗って目的地へと向かう

エスデスさんとシユラさんと会話することなく、静かに操作しながら樹海を探しているが自己嫌悪中のせいか集中できない

・ ・ ・ 怒ると周りが見えなくなつて失敗するのは、悪い癖だ

危険種を管理していた人には悪いことをしてしまったと思う。

「エスデスよ、お前いつから俺が記憶持ちって知ってた」

「最初からだ」

「・・・まじかよ」

背後ではエスデスさんとシユラさんが仲良く会話しているようで、なんだか少しだけ癒された。

こうしてあの二人が仲良く話すこと自体、ループした中ではほとんど無かったのだ。

「しかし話を聞くと、それは大臣が悪いな。記憶があるかどうか知らないが、好きな相手に隠し事をするなんて」

「露子だって、記憶があることを親父に黙ってんだろ。親父が何も言わねえことを怒る前にてめえもバラしちまえばいいのに」

「そういう問題ではない、女心もわからないとは親子共々救いが無いな」

「女をほとんど捨ててるあんたに言われたくねーな」

「貴様今すぐ落とすぞ」

「・・・仲は良いはず・・・はず・・・かな・・・？」

まあ、本気で戦闘してないだけマシだろう。

「・・・シユラさんの言うことはある意味正論だ」

確かに人のことを責める前に、自分ができてないじゃないか

大臣に隠し事をされて怒るなんてさ、本当に私は自分のことしか考えてない

私だって記憶があることを隠しているのに・・・

・・・後妻に迎えるとか好きとか、そういうことを言ってるから少しは良い方向に変わったのかなって、思い込んだ自分が悪いんだ

・・・あとで謝ったほうがいいのかな・・・さすがに黙ったまま出ていくのは、態度も悪かったし・・・

「ん、樹海が見えてきたな」

「おっ、まじか」

「おい露子、この後どうする気だ？」

「・・・樹海一帯の危険種を抑え込みます」

眼下に広がる樹海

もう何人が犠牲になっているのか、それともまだ大丈夫なのだろうか

・・・100万回繰り返してきたのだから、また失敗なんてしたくない

この世界でも、私は全部掬いあげるんだ

ろくでもねえ親に売られて、売られた先で試験とかなんとか言われて樹海に置いて行かれた

こんな鬱蒼としていると、昔に読んだ絵本を思い出す
どこかの南の国の密林（ジャングル）には、ターザンと呼ばれる野生児がいるついで
う話だ

俺はそれに憧れていた

ジャングルのヒーローで、正義の味方で、弱い奴の味方をしてる
すげーかつこい

俺もいつか、正義の味方になりたいと思っていた

だから俺はここから生きて出る

渡されたナイフ一本で、樹海を走った

走っているうちに、大きな影があたりを覆った

上を見上げると、そこには巨大なトカゲ型危険種がいた

でかすぎる

こんなナイフじゃ・・・

大トカゲが俺に向かって舌を伸ばそうとした瞬間、大トカゲの動きが止まる

まるで何かを怖がっているかのようにあたりを見渡して・・・俺のことも忘れてい

ようだ

そんなことをしていると、上空から誰かが降りてきた。

ちようど大トカゲの頭の上に落ちてきたかと思うと、大トカゲは大人しく頭を地上へと近づける

「ありがとう」

・・・そこにいたのは、俺よりも年上の女の子だった。後から青い髪の子と白い髪の子が降りてきて、何か話している

「大丈夫？」

「えっ、あ・・・」

「樹海の危険種は全部大人しくさせたから、安心して」

「・・・」

「け、怪我してた？」

「・・・すげえ」

「え？」

「なあ！あんたターザンなんだろう！ジャングルのヒーローだから危険種も言うこと聞いたんだよな!!」

俺の一言で、後ろにいた二人が笑い始めて、俺の目の前にきたターザン（女子）はなぜかにつこりしたまま動かなかった

ノリで発言すべきじゃない

100万回ループしてきた記憶というのは、わりと他人ごとに捉えてしまいがちになる。

少なくとも私はそう感じているし、今の自分もループしていた時の自分とは違う存在だと思っている。

私とは反対にループを覚えていない者も数多くいる。

少なくともブドーは覚えていないと踏んでいる。

恐らくはループの記憶に耐えうる者だけしか覚えていないのかもしれない。

・・・その仮説でいくと、おそらくナジエンダと大臣は覚えている可能性が高いがな
ループ記憶の中に露子が自身の目的を語ったことも何度かあった

あいつはそれを、今にも泣きそうな顔で語っていたな・・・

・・・奴の考える幸福な結末なぞ馬鹿馬鹿しいと、昔も今も思っている。なぜ弱い者まで助けなければならぬ

ぬるま湯に浸かったような考え方で何度も繰り返すなんて、くだらない

「・・・」

「どうした、エスデス」

「・・・なんでもない。しかしこの樹海は広いな」

「ま、危険種共が大人しくなってるからいいだろ」

大臣の息子と並んで歩きながら、少し先行して歩く露子を眺めた。いつの間にか合流した危険種や子供たちと戯れながら歩いているようだ。

子供は苦手だと思っていたが、案外年下の扱いが上手いな

未だにアカメやクロメと合流していないが、この樹海のどこかにはいるのだろう。

「・・・ループした目的は知っているが、なぜ露子がそんな能力を持っているか考えたことはあるか？」

「あん？・・・知るかよ」

「貴様は馬鹿か」

「お前いきなり喧嘩売ってくんじゃねエよ！」

「考えたことすらないのか？貴様の頭は飾り物か何かか？中身は詰まっているのか？」

「・・・考えたことぐらいいあるに決まってるだろ。でも答えが分からねえから保留してるだけだ」

大臣の息子は頬を人差し指で掻きながら面倒臭そうに答えた。

相変わらず少し足りないというかなんというか、もつと突き詰めて考えようとはしな

いのかこいつは・・・

「帝具かロストテクノロジーなのか・・・色々考えてみたんだが、いまいちしつくりとくる仮説が無くてな」

「いいだろ別に。そういうもんはそういうもんでいいだろ」

「私も基本的にはそういう立ち位置だが、露子の能力は明らかに常軌を逸しているからな・・・できればタツミと永遠に傍にいれる方法の参考にしたい」

「お前、ほつんとブレねえな・・・」

そんな会話をしているうちに、いつのまにか樹海の外に出たようだ。

少し離れた場所に帝国の紋章が描かれたテントが張られていることから、どうやらここがゴール地点らしい・・・

「おいおい、こりやどういうことだ？」

見知った顔・・・羅刹四鬼の一人、ゴズキだ。

どうやら奴がこちらに来ていたらしい・・・が、露子は驚く様子もなく、まっすぐと奴のところへと歩いていく

「暗殺育成機関設立を中止してください」

「はあっ!?何言ってるんだよ」

「子供たちを危険な目に合わせるのをやめてください」

「いやだから・・・あー、これは必要なことで」

「やめてください」

「そもそも嬢ちゃんにはそんな権限は無いだろ？」

「・・・」

正論を言われて露子は黙ってしまった

・・・悪い癖だな・・・もつと論破してやればいいのに

ふと、気が付くと近くにいた危険種たちが殺気立っている。大型から小型まで、すべてが帝国の兵士たちやゴズキに対して殺気を向けている。

なるほどな・・・危険種を従える力はここまで強力なのか。

「・・・」

「・・・嬢ちゃん、冗談はやめようぜ？」

「・・・」

「・・・」

ゴズキが腰に下げた村雨に手を掛ける。

そういうえばアカメが持っていたという村雨は元々こいつが持っていたと、誰かから聞いたことがある。

さて、露子はこのまま襲うのだろうか。

戦闘になるなら私もぜひとも参加してみたいものだが、隣にいる大臣の息子はどちらにつくか迷っているようだ。

・・・面白いほうに加担すれば良いだろうに、大臣の目的と露子の意思・・・どちらを選ぶか決められないのか

こいつも随分とまともになったものだな

ふと、露子が仁王立ちになり、深呼吸をし始める。

何かするつもりなのだろうか？

「・・・帝国が集めた子供全員私が面倒みます！だから！やめてください！！」

・・・

・・・確か100人と少しはいたはずだが、何か考えがあつて言ってるのだろうか
私が心の中でなんとなく思っていると、遠くから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「露子さあああああんんん!!!」

エアマンタに乗って、大臣がやってきた。

操作をしているのはナジエンダのようだが、心なしか表情が死んでいる気がする。

地上に降りるとすぐさま露子に駆け寄って抱き着いた。

不愉快な光景だから今すぐに凍らせたいところだが、その前に大臣が私の隣にいるシユラを睨みつける

「私の露子さんと駆け落ちなんていい度胸ですなシユラ」

．．．

．．．

．．．ん？

「．．．何を言っただよ親父」

「どうした大臣。耄碌したのか？」

「・・・大臣、あんた何言ってるんだ」

思わずツツコミを入れてしまった。露子は露子で抱き着かれているせいで何かを言う余裕が無さそうだ。

「貴方が露子さんを連れてここまで駆け落ちしたんでしよう!？」

「いや、してねえよ」

「露子さんはダメですよ！私の後妻ですからね！13歳までには私の子を孕んでもらうんですから！」

「・・・親父、ガキ産ませるのは早すぎだろ」

「早くないです！早めに種を仕込んでおくべきですからね！」

「あのよ、周りにガキどもいるから、そういう話はそこまでにしといてくれねえか？」

大臣が思いのほか気持ち悪いな。よし、ちよつと凍らせておくか・・・いろいろとかましい。

あと露子の顔が青ざめているあたり、本気でドン引きしているようだ。

・・・確かに13歳までに孕まされる危険性が分かったら、確かにそういう反応にもなるだろう。絶対に大臣を殺すぐらいには私も大臣の発言には引いている。

この後、私が大臣を少し凍らせてから適当に説明やら交渉をした。

まったく露子がノリで発言したせいで、100人以上いる子供たちの処遇を決めることになったではないか・・・

あとで露子はソフト拷問Aコースだな

そのあたりの詳しい内容が知りたいだど？そんなものを説明したところでぐだぐだになるだけだ。

そんな面倒なことをするぐらいならタツミを出せ

もう一度言うぞ、タツミを出せ

少女アカメの日常

私はアカメ

帝都から少し離れた村で生まれ育った

妹のクロメと助け合いながら生きてきたが、両親に帝国に売られてしまった

家が貧乏で、あまりごはんも食べられなかったから、仕方ないかもしれない

・・・もともと、あいつらは好きじゃなかったからかまわない

薄暗い部屋の中で、私やクロメと同じく売られた子供たちがひしめき合っていた

クロメが怖がっていたから手を握っていたが、私も少しだけ怖かったのを今でも思い

出す

クロメと共に帝国に売られた後、宮殿で働いている大人から説明された

どうやら、ナイフ一本を持って樹海を切り抜けてこいということらしい

クロメを守るため、2人で共に樹海を進んでいた

・・・途中まで、危険種に襲われていたところであいつに あった

危険種を操ることのできる、露子という人間に

私よりも少し上の年齢みたいだが、なぜだかもっと大人に見えた

なぜかはわからないが、少しだけ安心できる相手だ

露子のおかげで、私とクロメ、他の子たちも帝国でちゃんと生活できるようになった。

「なあ、私のところに来ないか？」

「俺のところに来いよ。鍛えてやるぜ」

「……私のところに来るか？」

私とクロメは2人の将軍と大臣の息子に部下にならないかと誘われた

一人目は私よりも少し上の少女であり、最年少将軍のエスデス

二人目はオネスト大臣の息子であるシユラ

三人目は帝国最強と名高いブドー大將軍

名前ぐらいは聞いたことのあるような、あの村で生きていたらまず会えない人間たちだ

人見知りしがちなクロメはシユラやブドー大將軍が怖いと私の後ろに隠れていた

「……おねえちゃん」

「……私、露子がいい」

『！』

「あの時、露子がいなかったら、クロメと離れ離れになったかもしれない」

「・・・」

「それに、帝国の大人は信用できない」

「・・・」

「クロメはどうする？」

「・・・わたしも、おねえちゃんと一緒にいい」

「・・・やれやれ、警戒されてしまったな。お前たちの顔が怖いからだ」

「おい誰が怖いだドS女」

「・・・」

そういった経緯があつて、私とクロメは露子の付き人になった。

だが、帝国の大人たちはどうしても私とクロメが戦えるように特訓したいらしい
なぜかよくわからない

・・・特にエスデス將軍とシユラはやけに私やクロメを部下にしたいと露子に言っ
ているのを何度か見たことがある。

クロメが寝たのを確認して、まだ起きている露子に話しかけた。

「露子・・・」

「・・・アカメちゃん、寝れないの？」

「その・・・エスデス將軍やシユラ・・・様とか、その、私やクロメを鍛えたいつて言ってるんだよな？」

「ああ、まあ、そうだね」

「・・・」

「アカメちゃんとクロメちゃんは、どうしたい？戦うのが嫌なら、私がちゃんと断るか」

「・・・露子は強いんだよな」

「えっ？あ、まあ・・・そうだね、うん・・・」

少し表情が曇ったが、何かあるのだろうか？

「私も・・・強くなりたい」

「・・・アカメちゃん」

「強くなったら、私やクロメみたいな子供も助けられるだろうか？」

「・・・そう、だね」

なんでそんな悲しそうな顔をするのだろうか

不思議に思っ、直接聞いてみると「なんでもないよ」と答えられてしまった。

強くなりたい

そう思つて露子の付き人をしながら、暇があればエスデス將軍とシユラ、ブドー大將軍に鍛えてもらつた。

「おいおい、まだ動きが甘いぜ」

「・・・シユラがそうやって挑発するから焦るだけだ、エスデス將軍はそんなことしない」

「お前、エスデスには將軍つて付けてるのになんで俺には“様”を付けないんだよ」

「・・・忘れていた。コンゴトモヨロシク、シユラサマ」

「・・・このクソガキ・・・」

エスデス將軍やブドー大將軍はすごいと思うが、シユラはいつも違う女の人連れていたりするし、クロメや露子にちよつかいをかけるからそんなに好きじゃない。

・・・ついでに私にもちよつかいをかける。

からかつているのだから、年上だからってあんまりだ

「おねえちゃん、お昼ご飯作つたよ！」

「アカメちゃんもシユラさんも、お昼どうぞ」

クロメと露子がお昼ご飯を持ってくれたらしい

・・・もう少し大きくなつたらクロメも訓練に参加すると言つていたが、ああして露子と一緒にいるほうがいいんじゃないだろうか

「抜け駆けはいけませんなあ」

「ロリの手料理が無条件で食べれるとは」

「あ！それおねえちゃんにあげる卵焼き！」

「いいだろ別に」

「あ、あの、まだたくさんあるから・・・」

「・・・」

・・・いつのまにか大臣とその護衛が混ざっていた。

いつ来たのか分からなかった・・・護衛はともかく、大臣も気配を消すような特訓でもしてるのだろうか？

それにしても肉が今日も美味しいな

この生姜焼きなんて香ばしくてたまらないし、ウインナーも美味しい

ハンバーグなんかチーズ入りしているぐらいに細かいし・・・美味しい肉は好きだ

「アカメちゃん、肉だけじゃなくて野菜もね」

「・・・わかってる」

「お姉ちゃん、これね、わたしがつくったんだよ！」

「美味しいぞ、クロメ」

「露子さんは本当に良い後妻になれますねえ、いますぐにでも私のために毎朝味噌汁を作って……」

「大臣はなんで呼んでいないのに当たり前のようにご飯を食べてるんですか？」

「えっ……」

「……親父、大丈夫か？」

「ちよつと傷つきましたよ……」

「ロリの握った握り飯……っ！プライスレス……！」

「美味しかった？」

「もちろん!!」（満面の笑み）

「シユテンさん、そういう笑顔もできるんですね……」

「うつわ気持ち悪イ」

「……」

……賑やかな食卓は、初めてだな

「どうしたの、アカメちゃん」

「……なんでもない」

覗きは犯罪行為です

オネスト大臣の最近の日課は、自室の隠し通路から露子の部屋を覗き見ることである。

露子の記憶の有無の確認も理由の一つだが、大体の理由が下心で構成されているのは・・・説明せずとも予想はできるはずだ。

「今日の下着はなんですかねー？」

とか

「いやはやまだスポーツブラですか・・・そろそろ色気のある下着でもいいと思うのですが」

とか

「いつそ毎日揉んで成長させてもいいですね」

とか

「ああ、全裸姿はやはりいいですね、早く穢したいです」

・・・などなど、そういった感想をメモしつつ観察している。

ゴズキは面倒そうに頭を掻きながら、オネストという男の趣味悪さに呆れていた。

彼の傍では部下として育てているコルネリアとツクシが眠っており、彼女たちを起こさないように大臣に言葉を投げかける

「悪趣味ですねぇ……」

「後妻の管理はしつかりしないといけませんからね」

「管理、なんて……家畜じゃないんですから」

「おやおや、貴方だって今は未来の暗殺者育成に励んでるじゃないですか」

「管理と育成は違いますよ、大臣」

「そうですかね？」

「……」

“管理と育成の違いも分かって無いとは”と、ゴズキは心の中で溜息を吐いた。

目の前の男は子供と経済動物（かちく）が似たような扱いなのだろう。そしておそらくは、部下に対しても……だ。

自分も大概、外道だと認識はしている

裏の世界で働いている以上は自分を綺麗だのまともだの思っちゃいけない

それでも、オネスト大臣よりはマシなのだろう

・ ・ ・ 少なくとも彼はそう思いたかった。

「お父さん！次は何したらいいの？」

「親父！もう頼んできた修行は終わったぜ！」

「じゃあ、次は宮殿100周な？こんぐらいできなきや、強くなつてなれないぜ？」

「わかつた!!」

ポニイとガイの二人は実の父親のように懐いてくる。

・ ・ ・ 本当の親のことはどう思ってたんだか分からない。

そこそこ帝国は平和とはいえ、貧富の差もあるわけだしな

こいつらの親は子供よりも金を選んだ。

自身も裏の世界に生きている身ではあるが、一児の父親としてあまり好ましくないと考えている。

「・ ・ ・ 俺も甘いよなあ」

誰に聞かせるわけでもなく、そんな言葉を漏らした。

自分の娘以外にも、子供を複数人育てることになったせいだろうか？

・ ・ ・ もしくは、子供たち全員を殺さずに人材育成しようと勢いで提案した露子のせ

いだろうか

多少、不思議な力があることは知っている

何度かそれを目撃したことも、実際に体験したこともある。

10歳にしては妙に達観しているし、何やらエスデスやシユラと話が合っているのも不思議だ

・・・何か、あるのだろうか

「どうした、父」

ふと、気が付くとナハシユが声をかけてきた。

幼いながらもしっかりとした性格で、かなりの才能を秘めている逸材だ。

「いんや、考え事してただけだ」

「・・・」

「ん？どうした？」

「・・・父は、露子のことをどう思ってる？」

・・・どう思っているというのは、どういう類の意味なのだろうか？

こういう時に子供が伝えたがっている真意つてのが分かりにくい。

「あー・・・オネスト大臣の後妻候補で、不思議な力を使える子供って思ってるぜ？」

「・・・」

「・・・なんだよ」

「・・・父は露子が嫌いか？」

・・・嫌いかどうか聞かれてもな

末恐ろしいところもある嬢ちゃん、ぐらいにしか思っていない・・・はずだ

「あの時、父は露子を攻撃しようとしていただろう？」

「・・・分かってたのか」

「殺そうとしてる人間は、見慣れてる」

・・・ガキのくせにそんなこと言うお前のほうがすごいがな

まあ、親に売られてくるような貧困の中で生きてきたんだ

それなりに荒んだ生活もしてるよな

「俺も仕事で護衛だの暗殺だのしてるからな、それにあの状況じゃあ下手したらこっち

が殺されてたかもしれねえだろ？」

「・・・」

「・・・そんな目で見えるなって、別に嬢ちゃんのやったことが間違いつて言ってるわけじゃねえよ」

そう、露子のやったことは向こう見ずなことではあるが、間違つてはいない

どんな理由があろうと人を殺すのは悪いことだ

・・・ただ、時代やら職業によつちやあそれが正当化しちまうもんだと思つてるがなあ
あの嬢ちゃんもそういう理屈は分かつてるんだらう

分かつてるからこそ、あの時俺の言い分を論破しようとしなかつた

「・・・そうか。すまないな、父。また鍛錬してくる」

「・・・おう、そうか」

ナハシユの奴はそのまま木刀を持って他の子供が修行している場所へと移っていく
「・・・まったく、生きにくい世の中だよなあ」

護衛のために大臣の私室へと移動すると、大臣が隠し通路をちようど使つているところ
ろに遭遇した

「またかよ」

そう何度も見ても楽しいものなのだろうか？

任務で暗殺を警戒して、周囲を覗くことならともかく・・・ただの覗きには手を出し
たことがない

隠し通路と言えど何があるかわからない

そのまま自分も隠し通路へと足を踏み入れた。

「おや？ゴズキさんですか」

「大臣、そんなに覗いて楽しいんですか？」

「興奮します」

「・・・聞いて損したわ・・・」

「ん？何やら集まっていますね」

「え？」

思わず俺もマジックミラーを覗くと、そこにはアカメ達子供やエスデス將軍、あのナジエンダ將軍まで部屋に集まっていた。

・・・ナジエンダ將軍もいるとは、ちよつと珍しいな

よく見てみると、子供たちに混じってメズもいるようだ

・・・おい待て、あいつ修行サボってこつち来たのか

〈偶には女同士で交流を深めるのもいいだろう・・・ということ少しばかりファツションショーなるものをするぞ〉

〈エスデス・・・いったいどうした〉

へいやなに・・・女子力とやらを磨くと、男はころつと悩殺されると聞いたのでな。タツ

ミを落とすために特訓がしたい」

「・・・そ、そうか」

「おねえちゃん・・・服がいつぱいあるね」

「それよりも肉がいい・・・」

「しかしスサノオ、お前は大丈夫なのか？」

「恋愛機能は無いからな。それに手伝いぐらいならいくらでもしよう」

「・・・下着の試着もあるんだが」

「それがどうしたんだ？」

大半が子供とはいえ、なんとというか・・・見ちゃいけない光景を見てるっつーか・・・

さりげなく生物型帝具がいるんだが、男姿なのにいいのかよ！

・・・ちよつとは羨ましいぜ・・・

「これはいいロリの祭典だな」

「・・・うおわっ！」

「おや、シュテンさんですか」

「はい、いつものまに・・・」

「ロリの着替えシーンはいいものだな・・・お前の娘も良い褐色肌で実にエロティックだ」
「おいシユテン、表に出ろ」

「お二方、静かにしてください・・・っと、露子さんの今日のパンツは白ですか・・・もう少し大人っぽい下着でも今度贈りたいですね」

「しかしロリの裸は素晴らしいだろう？触れることはしないが・・・お前の娘の使用済みパンツさえもらえれば」

「本当にぶち殺すぞ」

「だから静かにしてください」

「そこで何をしている」

とても冷ややかな、それでいて怒気を孕んでいる声が向こう側から聞こえてきた
オネスト大臣を庇いながら攻撃を避けたが・・・マジックミラーが壊された
つまりは、向こう側の女子供たちにバレた

「ほお、覗きか貴様ら」

エスデス將軍の鬨気つてのは凄まじいもんだな

いや、正確に言えばナジエンダ將軍も含まれてるが・・・

「いやあの、俺は大臣を止めようとな．．．」

「ロリの裸と着替えはいいものだな」

「露子さんの着替えは最高ですね」

俺の言葉も空しく、次の瞬間にはエスデス將軍とナジエンダ將軍からの攻撃がぶち込まれた

目が覚めた後、実の娘から冷たい視線を受けながら弁明する羽目になったのは言うまでもない

外伝：株式会社レイクオブスワンのメンバー紹介

社員1 「読者のみんなこんにちはー！」

社員2 「株式会社レイクオブスワンの愉快な社員たちだぜ★」

社員3 「テンションが高いですね・・・」

社員4 「私たちの出番もきつと近いアル！」

ロツドバルト 「さあ？シリアスに突っ走れたら、ですよ」

社員1 「てか俺たちの名前も決まったけどモチーフは!？」

ロツドバルト 「ありません」

社員2 「えっ・・・」

ロツドバルト 「たかだか使い捨てのモブに由来なんていらないうしよ？あつたところでアカメでいうイヨカル様やガマル様のように名前すら忘れられますからね」

社員3 「・・・さすがにあんまりですよ」

社員4 「失礼アル！この失恋悪魔！」

ロツドバルト 「私はまあ、また次回作に出るのは決定してますが、別にあなた方は決まってませんし」

社員1 「で、でも、俺たちの時代がキターーッ!!」

社員2 「よっしゃあああ!」

社員3 「ふっ・・・いよいよ私たちの出番ですね」

社員4 「朕の華麗なる活躍がこれから増えるアルよ!」

ロツドバルト 「正直リクエストが無かったのですが、次の話への箸休めです」

社員1 「おいやめろがっかりさせるな」

ロツドバルト 「まあ、次の話が何にするか迷ってるのですよ」

社員2 「とうとうネタ切れか」

ロツドバルト 「こっから一気に最終章でもいいんですがね・・・まだ小ネタぐらいな

らあるので」

社員3 「と、言うത്?」

ロツドバルト 「セリユー回・チャンプ回・教主回あたりはネタではあります」

社員4 「なんでそこアルか・・・」

ロツドバルト 「一度、現状説明回とか質問回とかやりたいですよねえ」

社員1 「ああ、キャラ紹介とかか」

社員2 「まー、ちよつとキャラが増えてきて、誰が変態で誰が変態じゃないかわから

ないもんな」

社員3 「そもそも変態がいること自体がおかしいのですが」

社員4 「もっとイケメンが欲しいアル！なんで変態かシヨタかクズしかないアルか！」

社長 ロッドバルト

本名：ロッドバルト・ナーヴェ・シューリピリカ

誕生日：1月9日

趣味：バラ栽培・園芸

好きな食べ物：人魂

ちなみにお酒はワイン派

かの有名な白鳥の湖に出てくる悪魔

オデット姫に一目惚れし、悪魔姿でプロポーズ兼告白して玉砕

逆恨み・・・ではなく、オデット姫が自分を好きになってもらうまで、白鳥になる呪いを彼女にかける。

が、原典通り王子が現れ横からかつさわれる事態に。ざまあwwwとしかいいようがない。

結末については諸説あるので、社員たちも気になってるがロッドバルトは社員たちにそれを語ったことは一度もない。

株式会社レイクオブスワンの社長

露子のような面白い人間が好き（魂が食べたい的な意味合いと愉悦的な意味合いで）。
・・・が、タツミ憑依モブ外伝を見る限り、意外と情が移っているのかもしれない（情が移っていても、魂は食べるのだろうか）

帝国の始皇帝の魂をわざわざ連れ出して、今の皇帝陛下の中に入れ込んだりと暗躍してる。

ポーナステージのはずなのだが・・・彼はポーナステージの意味を理解しているのだろうか・・・

作中では大した活躍はしないのだが、実はこう見えていろいろ出来ることは多く、ラスボスになり得そうなレベル。

ただし、現在は仕事の関係上、あまり自分の力を使うよりもビジネスを優先している。作中でロッドバルトのことを知っているのは露子・タツミ憑依モブ・始皇帝のみ

社員1

本名：イウリアーノ

元々はキューピッドであり、恋の矢で人々を恋愛させることが可能。

(作中には未登場の敵役キューピッドキャラと同期という裏設定有り)

キューピッドとしてはかなり優秀ではあったが、本人は割と仕事を嫌っていた。

転職をしようと考えている時期にレイクオブスワンの話を聞いて就職。

作中ではモニターたちに付加する能力を営業担当(またはロッドバルト)に運ぶ仕事をしている。

露子のことはキャラ愛以上の狂気を持っていると思っているが、周りには喋っていない。

だが、愛情という感情自体を好んでいるので嫌いではない。

チエルシーファンであり、彼女の恋を応援しているのでタツチエル派

(自分が付き合いたいかでは無いらしい)

社員2

本名：パウルス

元々は恋人同士の愛情を試しては食べていたという人外。

失敗したらその恋人たちを食べていたが、真の愛情だと認めたらちゃん祝福していたので一部では神として信仰されていた。

時代が移り変わり、人外の存在が認知されにくくなってきた頃に社長にスカウトされて就職。

作中ではモニターたちに付加する能力を保管室で管理している役割を任されている。

露子については根性があると評価しており、彼女が早く嫁いで幸せになれば良いと思っている

・・・が、「オネスト大臣はないわー」とは考えている。

メインファンであり、「エスタツも美味しいけどさー、やっぱタツマイだよね！」と考えている。

自分が付き合う発想はなく、どちらかといえば「恋人になったタツミとマインを試してみたい」に近い。

社員³

本名：蓮華輪廻命（れんかりんねのみこと）

元々は縁結び（縁切り）の神様だったが、零落してしまい、現在は神格は有していない。

神格の無くなった彼が妖怪堕ちしたところをロッドバルトが拾って保護した。

作中では経理関係を担当しており、モニターたちが引き換えに渡してきた料金等を金銭などに換算していたりと・・・

ここ最近引き換えにする物の種類が増えたりしているので一苦労している。

丁寧語喋りだが、実はこれはロッドバルトから移った口調。

元々は神様らしい上から目線の話し方だったが矯正された。

露子についてはややエスデスやシユラのように冷めた視線から見ているものの、基本は好意的

モニター99人を含めているあたりもかなり評価している。

アカメの特定のキャラを応援していることはない。

しかし元々は縁結びの神様だった故に、縁を結んだがゆえに不幸になったり、死ぬ人間の多さに割と精神的にダメージ受けてる。

社員 4

本名：内藤 結月（ないとう ゆづき）

「赤い糸が見える」と自称している貧乳娘。

実際は赤い糸というより片方もしくは両方が何かしらの強い好意的な感情を抱いているとそれが糸として認識されるだけ。

社長を悪魔召喚で呼び出したのがきっかけで知り合い、レイクオブスワンに就職している。

ちなみにまだ未成年なので雑用を任されている。

一人称の「朕」とか語尾の「アル」とかは実はキャラ付けであり、ちよつとした中2病みたいなもの

本当は普通に喋れるが、それだと他の社員よりも個性が埋もれそうってことで隠れた努力?をしている。

ヒロイン願望丸出しなところもあるが、実は露子を一番評価しているのは4人の中では彼女だったりする。

恐らくは年齢が比較的近いからだろうが・・・

1 話目からきつと読者も思っていたこと

ふふつ、待たせたな。モテ期なう！なナジエンダだ。

こここのところ大臣に命令されて、スサノオと共に露子を警護することになった。

羅刹四鬼は大臣の警護をしているし、何よりそのうちの一人もロリコンだからな……絶対に信用ならない

かといってチョウリ様のご息女であるスピア様に頼むのも……心配以外の何物でもない。パンツを覗くこと的な意味合いで

「変な虫がついたら困るので宮殿にいてほしいのですが……まったく」

「(むしろ大臣のほうが危ないと思うんだが……)」

「あの子供たちとも遊んでいるようだし、責任感が強いのは良いことですがそれよりも後妻としての自覚を……」

「とりあえず、警護すればいいんですね」

「え？ ああ、はい。よろしく頼みますよ」

大臣の話が長くなる前に適当に話を切っておいた

下手に聞いているとそれこそワイルドハントのチャンプのようなロリコン独自の考

えを聞かされそうで・・・な・・・

「ねえねえお姉ちゃん！あれ！あれ食べたい」

「こら、クロメ。走ると危ないぞ」

「アカメちゃん、待ってください」

仲が良さそうにしているアカメとクロメ、そして露子を見ると微笑ましく思う。

今までのループでは・・・互いに殺しあうことしか出来なかったからな

大臣が変態とはいえ、今の帝国が平和だからこそこの光景があるのだろう。

「お姉ちゃん、これ美味しいね」

「・・・クロメ、口元にクリームついてるぞ」

・・・良かったな、アカメ

「ナジエンダさん、あの、これどうぞ」

気が付くと、露子がクレープを渡して来てくれていた。

大臣に渡されたお小遣いからだろうか・・・

「ありがとうな」

「い、いえ、あの、スサノオさんは・・・」

「俺は帝具だから気にするな」

スサノオはそう断りを入れながら、アカメとクロメの世話をしている。

露子は困ったように笑いながらその光景を見つめていた

・・・露子は、覚えているのだろうか

「・・・なあ、露子」

「な、なんですか？」

「お前に聞きたいことが・・・」

「ああ？そこにいるのはナジエンダ將軍に露子じゃねーか」

聞き覚えのある不愉快な声が聞こえて、思わずそちらへと視線を移す

そこにいたのは大臣の息子シユラが少し扇情的な服装をした女を連れて少し先に

立っていた。

アカメやクロメも気が付いたようで、スサノオの後ろに隠れてシユラのほうを見てい

るようだ。

クロメは少し怖がっているようだが、アカメは少し睨んでいるような視線だ

・・・まあ、酷い時は侍女を口説いていたりするからな。あまり良い印象はないだろ

う。

「ねえ、なあにこの子たち？」

「ん？知り合いだよ知り合い・・・ほらよ、さつきと行けって」

「はぁーい。また遊びに来てちようだいね？」

「はいはい・・・っと」

適当に女を帰らせたシユラが私に近づいてくる

スサノオは少しばかり警戒しているようだが、ジェスチャーで大丈夫だと伝える。

「面白いやアンタとはあんまり話したことなかったな」

「・・・そうだな」

くい、と顎を掴んで自分のほうに向かせる

顔立ちは整っているが、やはり慢心している態度が目に見えて分かる。

・・・残念なイケメンとはこういうものを言うのだろうか

「今まで残念だったぜー、こんな上玉がいたのに手を出してなかったなんてよ」

「それは光栄だな」

「どうだ？今日は俺と一緒に過ごさねえか？」

「残念だが、私は将軍としての職務があるからな。それは断っておこう」

ふと、服の袖を掴まれる。それはシユラも同じだったのか、少し視線をずらした。

「あ、あの・・・その・・・」

露子が俯きながら私とシユラの服の袖を掴んでいた。

俯いている上に長めの前髪ので表情は見えないが、よく見るとシユラを掴んでいるほうの手は少し震えているようだ

「・・・チツ」

シユラは舌打ちして私から少し離れる。

「つたくめんどくせえ奴だな」

「・・・あの・・・」

「ま、それとは別にナジエンダの姉ちゃんとは話があんだよ」

「・・・その、えっと」

「アカメ達とつるんでろ、すぐに終わるからよ」

「・・・わかりました・・・」

露子たちが目に届くぐぐらいの場所にあつたオープンカフェに移動する。

話とはなんだろうか？

「担当直接に聞くが、あんたも繰り返してる記憶、持つてるのか？」

「!・・・なんだそれは」

「だーかーらっ、あの露子が魔王だった時の記憶があるのかって聞いてんだよ」

「……いきなり何を言い始めたのか、よく分からないな」

「エスデスの姉ちゃんから聞いたが、記憶持つてる奴つてのは大体強いまんなんだよ。俺もあいつもな……で、あんたもそうだとエスデスが言つてたぜ？」

「……！」

「早く認めろつて。そのままだんまりを決め込んでるとエスデスの姉ちゃんが下手なこ
とやらかすぜ？」

……まさかエスデスがそんな視点で見ているとは

このまま騙しとおしたいが、あのエスデスが何をしでかすかわからない

しかし……

「……まさか、またナイトレイドでも結成する気か？ そうじゃなけりやラバックの野郎
といちやこらできねえもんな」

「そんなわけないだろう！ 大体ラバックとは付き合つて……」

「……」

「……」

……いや、そのだな

そう、誰にでも油断はある

「やっぱ覚えてたな。ちよろいぜ」

「くっ……貴様に不覚をとるとは」

「あははははー！」

油断はあったが……ここまで笑われると不愉快というか、苛つくな。

大体ラバツクとのことを勘ぐられるとは……確かにラバツクは多少口が軽いというか、よく私の名前を出していたからな

恐らく敵対していた時に言ったことがあるんだろう……

ああまつたく……

「……ふっ、ならば私も言わせてもらおうぞ」

「なんだよ」

聞き返してくるシユラに私は以前から思っていたことを口に出した。

「お前、露子のこと好きだろう？」

「……」

「ふっ、凶星か……私はこう見えてだな」

「……何言ってるんだ？」

慌てた様子もなく、赤面もなく、ただただ疑問符を浮かべた表情で聞き返してきた

「な、何をつて……お前、露子が好きなんじゃないのか？」

「なんでだよ」

「なんでって・・・露子が本を出していたあの時から露子に付きまどっていたとラバックが言ってたぞー！」

「珍しかったからな、ああいう手合いは」

「それにお前、露子を後妻にするって言った大臣を殴ったんじゃ・・・」

「自分の父親が10歳児と結婚しようとしたら殴るだろ」

普通は殴らないと思うが・・・

しかし、おかしいな。私の見立てではきつと恋をしているのかと思っていたんだが・・・

「・・・本当に何も思っていないのか？」

「んだようるせえな・・・露子のやつなんざうざいつつか・・・最初の時思い出してな。苛つくだけだ」

「何かあったのか？」

「あん？・・・なんでもねえよ」

言葉を濁されて何か違和感を覚えた。

最初の時に何かあったのだろうか？

・・・エスデスにバレるなら、いつそエスデスと組んで吐かせるか

べ、別にばらされたことを恨んでいるわけじゃないぞ!?

おまけ

アカメ「露子、やはりシユラは苦手か？」

露子「えーと：（ワイルドハントに拷問されたり遊ばれたことがあつたからなあ）：
さわるのが、ちよつと怖いので」

クロメ「怖いのか？」

露子「うーん・・・まあ、その、色々あつたの」

スサノオ「手でも出されたか？」

露子「オネスト大臣じやないんですから、ありませんよ」

スサノオ「さらつと毒を吐くようになったな・・・」

アカメ「何かされたら、言ってくれ」

露子「だ、大丈夫、だから・・・小さい子に興味ないし、そもそも可愛い人が好みだから」

クロメ「・・・」

アカメ「・・・やっぱり、シユラはちやらちやらしてる・・・」

露子「それにシユラさんとは違ってくつて飽きたらポイ系の男性ですから」

アカメ「？」

クロメ「ぼい……？」

スサノオ「……ナジエンダは無事だろうか……」

とある男の初恋話

大人なんて生き物はみんなクソだ。

汚い汚い汚い汚い、自分が大人に近づいていくのも、大人になるのすら耐えれなかつた

今の自分もあの汚い大人共と一緒にだなんて思いたくなくなかつた

だから子供たちは俺にとつての天使みたいなものだ。

なんて純粹無垢なのだろうか

だから俺はピエロとなつて、子供たちが楽しんでくれるように努力した。

手先が器用だつたおかげか芸を覚えるのはすんなりといった。

子供は可愛い、子供は天使だ、ああ、可愛い、可愛い可愛い可愛い

これが大人になるなんて、本当に思いたくもない

どうすれば子供のままいてくれるのだろうか？

ふと、大道芸をしながらそんなことを考えていると、向こうから姉妹がやってくる。可愛らしい黒髪の少女二人。そのあとをもう一人少女がついてくる。

仲良くくつついてるほうの姉妹はとても可愛いらしいし、仲睦まじそうだ。遅れて

やってくるほうは姉妹とは少し似てないけれど・・・

ふと、少女が足を止める。メガネと長い前髪に隠された黒と赤のオツドアイが俺のこ
とを見つめている。

おどおどとした、臆病そうな仕草は・・・そう、何かを思い出す

俺も小さい頃はあの大人（カス）共の顔色伺ってこんな感じだった。

「あ、あの、なん、ですか・・・？」

怯えた表情を見るとじりじりと何かがせりあがってくる

このまま裏路地に連れ込んで、あの時の大人（カス）共のように殴りつけたら、あの
時の自分のように泣いて謝るのだろうか？顔色を伺って怯えて、それでも抵抗できない
まま蹂躪されるのだろうか

「・・・あつ、の・・・」

ああ、なんて

「ツ！」

小さくか弱い体を引き寄せようとした瞬間、周囲が冷気に覆われた

遡ること5分前…

「お姉ちゃん、あつちにピエロさんいるよ！」

「本当だな・・・行ってみるか？」

「うん！」

「ちよつと行つてみましょうか」

アカメとクロメが仲良く歩く姿に微笑みを浮かべる露子。

少し離れて、ナジエンダとエスデスが俺の前を歩いて会話している。

「・・・ループしていた記憶と露子の目的から察するに、露子はもともと普通の人間だったのかもしれない」

「ナジエンダはさすがだな。そこに気が付くとは・・・そう、最初はただの作家だったが、次から何かが変わった」

「・・・てめえら、推理ごっこが好きなんだな」

「推理ごっこなんてそんな・・・だが、気になることがあるからな」

「露子が来た時に私やナジエンダに兄弟ができたり、将軍の数も増えただろう？ ナイトレイドやイエーガーズにも多くの所属メンバーがいた。しかし今はそれがいない・・・おかしいと思わないのか？」

「おかしいもなにも・・・知るかよ、んなもん」

「しかし今はいないだろう？ 露子が何か知ってるんじゃないかと踏んでいるんだが・・・」
「私もそれは思ったが、意外と口が堅いからな、あいつは」

「・・・」

ナジエンダとエスデスの会話を聞いて、タツミに殺された時のことを思い返す。

薄れていく意識の中で聞いた会話が断片的に浮かんでいく

・・・知り合いとは言い難いが、お互いに何か繋がりがあつた

それしか分からないが、何か・・・そう、あまり良い繋がりとはい言ひ難いのではないか？

「・・・正直、タツミに会いたいのには気になることがあつてな」

「好きだからじゃないのか？」

「好きだぞ。だが、露子に会う前と会つた後では・・・その、タツミがタツミじゃない気がしたのだ」

「どういう意味なんだ」

「分からん。しかし、繰り返した記憶があるからこそ分かる・・・露子に出会つた後のタツミはタツミじゃない」

・・・エスデスとナジエンダの言葉をシユラは頭の中でリフレインする。

・・・タツミがタツミじゃない？

そういえば、俺が露子に出会う前の世界と、露子の目の前で殺されて以降では雰囲気

が違っていた。

「・・・おいエスデス」

「なんだ？」

エスデスとナジエンダが二人で俺のほうへ向く

「それについて心当たりが・・・」

「みぎやああああああ!!!」

「ツツ?!!」

突如聞こえた野太く不気味な悲鳴、午後の昼下がりに似つかわしくない絶叫に思わずその場にいた人々の視線が悲鳴の持ち主が誰かと探し始める。

それはすぐに見つかった・・・と、言うのも、あたり一帯の気温が冷え込んだと同時に・・・巨漢のピエロの周辺を氷が覆っていたのだ。

「・・・おい、あれって」

「ワイルドハントの・・・」

「・・・チャンプのやつ、帝都入りしてたのかよ」

一同は見知った人物であるチャンプから、露子に視線を移す

どうやら彼女の【氷雪】を使ったらしい。なぜかは分からないが、少なくとも彼女が

力を使わざる得ないことでもチャンプがしたのだろう

「どうした露子、尻でも触られたのか？」

「露子！あのピエロに犯されそうになつたのか!？」

「・・・先生さんよ、あとであいつは殴つておくから、殺しはするなよ」

3人は露子に声を掛けるものの、彼女は少し呼吸を荒くしてこちらを見ようとしない
いつものように気弱そうな、臆病そうな態度で接する余裕が無いらしい

「露子、大丈夫か？」

「露子お姉ちゃん・・・？」

アカメとクロメも心配そうに顔を覗き込む。我に返つたのか、露子はアカメ達に「だいじょうぶ、です、ちよつと、おもいだした、だけなので、つい」と苦しそうに答える。
何を思い出したのかと考えると・・・ナジエンダとエスデスはチャンプを一見してからシユラを睨みつける。

「・・・なんだよ」

「あのピエロに関係あると言えば、お前だな」

「確かワイルドハントは露子を蹂躪したことがあるらしいな」

「・・・繰り返した時の話だろうが。今は何もしてねえよ」

「そういう拷問や凌辱の傷は存外残りやすい。露子もあまり表には出さないが実際は私

のことすら怖がっているぞ」

「いやエスデス、お前は確かに怖・・・いや、なんでもない。とにかく、女というのはそういうことは傷に残りやすい」

「ただ単にサンドバッグやら拷問したぐらいでやかましいんだよ。それに前の話なんだからチャラにしるよ」

「・・・まったく、性格が悪いままだな貴様は」

「(エスデスも変わりないままだから、お互い様だと思っただが・・・)」

そんな彼らのやりとりを横目に露子はチャンプのもとへと歩いて行く

「あ、あの・・・」

「ひイツ!?!」

あからさまに怯える姿に露子は半歩下がってしまった。それもそうだろう・・・いきなり氷で辺りを覆うような能力がある子供なんて、傍目から見ればただの化け物だ。少し様子を伺えば、帝都の住民も恐る恐る見ているようだ。

「ご、ごめん、なさい。ちよつと驚いて、その、私・・・周りを凍らせたりしちゃう力があつて。あ、あの!でも、手袋付けてたら凍りません。チャ・・・び、ピエロさん、立てれますか?」

「えっ?あー・・・いや、その、だ、大丈夫だ」

「……ごめん、なさい。ごめんなさい、本当にごめんなさい」
「そ、そんなに謝らなくても」

露子があまりにも丁寧^に謝る姿に思わずチャンプのほう^が委縮してしまふ。いや、彼女の能力を知っているからこそ、彼女の様子を伺っているのだろう。

「……ただ、ちよつと、手を引こうとしただけなんですよね？」

「えっ……あー、うんそうそう。手を引こうとしてね」

「……ごめんなさい、怖がらせて、すみません。一歩間違えたら、怪我してたかもしれないのに。本当にごめんなさい。もしも氷の中に閉じ込められてるようなことになったら、それこそ……ごめん、なさい……」

「いや、えーと、お嬢ちゃんを驚かせた俺が悪いから、泣かなくても」

「それでも、誰かに痛いことするのはもうやりたくないんです。誰だって、痛いことなんて嫌なのに」

「……」

そのままもう一度謝罪して、顔を上げて目線を合わせる露子。

しかしチャンプは少しばかり惚けた顔のまま硬直している

「……」

「あ、あの……その、お怪我とか、ないですか？」

「・・・天使だ」

「え？」

「いや天使じゃねえ！女神だ女神！」

「えっ」

チャンプの勢いに、露子が一步、いや更に下がる。先ほどまでの謝罪ムードも吹っ飛んで、ちよつと引いているようだ。しかしチャンプは彼女に突進するかのごとく近寄って両肩を肉厚な手で包み込む。

「お嬢ちゃん、おじさんとラブラブな結婚式をあげないか」

その瞬間、ナジエンダの飛び蹴りがチャンプの頭にクリーンヒットした。

「・・・私、なんでこうなるんですかね」

ぼそりと露子が一言つぶやく

「・・・アイスぐらいならおごつてやるぜ？」

「私は団子でもおごつてやろう」

その様子に思わずシユラとエスデスは露子を労わる心を見せた。しかし普段はゲスやらドSな彼らの優しさが逆に痛いと感じる露子であった。

ドMは地上最強の生物 前篇

「露子さんは今日も可愛らしいですね、いい加減後妻としての教育を受けてもよろしいのでは？ 少なくともこんな不審者を連れ込むのはやめて頂きたいですね。視界が汚染されます。」

「何言ってるんだよ、露子は俺とラブラブな結婚式をあげるんだよ。てめえみたいな髭達磨なんかの後妻になるわけねえだろ」

「口が悪い低俗な道化（ピエロ）ですなえ・・・露子さんは私の後妻として13歳までには第一子をもうけて、最終的には3人ほど子供を・・・」

「最低なのはてめえだ。露子は今のままだから女神なんだよ。せめて10年はじっくりと愛でてから子供は一人って決めてんだよ」

「ハッ、分かってますせんあ。早めに手籠めにするからこそ、私が夫であると刻み込めるでしょう？ 私だけがこの世で唯一の相手だと思わせないといけないのですよ」

「ゲス野郎が・・・女神つてのは崇めて愛でて焦らしまくってから俺がいいと選ぶようにするのが醍醐味なんだよ！ てめえから刻み込むなんてただのエゴだ！ 選んでもらえるように努力して愛でる！ 愛する！ ぺろぺろする！ これがジャスティスだ！」

爽やかな朝のはずなのに何故こんな気持ち悪い会話を聞かなければいけないのだらうか。

ナジエンダは心の中で涙しながら、スサノオと共にアカメやクロメ、露子の護衛のために警護していた。

ちなみにアカメはゴミを見るような目でオネスト大臣とチャンプを見ていた。

まあ、その視線にオネスト大臣はなんとも思っていないようだし、チャンプは多少興奮しているようで更に気持ち悪いわけだが。

ちなみに当の本人（露子）は会話を聞いてないようにしながら、メズと共に朝食を食べている。

数か月前に宮殿にやってきた露子に興味を持って、2週間ほど前から皇拳寺で修行していたメズがさぼって遊びにくるようになった。まあ、その前からちよくちよく宮殿に忍び込んでゴズキに叱られていたらしいがな……

「ねえねえ、露子ってモテてるね。すごいなあ」

「……ああいうおじさんたちに、メズちゃんもモテたいの？」

「ううん、全然。ちつとも嬉しくないし羨ましくもないよ！むしろ露子すごい可哀相！」
「満面の笑顔で言わないでほしかったな……」

……まあ、仲が良さそうで良かった。ともかく、少し離れた場所にいるロリコン2

人はそろそろシユテンにでもしばかれ・・・

「大臣もその道化も何を言っている。YESロリ！NOタッチ！ロリは目で見て愛するもの！開き切っていない蕾は視姦しながら愛して育てるものだ！実際に手を出せばそれはロリが傷つくこととなる・・・ただ！脳内でロリといちやいちゃするのはかまわん！だからお前たちも私のように脳内だけで堪能するが良い！」

「何を言ってるんですか、私は別に他はいいんです。露子さんにだけ欲情しているだけです」

「俺だってよ、天使は天使！愛でるものだけ！・・・だが、露子だけはあれだな、女神だ！俺は運命を感じたんだ！だからいくら手を出してもきつと許してくれるはずだ！」

・・・ダメだロリコンが増えただけだ

「ナジエンダ、大丈夫か？」

「サノオが私を心配してくれているようで、少し視線をずらすとクロメやアカメも私の疲弊している様子を心配しているようだ。」

「あ、ああ・・・平気だ」

「ナジエンダお姉ちゃん、疲れてる？」

「大丈夫だぞ、クロメ。これぐらいなんともない」

「・・・ナジエンダ將軍、あいつらはゴミだな」

「・・・同意はしておこう」

こここのところアカメがやけに毒舌になったような気がする。元上司として少し複雑だが、まあロリコン相手に毒舌ならかまわないか。

そんな賑やかな朝食の場で、研ぎ澄まされた殺気を感じて私とスサノオは天井を見上げた。それはシュテンやメズ、露子も同じように殺気の持ち主が天井にいることを突き止める。

「そこにいるのは誰だ」

私が天井に向かって言うと、女の笑い声が聞こえる。

「さあ、楽しませて頂戴・・・あの時のような「激しい痛み」へかいらく」をー」

そして天井から・・・ループしていた軸で羅刹四鬼を担っていたスズカが露子に向けて襲い掛かってきた。

「ツー」

スズカの蹴りを躲し、露子は「スズカに抱き着いた」

何をするかと思つたが、数瞬後にスズカは恍惚の表情を浮かべながらその場で崩れ落ちる。露子そのまま下敷きになる形となつたので、スサノオが抱き起しにいった。

あれは・・・エネルギードレインか

常時発動型とは聞いたが・・・やはり強力だな。ループしていた軸ではあのエスデス

に対してもある程度まで有効だったと聞く（といっても、エスデスのスタミナ量が常人を遥かに超えていたためか、ドレインされながらも露子を半殺しにしたというのも小耳に挟んだが）

「・・・スズカー、何してるの。修行は？」

メズは倒れているスズカに声をかける。襲ってきたこと自体は驚かないのか・・・
「だ、だって魔王がいるって聞いたんですもの・・・ああつ、この力が抜ける感じもたまらないわあ」

「魔王？」

「そういえばメズは知らないんだったわね・・・ねえ、露子、今度は氷で串刺しにしてちょうだいよ、ほらあの手足を標本みたいに・・・」

その言葉で露子も私も表情が凍る。

「あ、の、まさか・・・」

「ちよつとスズカと話をつけてくる」

驚く露子をよそにスズカを適当に担ぐ。オネスト大臣は何か文句を言うかと思いきや、黙っているようだ。

・・・記憶保持者、なのだろうか

いやその前に、スズカにも話をつけないといけない

ドMは地上最強の生物 後篇

「何よ？もうおしまいなの？もつと攻めてちょうだいよ」

身体から力の抜けたスズカをベッドに降ろすとつまらなそうにそんなことを言い始めた。なんというか、力が抜けているはずなのに快感を感じているあたり体の構造はどうなってるんだとかツツコミを入れたい。

・・・いや、ツツコミをしても負けるな。よしやめよう。

「・・・相変わらずだな」

「・・・スズカさん、変わりませんね」

「その言い方つてもしかして・・・貴方たち、ちゃんと繰り返した世界の記憶とかあるの？」

「まあな」

「その、はい・・・あります」

「それなら話が早いわ!!!ねえ、露子！魔王をしてた時みたいにいっぱい攻めてちょうだいよ、お願い。貴方の攻め手つていっぱいあるじゃない！今はどこからどこまでできるのかしら？氷とエネルギードレインは使えるのよね？ほかには何が使えるの？羅刹四

鬼の技を模倣していたけれど、あれでせめてくれてもいいのよ？もうなんでもいいから早く責めてちょうだい！」

私と露子の呆れた態度も気にせず、もっと攻撃してほしいと露子を見つめて頬を染めて息を荒げている。10歳児相手に欲情している10代後半女子という構図に違和感しかないというか、出来れば見たくない光景である。

ああ、もうまったく・・・頭が痛くなってきた・・・

「ねえ、ダメかしら？魔王だった期間も長いじゃないの」

「・・・繰り返した記憶が無い人もいるので、そういう人の前では、繰り返したことは秘密にしてください」

「えっ？」

「・・・魔王だったことは、人前で言わないでください」

露子が小さくスズカに呟いた。だがはつきりとした意思を感じる。

それもそうだな。露子は魔王として君臨していた・・・理由にも情状酌量の余地があるが、それでも殺しは殺しだ。ナイトレイドやイエーガーズと変わらない、ただの人殺しである。

もしも、記憶が無い者に知られたとしたらかなり印象も悪くなるだろう。

私とて、100%許しているわけではないからな。何度も何度も繰り返されて、何度

も仲間を失う辛さも悲しみも味わったんだ。出来ればもう・・・そんなことは経験したくない。

しかしスズカは対照的に明るい態度で返答し始めた。

「秘密にしてたら、攻めてくれるのかしら？それともバラしたらお仕置きしてくれるの？どちらにせよ最高ね！ああ、氷で内臓から少しづつ凍らされたり標本みたいな磔もたまらなかつたわ・・・ああでも骨を折られた時の快感もたまらないし、ねえ、秘密にするからちよつと骨折ってちようだい。全身なんてわがままは言わないわ！右手の指を一本一本折るだけでいいの！ねえ！」

息を荒げて頬を赤らめながら露子に迫るスズカの姿はまさしく変態、いや、Mの鑑だった。

頼むから少しぐらいシリアスしてくれ、本当に頼むから

今は確実にシリアスをするシーンだっただろう？なんだ、空気が読めないのか？それともあえて読んでないのか？

「その・・・もうなるべく、そういうのは・・・」

露子も引き気味で答えている。そりやそうだ。

「あらあ？あなたの魔王としての在り方・・・結構好きなのよ？あの苛烈で禁欲的で、なおかつDSな感じ・・・たまんなかつたわよ？」

それは褒め言葉になるんだろうか・・・露子ももう一步引いてしまっている。

しかし、引いている露子とは反対にスズカは頬を赤らめ、妖艶な笑みを浮かべる。女である自分ですら魅了する毒婦のような瞳で露子に熱い視線を送っている姿は本当に変質者そのものだ。

「優しくて、甘くて、お人よしで、自分勝手に、自己愛が強くて、小市民で・・・それでも歯を食いしばって帝国全部を幸せにした貴方にこそ、責めてほしいのよ。この世で一番、魔王に相応しい貴方にね。貴方のことが好きなのよ、貴方しか私のことを満足させてくれる相手はいないって思ったの」

まるで小説のような台詞を吐き出しながら、心の内を告白する。

一見すれば片思いの相手に告白しているシーンと思えなくもないが、内容がSMプレイの嘆願だからな。世も末である。

「愛してるわ、露子。だから私のこと9割殺し程度で責めてちょうだい」

前半だけなら同性に対しての告白、後半まで聞くと嘆願・・・いやもう、ここまで来ると新手的脅迫だろう。

「・・・」

露子の表情を見ると、顔を赤くしたり青くしたり・・・忙しいものだ。

まあ、一見告白と捉えられるようなものだったからな。ちよつと照れているのもある

んだらう。内容がSMプレイの強要であれ、好かれていすることに違いは無い

私がそう思っていると、扉が勢いよくブチ破られた

「私のほうが露子さんを愛してます！ドMは引つ込んでなさい！責めるなら私ですよね
!？」

「俺のほうが露子を愛してる！おい！そんなドMを責めるぐらいなら俺を責めてくれ
！」

オネスト大臣とチャンプが息を荒げて露子の目の前まで来てそんなことを言い始めた。

扉のほうに視線を移すと、シユテンやスサノオ、アカメにクロメにメズ・・・気が付いたらゴズキとエスデス、シユラまでいた。

・・・話を聞いていたのか。どこからどこまで聞いたのか分からないが、少なくともスズカの告白は聞いたのだろう。

「あつ・・・ちよつと、ずるいわよ！露子に責めてもらうのは私なんだからね！」

スズカもようやく力が入り始めたのか、ゆっくりと起き上がって腕を伸ばして露子をベッドに引き入れる。

「あつ！ずるいですよ!？」

「おいてめえこのカス女！表出ろ！」

・・・ドMって簡単に増えるんだなあ

そう思いながら私はスサノオのところまで歩き、胸元に顔をうずめた

「つかれた」

「そうか」

ああ、スサノオは優しいなあ・・・エスデスやシユラやアカメ達の目の前だろうがもうどうでもいい・・・疲れたよ、スサノオ・・・私、眠くなってきたんだ・・・

正義の味方じゃない前篇

「お前のせいで何度も死んだ」

「お前なんていなければ」

「なんで生まれてきたんだ」

「自分のやったことが正しいと思ってるのか」

「お前は正しくなんかない」

「よくもあの人を殺したな」

反響音のように声が響いてくる。何人もの大人や子供の声だ

ああそうだ、故郷の村で言われたんだ。魔王だったからいっばい言われて、当然だけれど、それでも今の両親が辛そうな顔をするのが、それが嫌で

いつのまにか、ループしてきた時に投げかけられた言葉が混じる

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

勝手に救うだなんておこがましいことをしてごめんなさい

あまりにも自分勝手にごめんなさい

生まれてきてしまっ、ごめんなさい

それでも私は、私のしたことを否定しちやいけないです

もしも否定したら、私は自分のしてきたこと全部が無駄だったと思い知らされてしま
う

何度も繰り返してきて、犠牲になった人たちの死が無駄だったと認めてしまうことにな
るから

やったことを責められるのなんて当たり前のことだ。全部受け入れたらいいだけだ
から

目が覚めた

・・・何度か見たことのある夢だけれど、慣れる気配は一切ない。

もう一度寝ようと思ったけれど、気が立って眠れないな・・・ちよつと散歩、行こう。
多少気がまぎれたら、もう一度眠れるはずだ。

ベッドから降りて適当に着替えていると背後から誰か降りてきた。振り返るとそこ
にはゴズキさんが立っていた。どうやらこちらの警護をしていたらしい。それもそう
か・・・危険種で勝手に出かけたことがあるから、大臣も警戒してるのだろう。

「どこ行くんだい、嬢ちゃん」

「嫌な夢を見たので、少し散歩に」

「つて言つて、逃げるわけじゃあねえよな」

「そんなことしませんよ。なら、2人で散歩に行くならいいですよね?」

私がそう答えると、ゴズキさんは顎に手をやって少し考え込んだ。

「……そもそも、逃げようと思えばいくらでも方法はある。魔王の力を、存分に使えばいいだけのだから。それが嫌だから、何もしないだけであつて……」

「……本当、なんか自分が嫌になつてくるなあ」

「そんならいいいぜ。どうせなら帝都の見回りも兼ねて外を回つてみるか?」

「……宮殿の中じゃなくていいんですか?」

「かまわねえさ。夜の街つてのも乙なもんだぜ」

そう答えて、軽々と私を横抱きしてテラスへと移動する。少し肌寒い気もするが、耐えれないほどではないだろう。ゴズキさんは軽々と屋根や木の上などを移動していき、簡単に宮殿の外へと出ることができた。

「さてつと、それじゃあ夜の散歩と洒落こむか」

「……ですね」

二人で並んで歩く。ゴズキさんとの間に会話が無い。というか、どういふ会話をすればいいのか分からなくなつてくる。

世間話というのもちよつとおかしいし、「いい天気ですね!」なんて夜中に言う言葉で

はない。

アカメちゃんたちのことでもいいかもしれないけど、わりと一緒に過ごすことも多いから今更だろう。

「なあ、嬢ちゃんよ」

「はっはいいい！」

うわああああ、声が裏返って変な声になった、恥ずかしい死にたい。

恥ずかしさで俯く私にかまわず、ゴズキさんは話しかけてくる。

「変な能力があるとか、エスデス將軍たちとしか分からねえ話題があるとか、んなことあ
どうでもいいんだけどよ。俺が気になるのは、嬢ちゃんがガキに見えるねえってことなん
だ」

「はっ……はい……」

「最初は背伸びしてるもんだと思ってたんだぜ。でもそれにしちやあ堂が入りすぎて
る」

「はい……」

「……試験開始前、俺と対峙した時の嬢ちゃんは明らかに人を殺したことがある目をして
いた」

「……」

どうしよう。言葉が出てこない。やけに喉が渴いてくる

「・・・殺したこと、あるのか」

その一言に、答えることができない

重たい空気の中で私は必死に答えを探した。いくらでも誤魔化すことはできるし、誤魔化さないとループしていたことを説明しなくてはいけない。そうなると必然的に私が魔王だったことを言う必要性が出てくる。

きつと理由はどうあれ、嫌われたり忌避されたりする可能性が高い。そこまで被害妄想が及んでしまつて、守りに入つてしまう。

ああ、なんて自分は弱いのだろう。なんて自分を誤魔化しているんだろう。

本当に自分のしたことを否定してはいけないと思うなら、素直に話したほうがいいのに

私は結局、自分が一番好きなのだろう。自分が傷つきたくないから、知られたくないんだ。

「・・・あ、の」

「・・・」

どういえばいいんだろう。こんな時にどういう顔をして、どう答えたらいいいのかよく分からない。

どうやって答えるのが一番正しいのだろうか？

「……その……えっと……」

「……」

「……私、は……人を……」

殺したことがあるんです

殺したことなんてありません

どちらを答えるか迷ったところで、男たちが争う声が耳に届いた。この近くであることは分かるが、こんな夜中に言い争うような状況はあまり良くないことなのだろう。

ゴズキさんも気が付いたらしい。お互いにアイコンタクトして現場に急いだ。

正義の味方じゃない後編

ゴズキさんと共に声がしたほうへと向かう。夜の闇に覆われていても、喧騒の音が聞こえてくるおかげでその場所まで導かれる。路地裏に入り、少し走ると開けた場所に出た。

建物に四方を囲まれた場所らしく、子供たちが秘密基地にしそうな雰囲気醸し出していた。

そんな少し幻想的な場所で複数人のガラの悪そうな男たちが帝都警備隊の制服を纏った男性を追い詰めているようだ。

傷口からして深手は負つてないようだが、剣が折れそうになっている……複数人を同時に相手にしていたのだろうか、武器のほうが早く限界が来たらしい。

「はっ、天下の帝都警備隊の隊長もここまでだな？」

「俺たちのお頭を捕まえやがって……」

「お頭の恨みを俺たちが晴らしてやるよ！」

「てめえはここで俺たちになぶり殺しされるんだぜ？ひひひつ、さあて……足から順々に切つてやろうか？」

「バアカ、まずは目を潰してからだろ」

「ぐっ……」

「どうやら帝都警備隊の隊長さんらしいが……パッと聞くと逆恨みか何かだろうかあまりよろしくない単語も聞こえてくる。」

「……とめないといけない。このまま放置したらあの人は殺されてしまう。」

「おいおい、何やってんだよ」

「ゴズキさんが男たちに話しかける。自然な立ち方に見えるが、しつかりと村雨が抜刀できるようにしているし、何より皇拳寺トップクラスの体術がある。」

「いきなり襲い掛かってきたとして、普通の人間ならば即座に殺せるはずだ。」

「ああん？なんだよおっさん。俺たちになんか用か？」

「おいおい、小さい女の子までいるぜ？親子連れかよ」

「チツ……邪魔くさいな、そこのおっさん、殺されたくないならさっさと帰りな」

「待って。どうせならそこのおっさん殺して、ガキのほうは売り払おうぜ。帝都には子供好きがわんさかいるから、まとまった金になると思うしな」

「そりやそうだな。……おっ、良く見りやそのガキ、目の色が片方違うぜ？」

「じろじろと私を見てくる男たち……普通ならここで嫌悪感を示すのだろうが、残念ながらオネスト大臣やチャンプさんが性的な目で見てくることに慣れたせいか全くと

いっていいほど嫌悪感も恐怖感も無かった。

むしろ今住んでいる場所のほうが夜の帝都よりも遥かに危険である。主に貞操的な意味合いで。

「それよか、兄ちゃんたち危ないことしてるなあ……そこのおっさん、大丈夫か？何があつたか知らねえけど、やめとけって」

ゴズキさんがそう止めるけれど、男たちは武器を構えてくる。

……もしも戦闘になれば、ゴズキさんは容赦なく彼らを殺すだろう。

それであの帝都警備隊の人は助かるけれど……目の前で誰かが死ぬのは、嫌だなあゆつくりと手袋を外す。少し外しただけで周囲に冷気が伝わってくるようだ

「お、おい……なんか急に寒くなつてないか？」

「気のせいじゃ……ぶへえつくしよい！」

足元の石畳に手をひたりと付ける。目標は……男たち5人の、足元

頭の中でイメージして、何度も重ねる。足元……膝下だけを凍らせるようにだけ……

「ゴズキさん」

「……なんだよ」

「手を出さないで、ください」

「……はいはい」

その返事を聞いてから、一気に凍らせる。少し威力が強すぎたのか、壁際まで少し凍らせてしまったものの、イメージ通りに足元を凍らせることだけできた。

「なっ、なんだあいきなり!？」

「どういうことだよこれは!？」

「ひいひい!! つ、冷てえ!!」

「おい、早く氷を崩せ!」

「うっ、お・・・おい! 何しやがったんだ!？」

焦る男たちの間を通り抜けて、傷だらけになっている帝都警備隊の人へと駆け寄る。怪我をしている部分を止血するために、氷で服を破く。

「あの、大丈夫、ですか?」

「・・・君は一体、まさか君がエスデス將軍か?」

「いえ、違います。その、体質みたいなもので・・・」

「そうなのか・・・いや、その体質のおかげで助かった。その凶賊たちも殺さずに検挙できそうだからな。ありがとう。まるで君は正義の味方みたいだな」

そんな言葉を掛けられてしまって、思わず俯いてしまう。きつと彼の中では人助けをしてくれるような子に見えるのだろうか。ただ単に、私の自己満足のために助けただけなのに。

私はただ、目の前で人が死ぬのを見るのが辛いだけだ。自分が嫌だから、自分が辛いから助けただけだ。

・・・誰かを助けたいなんて、そんな高尚な気持ちでやったわけじゃない

「・・・正義の味方なんかじゃ、ないですよ」

そう答えるだけで、今の自分には精いっぱいだった。

「・・・」

ゴズキさんも聞いていたのだろうか、少しだけ私に視線を移して見つめてきた。さっきの私の言葉の真意を探っているんだろう。

けれど、何も言わずに私の頭を少し撫でてから、帝都警備隊の人に肩を貸した。

「・・・ごめんなさい」

「・・・なあに謝ってんだよ」

「その・・・ごめん、なさい」

「謝ってる意味が分からないな。ともかく、さつさと帝都警備隊の他の奴にでも任せようぜ」

その後、帝都警備隊の応援を呼んで犯人を検挙したりと少し大変だった。私とゴズキさんの身元を明かしたらすぐに解放してくれたけど・・・この感じだと夜の散歩が大臣に知られるんだろうなあ・・・ちよつと、それだけが憂鬱ではある。

「ま、こんなこともあるだろ」

「そうですね・・・そろそろ帰りましょうか」

「そうだな」

またゴズキさんに抱えられて宮殿へと戻ることになった。

道中、ゴズキさんは何か私に言いたげではあったみたいだが、何も言わないまま部屋のテラスまで戻る。

・・・さっきの、言葉のことだろうか

「ま、それなりに疲れたから寝れるだろ」

「ありがとうございます・・・」

「気にするな」

そう答えてベッドまで行くと・・・チャンプさんがいた。

部屋が暗いから鮮明には見えないものの、息をいつもよりも荒げている。あとこれはたぶん下半身は見えないほうがいいだろう。鼻につく臭いがしているのは気のせいだと思いたい。

「あつ」

「・・・」

「いや！これは違うぜ！決して枕とシーツの臭いで興奮していたわけじゃ・・・」

即座にチャンプさんをエネルギーギードレインで気絶させたことは、今思い出しても大げなかつたかな、とは感じている。

ロリとシヨタの仮装祭で的一幕

帝国の建国の日、子供たちは仮装してお祭りに参加するという文化がある。いつから始まったかは分からないが、これがけっこう盛り上がる。主に子供好きな人や・・・性的な意味で子供が好きな人の間で。

「なあなあターザン！これどうだ!?正義の味方になってみたぜ!」

「・・・あ、あの・・・ガイ君、いい加減私の名前で・・・」

「だって露子ってターザンじゃんか!なんで今日ターザンの格好してねえの?俺、てつきりターザンの仮装すると思ってたのに!」

「・・・た、ターザンは、やめてほしいなあ・・・」

露子の弱弱しい言葉に少し笑ってしまったが、まあ、ガイやポニイたちが楽しそうで良かった。

子供たちがわいわいと仮装した姿で賑わっている中、宮殿の中庭の端っこで警護にいらそしむことになるなんて・・・メズと一緒に仮装したかつたぜ。

「おいゴズキ、お前の娘も猫耳としっぽ姿の仮装してるんだな」

「ああ・・・」

俺が子供たちを見てみると、シユテンが声を掛けてきた。

「シフト確認をしてないからだ。せつかくメズも来ているんだらう？」

「チツ……ここんとこ忙しかったんだ、異民族の暗殺者始末したりよ」

本当にあの異民族の暗殺者共が憎らしい……ただでさえ子供たちの教育もあるつてのに宮殿に忍び込みやがって……始末した後でもむかついてくるな

「今日は子供たちが帝都に出るんだらう？大丈夫なのか？」

「それぞれ兵士や皇拳寺の奴が保護者代わりに来るつてよ。世の中にはお前みたいな変質者が山のようにいるからな」

「どこが不審者だ。ノータツチだぞ?!」

「……それならその胸元から見える盗撮写真と下着をどう説明するんだ？あ？」

シユテンの胸元にはしっかりとお風呂場でじゃれあい幼女たちの写真が見え隠れしていた。下着はおそらく露子のものだろうか……羅刹四鬼としての立場と能力を完全に悪用してやがる。

おい良く見たらメズの写真もあるじゃねえか、こいつ半殺し決定だな

「……盗撮と覗きと妄想は、誰も穢してないから平和的だと思うぞ」

「俺の目を見て言いやがれ」

そんな会話をしていると、ふと、視線の端に露子を捉えた。

どうやら困っているようだ。

・・・つたく、仕方ないな・・・

「あれ？ナジエンダお姉ちゃんは？」

クロメちゃんが私に尋ねてきたので、「今日はお休みだつて」と答えておく

「こここのところの心労が祟つたんだろうなあ・・・ちよつと罪悪感が湧いてしまう。

「なあ、露子。今日は私とクロメ、ツクシにお前の4人で回るんだよな？」

アカメちゃんがツクシちゃんとクロメちゃんの二人と手を繋いだまま聞いてくる。

「そうそう。あ、でも保護者役で一人だけかついてくれるはずだけど・・・」

「誰が来てくれるんだろうね、アカメちゃん」

ツクシちゃんほにこにここと笑いながらアカメちゃんの顔を覗き込む。

「おつ、いたいた」

聞きなれた声に振り向くと、そこにいたのは狼耳を付けたシユラさんだ。

あからさまに嫌そうな顔をするアカメちゃんを見ると、なんだか原作のクールなアカメちゃんを忘れてしまいそうになる。

ツクシちゃんとクロメちゃんはアカメちゃんの後ろに隠れてシユラさんを見上げていた。シユラさんが女の人連れ込んだりしてたり、言葉づかい悪かったりと悪印象だか

ら仕方ないよなあ

「あの、シユラさんも参加するんですか・・・？」

「親父に言われてな。ナジエンダの姉ちゃんが休んじまっただろ？だから俺が露子の担当な」

飄々とシユラさんがそう言った瞬間、アカメちゃんが間髪入れずに「帰れ」と言い放った。

「おいしいきなりか」

「クロメとツクシが怖がつてる」

「ああ？俺は親父に頼まれて仕方なく・・・」

「大体露子よりも弱そうなのに保護者代わりになるわけない」

アカメちゃんの一言がある意味真実をついていて、場が凍った。

・・・そ、そりゃあ・・・私も能力を使えば勝てるわけだけど・・・いやでも、さすがにそれをシユラさんに言ったら・・・

「・・・てめえ、ガキだと思つて下手にでてりや勝手なこと言いやがつて・・・」

「子供相手に、大人げないと思わないのか？」

「大人げないだあ？てめえこそ年上は敬えつて言葉を知らねエみたいだな」

ど、どうしよう・・・喧嘩する前に止めないといけないけど、でも・・・エネルギー

ギードレインとか氷雪なんて使えないし、危険種もダメだし・・・

どうしたらよいか狼狽していると、向こうのほうにいたはずのゴズキさんがこちらにやってきた。睨み合うシユラさんとアカメちゃんの間に入って「まあまあ」と仲介し始める。

「お前らが仲良くしてないと、お前らの好きなお嬢ちゃんが困っちゃうだろう？」

そう言つて、私のほうへと不敵な笑みを浮かべてみてきた。

「えっ、あつ、ああ、あの・・・その・・・」

その言葉にシユラさんとアカメちゃんは互いに顔を見合わせながら、私に小さく謝罪してきた。あ、謝るのは私のほうなのに・・・

うう・・・もつと私が上手くやれてれば・・・コミュニケーションがとれない・・・コミュニケーション過ぎて、自分が情けない

「・・・嬢ちゃんがそんな顔すんなつて」

「つわー!」

ゴズキさんがぐしゃぐしゃと私の頭を撫でてきた。

「もつと年相応にわらつてりゃいいんだよ。な?」

「・・・は、はい・・・」

・・・少しだけ、故郷にいる今の父親のことを思い出した。

・
・
・
元気にしてるのかなあ
・
・
・

教主様は通常運転（ただしドリフト走行）

“帝国領土内キヨロクにおいて、予知と治癒の力を持つ青年がいる”

そのような報告が皇帝並びに内政官・將軍たちに知らされた。

謁見の間のため、騒がしくなることはないが一同に動揺は伝わっているらしい……同僚同士で顔を見合わせたりにしているようだ。エスデスはいつも通りすましていた。

まるでそれは、大臣が連れてきた少女のようではないかと……

その報告に皇帝は間を置いて、こう発言した。

「宮殿に招いて真偽を確かめよ」

「……陛下、真ですか？」

ブドー大將軍が皇帝に問いかける。周囲の將軍たちもオネスト大臣は視線を皇帝陛下に向けてのことしかできなかつた。彼らは今しがたの皇帝の言葉を信じることができなかつたのだ。

皇帝自身がそういった噂や報告に対して興味を持つと思つてなかつたという認識がみんな強いからだろうか？

あまり子供らしくは見えないし、何よりも不確かな情報に興味を持つだなんて……
「ああ。先ほどの報告にあった予知のできる青年……その者を宮殿に呼び、真偽を確かめる。それが真実であるならば。帝国にとって更なる繁栄の礎となるだろう。よって、その者をここに招くのだ」

静かに、しかし力強く皇帝陛下は臣下たちに命じた。

【露子の私室にて——】

「……それって安寧道の教主様じゃねーのか？」

出来立てのカップケーキを食べながらシユラがナジエンダとエスデスに話しかける。露子はアカメ達のおやつとして作っているカップケーキの準備をしながら立ち聞きしていた。

なお、この場にはスズカもいる。しかし彼女は現在、エスデスの椅子になっっているために会話には参加しないのをここに記しておこう。

「そうだろうな……」

ナジエンダが頭を抱えながら煙草に火をつける。

「ここで煙草を吸うな」

「ん、ああ……すまない……」

エスデスに注意されてすぐに煙草の火を消した。

まさかこうして煙草を注意されることがあるとは・・・と、ナジエンダは少し複雑な気持ちでエスデスを見た。ナジエンダが煙草を吸い始めたのは帝国から離反した後のことだ。

こうした和やかな（※一部人間椅子になっているドMもいるが）雰囲気の中、エスデスの傍で煙草を吸うことは初めてであった。

「煙草は好かん。煙と臭いあまり好きではないからな」

「それは初めて知ったな・・・」

「へー、意外だな。エスデスにも苦手なものとかあるんだな」

シユラのその一言でエスデスがジト目でシユラに視線を向けた。

「私も人間だぞ・・・芸術の類も分からんし、苦手なものぐらいはある。お前は私のことをどう思っているんだ」

「あんた規格外の化け物女だから、弱点なんか持ってない色気ゼロ男運皆無で男の趣味も悪い人外戦闘狂かと思ってた」

「シユラ、今すぐ拷問室に來い。貴様の股間についてる鞣丸を二つとも潰してやる」

そんな二人を露子が宥める光景を私はぼんやり見ていた。

100万回繰り返した先の、この世界でこんな光景を見るとはな。

・・・そろそろ、ラバックとまた出会えるのだろうか。他のナイトレイドの者たちや、イエーガーズもそろって、こうして楽しく過ごせるのかもしれないと思うと・・・なんだか不思議な気分になってくる。

魔王であった頃の露子を倒した後はタツミがハーレムを築いていたのをふと思い出した。

・・・懐かしいな。露子がいなかった周回はそういった奴じやなかったが・・・
・・・そういえば以前、チャンプと遭遇した時にエスデスも言っていたな・・・「タツミがタツミじゃない」と。そのあたりのことは、やはり露子は何かを知っているのだろうか？

「あ、あの・・・」

ふと、聞きなれない声が聞こえた。

声が聞こえてきたほうを見ると、部屋の扉から誰かがこちらを覗いていた。雰囲気からして宮殿の者ではないようだが・・・少しばかり記憶とは違うが、その人物に見覚えがあった。

安寧道の、教主だ

どうやらエスデスやシユラ、露子も気が付いたようで・・・

スズカも気が付いているとは思いますが、奴は今椅子になることに没頭しているし、露子

との約束もあるから変なことはしないはず．．．と、信じたい。

「えつと、貴方は．．．？」

私が声を掛けると、教主と思しき青年は顔を赤らめながらも手を差し出してくる。

「あの、道に迷ってしまったんです．．．ですが、貴方のような美しい方と巡り会えて嬉しい限りです」

．．．お、おう。

今はモテ期真っ最中の姿だからな、褒められるのも仕方ないだろう。しかし教主はこんな性格だったのだろうか．．．あまり突っ込んだところまで知り合ったり話したことはないから、分かりづらいが。

青年が私の手を取り、にこやかな微笑みを浮かべて見つめてくる。

「貴方のことを夢で見たことがあります」

「ゆ、夢か．．．」

「ええ、夢のなかでのあなたは今よりも少し大人びていて、民のことを真に思う人間として振る舞っていました。しかし真のあなたは清らかな乙女で．．．」

「おっ．．．おう．．．」

夢で見ていた．．．自分がナイトレイド時代のことだろうか？

ならば教主も記憶持ちということになるのだろうが、何やら私やエスデスたちとは何

か違うようだ。いや、それよりも手の甲に口づけを落としてきたあたりで、正直もう何も考えたくない。

なんだこいつ・・・

「ああ、そこにいるのは夢で見た女性・・・いえ、良く似ていますね。少しお顔を拝見させてもらってもよろしいでしょうか？」

エスデスと露子にこやかに話しかけて彼女たちと視線を合わせる。

ふむ。やはり教主のようだが・・・それにしても・・・

「貴方方と良く似た女性を夢で見ました。あれは予知夢なのかどうかわかりませんが、ここでこうして出会えるということはきつと何か意味のある・・・運命的なものなのでしょうね。・・・ん、お二人とも、口元に食べ物の欠片がついていますよ。とてもかわいらしいですが、折角可愛いのですから身だしなみには気を付けてください」

「そうか」

「えっ、えつと、あの、はい・・・」

「おや、こちらの貴方も夢で見た女性に似てますね。なぜ椅子になつてゐるんですか？折角綺麗な顔立ちでスタイルもよろしいのに体を痛めますよ」

「あたしはいいのよ。好きで椅子になつて・・・ハアハア」

・・・もしかしてこいつ・・・

「おや・・・貴方は」

男がシユラのほうへと視線を向ける

「・・・俺も夢で見たのか？」

「夢で見ましたが、やはり綺麗な顔立ちとどこか気品を感じさせています。清廉そのものとは言い難いですが、どこか純真な部分も感じさせますね。ああ、貴方も口元についてますよ。ほら、お気をつけてください」

「っ、な、触んな!!」

そんなことをしていると、扉から顔を赤らめた兵士たちが現れた。

「あ、あの、ここにいましたか」

「謁見の間はこちらですよ」

「ああ、そうでしたか・・・すみません。わざわざお手を煩わせてしまつて。貴方も大変でしょう？息があがつていますね。少し休まれてはいかがでしょうか。もしも倒れてしまつたら不安です。先ほどもお声を掛けて頂いた將軍の方々みなさん、腰が抜けてしまつていたようですし・・・心配です」

・・・こいつ、天然たらしだ

いや？ジゴロか？ジゴロなのか？

「・・・教主様も、状態異常起こしてますね」

ぼつりと漏らした露子の一言に、思わず私もうなずいてしまった・・・

帰宅編

オネススト大臣と露子の昼下がり 前篇

暑い日差しが照りつけ、草木が生い茂る。そう、帝国にも夏がやってきたのだ。

今日も今日とて露子が引き取った子供たちはそれぞれの師の元で特訓に励む者、仕事に慣れ始める者もいた。なにより、ゴズキが面倒を見始めた子供たちは特に戦闘技術面の素質が高く、彼も指導に力を入れているようだ。

そんな暑い中、露子は宮殿の者達のために「氷雪」の力を使ってかき氷を作っていた。削っているのはスサノオであり、生物帝具のため疲れ知らずで働いている。

手伝っているクロメとアカメは仲良くかき氷のシロップをかけているようだ。

「本当に変わったやつだな」

エスデスはそんなことを言いながらレモンシロップの掛かったかき氷を食べていた。「いいじゃないか。お前も混ぜぎってきたらどうだ?」

「ナジエンダ、冗談をいうな。私のこのデモンズエキスの力は敵を蹂躪するためのものだ。かき氷を作るために使うなんて馬鹿げている」

いちごシロップの掛かったかき氷を食べているナジエンダをエスデスはジト目で見

るが、ナジエンダは意に反さずにかき氷をひたすら食べていた。

「……この世界でぐらい、戦うことを忘れたらどうだ」

「それは無理だな。戦うことこそが生きること……それが私の生き方だ。1000万回繰り返してきた今でもそれは変わらない。生き方を曲げるほど私も甘くなつては無い」

「今の帝国は異民族ぐらいしか敵がいまいぞ？今までのように革命軍もいないこの世界で、どうやって生きるといふんだ」

「なに、敵を蹂躪するならば超級危険種もいるだろう？ふふふつ、世界にはまだそういう危険種もいるそうだからな。有休でもとつてそのうち狩りにいくさ」

そんな会話を彼女たちがしているのを露子は遠くから眺めていた。

なんだかんだで仲良くしているようで良かった……と、安心する露子。今まで彼女たちはほとんど敵対ばかりしていたけれど、やはり平和な世の中なら良い友人になれるようだ。

そう思いながら、かき氷のおかわり分を作っていく

「露子」

ふと、声が聞こえた。

視線を移すと皇帝陛下がいた。いつもと違ってマントと帽子は被っていないようだ。公務の休憩時間なのだろうか、御付きの兵士もいないようだ。

「その、余も食べて良いのか・・・?」

公務の時と違い、やはりプライベートは年相応に見える仕草や言葉遣いをする。

・・・公務の時の皇帝陛下は、貫録がありすぎる気がする。露子はそんな違和感を持っていたが、それもシュテン達の状態異常と同じようなものだろうと思つて黙っていた。

「大丈夫ですよ」

「そ、そうなのか・・・その、それで」

「?」

「・・・余と一緒に、食べてくれぬか?」

「いいですよ?」

少しだけ頬を赤らめて尋ねる皇帝陛下ににこりと微笑む露子。

すぐにスサノオにかき氷を作ってもらい、2人で仲良くかき氷を食べ始める。

「その、公務が忙しくて、たまに一緒に紅茶を飲むだけだが・・・こういうのも、いいな」
「喜んでもらえて良かったです。ここところ暑くなりましたし・・・あの、陛下も・・・
気軽に、その、他の子たちと遊んでもいいと思います」

「・・・余が、遊んでも良いのか?」

「いいと思いますよ。その、みんなで遊んだりしたほうが楽しいですし」

にこりと笑う露子に、皇帝陛下は遠慮がちに微笑み返した

「……相変わらず優しいな、露子は」

「え？」

「……あつ、いや、その……いつも露子は優しいという意味で、その」

「ありがとうございます……？」

「相変わらず」という言葉に違和感を覚える露子であったが、すぐに気のせいだと思
い直した。

その様子を宮殿のある部屋の窓からオネスト大臣は眺めていた。

オネスト大臣の警護にあたっていたゴズキは黙ってそれを見ていた。殺気にも近い、
いやこの場合は嫉妬だろうか？

「大人げねえなあ……皇帝陛下下つつてもガキ同士だろ……」

「……」

「あのー、大臣。どうせなら俺たちもかき氷を食べに行きませんか？」

「……いえ、それよりも露子さんを私の部屋に呼んでください」

「そりゃあいいですけど……」

「後、私室の護衛は要りません。代わりにエスデス將軍を部屋の入口に。いいですね」

「……了解しました」

オネストはそのまま私室へと戻っていく。ゴズキは嫌な予感を感じながらも露子を呼びにいくことにした。

大臣は生まれてこのかた、嫉妬をしたことが無かった。

チャンプやシュテンのように露子をちやほやするペドフェリアやロリコンに対しては対抗心が生まれていたのであつて、彼らに嫉妬したことは一切ない

シユラやゴズキについても同じことが言える。

要するに彼らに嫉妬するほど、彼らを恋敵として認識していないのだ。

・・・どうせ、自分のほうが地位は上で立場も上だという驕りがあるからだ。

だが、皇帝陛下と仲良くしている露子を見た瞬間、今まで経験したことの無い感情が湧いた。

腸が煮えくりかえる様な、そう、今すぐにでも立場を忘れて撃ち殺したくなるような気持ちをおネストは抱いていた。

だが、相手は皇帝陛下だ。そんなことはできない

・・・もしも、もしもの話だが、皇帝陛下が露子を入ったらどうなる？

露子の能力も、露子の母体としての価値も、そして露子自身も全部諦めることになる
そう思い至った時、ついに彼は決心した。

オネスト大臣に部屋に呼ばれ、部屋の前にエスデスを残して露子は私室へと入室する。

オネストは開口一番、露子に対してこう言った

「露子さん、いえ、氷雪の魔王。私と取引しましょう」

オネスト大臣と露子の昼下がり 後篇

露子はいきなりのオネスト大臣の言葉に面食らった。

そしてすぐさま、彼が記憶保持者であったのだと思ひ至り、背筋が凍った。恐れていた事態が起きたのだから仕方ないだろうが……

オネスト大臣は露子の様子が付いてすぐに弁明することにした。

ここでいきなり攻撃されたらたまったものではないからだ。

「怖がらないでください。別にあなたに恨みはありませんし、殺す気もありません」
「……わ、わかり、まし、た」

息が荒くなりそうなのを必死に整えて、露子はオネスト大臣を見上げる。

「私と取引をして頂きたくて、この度隠していたことを話そうかと……」

「か、くしてたつて……その、記憶のこと、ですか？」

「ええ。本来ならば言うつもりはありませんでした。しかしながら……思っていたよりも貴方のことを好いていると気が付いたのでね」

オネスト大臣の言葉に露子は一瞬、虚を突かれた。

「私はですね、今まで愛情なんて他人に向けたことがありませんでした。貴方が初めて

「なんですよ？」

「……あのつ、その、でも……今までそんな、こと」

「繰り返し返してきた中ではありませんでしたねえ。今の自分が、今の貴方を好きになつたんですよ」

オネスト大臣が飄々と露子に返答するが、露子の表情は戸惑いと恐怖だけしかなかつた。

「そりやそうだろう。」

「あの」オネスト大臣の言葉なのだから、素直に信用することは難しい。

「……貴方の能力は確かに認めています。是非とも利用したいですし、貴方と結婚してできた子供を手駒にしたいとも思っています」

「！」

「ですが貴方のことを愛しているのも本当です。誰にも奪われたくありません。それがたとえ皇帝陛下だとしても、私は貴方を渡す気はありません。逆賊になつてしまつてもいいぐらいには」

オネストの言葉に露子は何も答えない。いや、答えることができない。

信用できるかどうかはともかく、こうしてオネストが自分へ向けている言葉を全否定することが躊躇われたのだ。

「……大臣、なんで、私に……記憶のこと……」

「好きだから。これだけです。本当ならば隠し通したいことだらけでしたよ。子供を利用したいだのなんだの、貴方のような甘い考えの持ち主は嫌いでしょう?」

「……甘く無くても、子供を利用するのは……」

「悪いこと、だと言うんでしよう? そうやって否定されるから秘密にしていたんです。まあ、貴方の考えは悉く甘すぎて温すぎるんです」

「……」

「それでも私は、自分の欲望を全部曝け出したうえで本当に貴方に選んでもらいたいから、こうして話したんですよ」

信用できる発言か否か、彼女は迷ってしまっていた。

これも全て自分を信用させるためなのかもしれない……けれど、信じてもいいんじゃないかと思う気持ちもあるのだ。好意を受け入れるかどうかは別としても、だが。

「……分かります、お話ししたことが、本当かどうかはともかく、記憶があることなどを教えてくださって、ありがとうございます。それで、取引つていうのは……」
「簡単なことです。私のことだけを愛してくださるならば、帝国を支配することも皇帝陛下を傀儡にすることも全て諦めます」

「えっ?」

何か後ろ暗いことを取引するのかと思っていた露子であったが、大臣の発言に驚愕してしまった。

驚愕というか、半ば混乱しているのだろう。

怯えていたことも忘れたかのように大臣の目を見て「何言ってるんですか!？」と慌てて問いかける。

「取引ですよ。私のことだけを愛してくださるならば、自分のやりたいことはこの際二の次にします。」

「あ、あ、あの、そういうことじゃなくて!」

「貴方みたいな人は他人について甘くするでしょう?・・・今までは大目に見ていました。しかし、もしもあなたが私以外の誰かを愛するなんてことになったらと考えたら恐ろしく思いました。」

「違うそうじゃなくて!あの!え?本気で言ってるんですか!」

「本気じゃなければこんなこと言いません。まったく・・・こんな取引なんてしたくありませんが、貴方が誰かに奪われることを考えたら・・・」

そう言いながら、オネストは露子を抱き上げてベッドへと押し倒した。

「私のもものになってください、露子さん」

「えっ・・・あ・・・」

「早く言ってくれなければ、このまま既成事実を作ってしまうですよ」

取引とは名ばかりの、脅迫まがいの行為に露子は反論しようとしたがその前に「分かっていますよ」とオネストが冷たく言い放つ

「取引というよりも脅迫ですね。いえ、というよりも嫉妬ですよ。たとえば陛下だろうと、他の男と仲良くされて嫉妬してるんです。だから、絶対に、私のものになつてほしいんですよ」

「やつ、やめて、ください。そんな、いきなり・・・言われても」

「無理です。今決めてください・・・私のものになると。言わないならいいですよ。このまま犯して既成事実を作れば誰も手出ししませんからね」

露子が着ている服を破き、更に脅しをかけてくる。

「ッ!？」

「さあ、ほら、早く言ってください」

「そ、んな、の・・・」

「・・・強情ですね」

そのまま自分へと口付けようとする大臣に対して、露子の許容範囲を超えてしまった。

その数瞬後、大臣の悲鳴が部屋に響き、露子がドアを氷雪で壊して部屋から飛び出してくる。

部屋の前で警護していたエスデスは間一髪で交わり、露子へと視線を向ける。

「おい、露子」

「う．．．あ．．．」

露子の姿と表情を見て、エスデスも具体的に何があったのか察したのだろう。

「．．．露子、お前」

「．．．つう、あ．．．っひつく．．．」

溜息を吐いて、エスデスが露子に近づいて抱き寄せた。

「まったく、メンタルが弱いなお前は」

「っあ．．．」

「しかしまあ、大臣も急いたものだ．．．少し灸をすえたいな」

「．．．ひつく．．．」

「露子、実家に戻るか？」

「．．．え？．．．じつか？」

「そうだ。里帰りして大臣を困らせてやれ。多少の意趣返しを覚えるべきだぞ」

「．．．」

「私が一緒にいてやる。こういう時ぐらいは他人を頼っても構わん……私は困ることが無いからな。」

そう答えてしつかりと露子を抱き寄せて、実家に戻るといふ選択肢をエスデスは提示した。

静かに泣いていた露子も小さく頷いて、その提案を了承する。

エスデスの優しさに触れていると露子は安心して身を預けていた。

「(露子は騙しやすく助かる)」

・・・タツミに会いたいという目的が達成できると、エスデスが笑っていることにも気が付かずに

外伝：ナジエンダ先生の恋愛教室

露子がエスデスに保護されて数時間後にはオネスト大臣が露子に何かをしたと宮殿の中で噂になった。ちなみにエスデスが子供たちに賄賂（お菓子）を与えて噂を拡散させたのが原因だ。

・・・もちろん、そんな噂を拡散させなくとも、何かがあつたであろうとはオネスト大臣の私室のぶつ壊れ具合と露子の怯えた様子（また破かれた服を着た姿など）で皆が察したのだが。

オネスト大臣やシユラが食事のときは同席する露子が、その日の夕食の場に出席することもなかった。当たり前と言えば当たり前なのだが、大臣は不服そうにしている。

露子がエスデス將軍と共に食事をするとアカメ達に託けて、エスデスの部屋に籠っているのだ。

夕食の時間帯にも私とスサノオが警備につき、あとは羅刹四鬼のシユテンとゴズキが天井裏で警備をしていた。シユテンについてはかなり機嫌が悪いみたいだが、オネスト大臣に問い詰めることは未だにしていないうだ。

・・・シユテンにも最低限の理性はあつたらしい。普段は無いに等しいけれども。

「確かに強引な手段をとりましたよ？でも食事を一緒にとらないほど拗ねるなんてあんまりですよ」

大臣、貴様全然懲りてないな？

私がそう思っているのが伝わったのか、スサノオも私に目配せして小さくため息を吐いた。

スサノオも少しばかり人間らしい仕草が増えたな。やはり子供たちの相手や兵士たちと一緒に過ごしている時間が多いからだろう。

「どう考えても親父が悪いぜ。強引すぎだろ」

「自覚はしてますが・・・」

「こうなった時の女はめんどくせえからな。ささつと謝っておかねえと長引くぜ」

シユラがオネスト大臣に呆れた様に発言した。あのシユラが大臣に意見するなんて・・・あいつも成長したのだな・・・

今まで周回した世界のほぼ全て成長度0で大体がラバックやこの世界にいない帝具使いに瞬殺されていたが、なんだかんだで常識を学ぶことができたらしい。これは良い傾向だと・・・

「大体よお・・・そういう時は無理やり襲うよりも、女が喜びそうなもん与えてりゃあ他の男のところにいかないだろ？」

……ん？

「はあ……そうですよね。つい嫉妬心が先んじてしまつて失念していました」

「本当に惚れてるんだな。ま、男が金使いまくつて貢いでりやあ女なんて落ちるだろ」

「……ですねえ、それじゃあまず貴金属でも買いいこんで仲を修復しましょうか。どうせならオーダーメイドでネックレスとかにしましょうかね」

「ついでに高い店でディナーだな。機嫌が良くなりやあそのままホテルに連れ込めるんじゃないの？」

「そうですねえ。では帝都でも有名な料理店の予約も入れておきましょうか。あとは洋服も買いましょうかね」

「ついでに下着も買つておけよ」

「ああ、それはいいですね。色気のない下着ばかりですし」

「あいつ、押しに弱いからガンガン行けばころつと落とせるぜ」

「よし、とりあえず明日から頑張りましょうか」

「つつても、さすがにガキの姿で手を出すのはやめてくれよ。そこんどこも気を付けてれば落とせるはずだし、俺もそれなら問題はねえ」

「ふう、少し計画とズレてしましますが、数年頑張れば露子さんが私のものになるなら……」

あまりにも酷い会話に、私の中の何かが切れた

「お前たちは馬鹿かああああああああ!!!」

恐らく、この世界に生まれてきてから一番大きな声で私は怒りを込めて叫んだ。

天井裏にいたゴズキがそのまま部屋に落下し、シユテンも続いて落ちてきたのだが、驚いたのだろうか。いや、羅刹四鬼はどうでもいい

「いいから！オネスト大臣にシユラ!!そこに正座しろ！」

「な、なんですか、私に命令なんて・・・」

「おいてめえ、何様のつも・・・」

「いいから!!!正座だ!!!早くしろ!!!」

「私はこの国の大臣なんですよ」

「おい、親父になんて口を・・・」

「オネスト大臣！貴様の今の対応で露子を振り向くと思っっているのか!?ふざけるのも大概にしろ！」

私が勢いよく言うと、大臣とシユラは顔を見合わせて、嫌そうにしながらも私の前で

正座をする。

素直なことよろしい

「さつきから聞いていれば貴様らはなんなんだ！宝石や服で女が惚れる？高いダイナーに誘って機嫌をとる？揃いもそろって女の扱いが下手すぎるぞ！そんなだからモテナいんだよ！」

「なっ……」

「んだと、俺はこう見えて顔は男前なんだからな！」

「顔と体術だけしか貴様の利点はないぞ！」

私の一言でシユラがすぐに黙ってしまった。

なんだ自覚していたのか

「そんなことで女を落とせると思ったら大間違いだ！それ以前に貴様らは物で釣るな！愚直でかまわない……貴様らのような超絶かつこつけタイプの男はストレートに告白すればいい。何度玉砕しても諦めずに手を変え品を変えて諦めずにアタックすれば落ちる」

「……」

「……」

私が自信を持ってそう伝えたが、いまいち反応が悪い

「かつこいい姿やデキる姿なんてわざわざ見せなくてもいい。本音を出せばいいし、自分の弱さを見せたほうがいいと思うぞ」

「そつ・・・そんなのかつこ悪いだろ・・・」

「そうですよ！なんでそんな泥臭い姿を女性に見せなければ・・・」

「喝ツツツツツ!!!」

私が二人に叫び、深呼吸をした。

もうだめだ。これはやるしかない

「これから私がみっちり恋愛について教えてやる！覚悟しろ！」

実家に帰らせて頂きます

オネスト大臣が露子に無理やりなプロポーズをしたと耳に入った。

公務中であつたから良かったものの、おそらくは余の末裔もこの情報を聞いてしまつて
いるだろう。

公務を早く終わらせ、すぐに自室で眠りについた。

目が覚めると、いつも通りの精神世界・・・だが、余の末裔は頭からシーツを被つて
体育座りをしていた。

「話を聞いていたのは知っている。だが、オネストは元々あいつた人間だとお前だつ
て分かつているだろう」

「・・・そつ、それは、そうだが、でもあれは、今までそうだけだ・・・今度は、
今度こそ、余と共に・・・」

下手に繰り返してきた記憶があるせいか、どうやらオネストが眞人間である希望を抱
いていたらしい。

無理もないことだ。余の末裔はあまりにも情が向きすぎる・・・特に自分が心を開い
ている者に対してはかなり情を向けてしまう。

「……」

「どうすればいい、余は、余は、今度こそ……オネストやブドー達と良い国を、民のための国を……」

「他者に目をかける、いや……他人に依存するのはやめろ」

そんな言葉を投げかけると、涙を目に溜めた末裔がこちらへと視線を移した。

子供との距離感というものは、生きていた時から苦手なもので……正直それは今も変わらない。

皇帝としての言葉と、人としての言葉のどちらで語ればいいのか分からなくなるのだ。

だが、そんなことは言ってられない。

「お前も自覚しているのだろうか？誰かに依存して生きることぐらいは……」

「余は、そんな……余も皇帝の、一族で……オネストに騙されていたのは余が未熟だったからだ。オネストに依存なんて」

「いや、本当は分かっていたはずだ。だがお前は帝国を統べる皇帝の重責や両親がいない寂しさを誤魔化していたんだろう……オネスト大臣相手にな」

シートを被っている末裔の手が、シートを強く掴む。

余と視線は合わせているが泣きださないようにしているのだけは分かった。

子供を虐めているようで心苦しくなるが、目の前の末裔は・・・子供以前に、この帝国を治めるべき後継者なのだ。

「現世では余がお前の代わりに公務をしていた。お前にはまだ皇帝としての才能が発揮されていないからな・・・しかし、そろそろ余も消えるべきなのかもしれん」

「！き、消える、だと・・・」

「いつまでも余が国を治めていることは出来ない。本来ならばお前がこの帝国を治め、家臣たちと共に国を守っていくのが筋だろう。」

「まつ・・・待て、消えるなんて、言わないでくれ」

「・・・いや、余は消えるべき存在だ。もちろん、今すぐに消えることはしないから安心しろ」

「消えるべき・・・？」

余の末裔に本当のことを教えなければならぬ

・・・もう、余の末裔が繰り返した帝国の終焉を回避するためにも

余の末裔が皇帝として、民を幸せにするためにも

「余の正体は・・・始皇帝だ」

エスデスの部屋にて、エスデスと露子が荷造りをしながら話し合っていた。

あまり荷物が無い露子に対して、エステスは何故か捕縛道具などをバッグに詰めてい
るようだ。

いつもの露子ならここですぐにタツミを捕まえるためだと気が付くのもかもしれない
が、生憎ながら彼女は自分の周りで起きた問題で圧死しかねない。

ようするにスルーしている。

ツツコミなんていなかったのだ・・・

「その・・・異性から、告白とかされたことなく。オネスト大臣の告白を断るべきか分
からないんです」

「・・・露子、お前何を言っているのか分かってるのか？オネスト大臣の告白を断るか迷っ
ているのだと？」

「とつ、特に付き合ってる人とか・・・好きな人がいませんし」

「それで？」

「えっ？だ、だから断る理由が無いんです」

「・・・お前は何を言っているんだ」

「何をつて・・・好きな人や付き合っている人がいないのに告白を断るのつて不誠実じゃ
ないですか？」

「・・・相手はあのオネスト大臣だぞ。あんなのが好みか？普通は嫌がる女が多いと思う

が。いや、それよりもオネスト大臣は嫌いなんじゃないのか？」

「嫌いじゃないですよ」

「・・・なんだと？嫌いじゃない？」

「確かにちよつと変質者じみたこととしてますし、悪人だとは分かってます。でも、頭が良
いことは確かですし・・・コミュニケーション能力もあるからこそ、帝国でのし上がっ
てきたんだらうな、と。」

「そういう見方もできるのだから・・・」

「そもそも、本当に好きかどうか分からないんですけどね。騙されてるだけかもしれない
せん。けど・・・それならもつと上手くやってたんじやないだらうか、とか・・・ちよつ
と色々、今でも考えてます」

「面倒だなお前は」

エスデスの言葉に苦笑しつつも、露子は荷造りを終えた。

エスデスが今も怖いことに代わりは無いが、それでもこういった時には真摯に向き
合ってくれる彼女に感謝もしている。そういう部分が、きつと部下にも慕われているん
だらう、と。

「こんこん、と部屋がノックされる。

「誰だ？」

「俺だ俺、大臣の息子様が来てやったぜ」

「そうか帰れ」

エスデスはシユラが来たと知ると否や即座に入室拒否をした。さすがにそれは失礼だと露子がエスデスをなだめて、部屋へと招き入れる。

「あー・・・親父がすまねえな」

「いえ、あの。シユラさんが謝罪しなくてもいいんですよ」

「なんつーか・・・まあ、いろいろあつたんだよ。」

少しだけ遠い目をしてシユラが苦笑する。心なしか疲弊した様子が伺えるが、露子とエスデスにはなぜ疲弊しているのかは分からなかった。

ナジエンダにオネスト大臣共々説教をされ続けたせいとか、さすがのシユラも精神的に疲れてしまっていたのだが、そのあたりのことを露子たちが知ることは無いだろう。

「・・・つか、荷造りしてどこかに行くのかよ」

「露子の実家に行くぞ」

「あの、オネスト大臣には内緒でお願いします」

エスデスと露子の言葉にシユラはもちろん驚いた。しかし、すぐに考え直す。

露子の故郷にはタツミがいる。しかも、露子の弟としてだ。

この世界でもナイトレイドが発足するとは思えないが、タツミには繰り返してきた世

界で何度も痛い目に合されてきた。

エスデスがいる以上、まさかタツミを殴ったりもできないだろう

・・・・なら、今のうちにタツミを手懐けてしまえばどうだろうか、と。あわよくば自分の部下にしてしまえば、将軍級の器とされるタツミが自分の戦力になる。

「・・・俺もついていっていいか」

「・・・」

シユラの言葉にエスデスはあからさまに嫌そうな顔をする。おおよそ原作ではありえないだろう全力の嫌そうな顔だ。

「だから、色々気になることがあるから行くんだよ。そこまで嫌そうな顔すんじゃないやねえよー」

「私はいいですよ。エスデスさんもそんなに嫌がらなくても」

「・・・露子がいいならかまわん。しかしタツミに何かしたら私が直々に拷問してやる」

こんこん、と再びドアがノックされる。

「・・・また客人か。今度はスズカか？それともシユテンか？」

エスデスがため息を吐きつつドアを開けると、そこには皇帝陛下がいた。

「夜分遅くにすまぬ。その、話を偶々聞いたのだが……余も、一緒に露子の故郷に連れて行ってくれ」

翌朝

エスデスの部屋のテーブルに露子の指に嵌められていた指輪がメモ用紙と共に置かれていた。

『実家に皇帝陛下とエスデス將軍、シユラさんと共に帰らせて頂きます』

『そのメモ書きの内容を知ったオネスト大臣は宮殿中に響くほどの絶叫をあげて気絶した。』

実家に戻って参りました。

雪が降る寒村

生まれ育った故郷へと露子は戻ってきた。

皇帝陛下やエスデス將軍、シユラも交えてではあるものの……無事に帰ってこれたのだ。

「しかし陛下、本当についてきても良かったのですか?」

「良いのだエスデス。言伝は残してきたし……何より、余も少し帝都から離れて考えた
いことがあつたからな」

「……そうですか」

「しかし、帝都から出るのは初めてだ。こうして民たちの暮らしを見るのも皇帝の勤め
だとは思わないか?」

エスデスに笑顔でそう応える皇帝ではあつたが、無理矢理笑おうとしているのが手に
取るように分かる。エスデスの部屋に来たときから目の縁が赤くなつていたので。

恐らくは自分たちが眠っている間の時にでも泣いていたのだろう

……そこまでエスデスは気が付いていたのだが、指摘することもなく將軍として接

した。

これが自分の部下ならば何かしら声を掛けただろう。彼女は自分の部下には飴と鞭を持つて接することでメリハリの利いた強い軍を作ってきたのだ。

しかし相手は皇帝陛下。しかも公務の時に感じる威圧感や凄みを今の彼から感じ取ることができない

・・・そう、まるで繰り返してきた世界にいた時のような、カリスマ性があるが頼りない年相応の少年のような雰囲気だ。

「皇帝陛下も何か違和感があるが、繰り返してきたかどうかはまだ聞けないな。何よりも今はタツミが最優先事項だ。陛下が記憶が残っているかどうかなんて後でもかまわん」

エスデスはそう思い直して、すぐ先を歩く露子とシユラへと視線を移す。

そしてすぐあとに。あどけない少年の声が聞こえてきた

「ねーちゃん・・・？」

エスデスの視線に捉えた少年は茶色の髪色で綺麗な緑色の瞳を持っていた。

自分の愛したタツミをそのまま幼くしたような少年が露子のほうを見ていた。

「ねーちゃん！ねーちゃん！」

タツミは露子の姿を見つけると、頬を赤らめて涙目になりながら露子に飛びつ・・・い

や、突進した。思わず倒れ込んでしまふ露子だったが、タツミはそのことに構わずつと露子に抱きついてぼろぼろと泣きながら姉に甘えていた。

「・・・ただいま」

「おゝがえりゝなゝざいゝゝいいい」

「ああ、もう、そんなに泣かなくていいから」

露子の服がすっかりタツミの涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっているところをエスデスは乙女の微笑みを浮かべつつ悦に浸っていた。

「泣いてるタツミも可愛らしいな・・・」

エスデスは小さな少年時代のタツミを見るのは初めてであり、もしも自分とタツミとのあいだに子供ができたらこんなにか可愛いのかと柄にもなく妄想していた。

・・・まあ、そう、恋愛すると時々ある妄想といえよう。そういうことにしておこう。

そんな彼女の様子にやっと気が付いたタツミがエスデスのほうへと視線を向ける。露子がタツミの顔をハンカチでぬぐいながらではあるが、タツミのエメラルド色の瞳がエスデスを見つめた。

「うう・・・ん？おねえちゃん、だあれ？」

タツミの上目遣いに、彼女は思わず興奮してしまった。

今すぐにも屈服させてすべてを自分好みに染めて愛したいと

「ああっ！タツミはやはり可愛いな!!」

すぐさまエスデスはタツミに飛びついて頬ずりをする。柔らかな頬の感触に満足しながら、しっかりと抱きしめる。首輪や手錠を用意していたのだが、久しぶりに会うタツミ……しかも少年時代の可愛らしい姿に思わず道具を使うことも忘れて感動しているらしい。

「つわあつ！え？あ？くすぐつたいよー」

「本当にタツミは可愛いな、ふふつ、頬も柔らかくて食べたくなる」

そのエスデスの様子に苦笑いを浮かべる露子、いつもと違うエスデスの様子に引いているシユラと皇帝。

特に皇帝については見たことも無いデレツデレなエスデスの姿に違和感を抱いているようだ。

露子はあまりのエスデスのデレっぷりにようやく頭も冷静になってきたのか、オネスト大臣とのあれそれを忘れてエスデスを引き留めるほうへと思考を向けた。

「あの、エスデスさん、勢いあまってキスとかしちやあの、だめですよ?」

「何故だ」

露子の言葉にエスデスの顔が真顔になる

目が笑っていない

「いやあの……」

「私はようやくタツミと再会できた。もう二度と離れないぞ。絶対にタツミは私のものにする。邪魔をするなら貴様を倒してタツミを連れ帰る」

「ね、ねーちゃんをいじめるのか!？」

エスデスの腕の中にいるタツミがエスデスの言葉に反応する。

驚き、頬を膨らませて怒るタツミの姿にエスデスは更に興奮していた。

「そんな顔もするのだな！初めてみたぞ！ああ、本当に可愛いな！」

「か、かわいいとかやだ！おんなのこみたいじゃんか！」

「素直に嫌がるタツミも可愛いなあ……タツミがそういうなら露子には手を出さずぞ。

安心しろ。タツミ、好きだぞ！」

「っ!？」

あまりにもテンションが上がったのか、人前でタツミの頬に口付けるエスデス。このままでは弟（タツミ）のファーストキスまで奪いかねない勢いに露子も慌てて止めに入った。

「エスデスさん落ち着いてください！子供にそれはだめです！」

「ええい邪魔をするな露子！タツミにはしっかりと私と愛を育むということをだな……」

「ねーちゃんたすけて！」

小さな子供たちが楽しそう・・・いや、騒がしそうにしているのを遠目から眺めて呆れているシユラと、その様子を見て少しだけ微笑む皇帝であった。

外伝：ドMとペドの雑談編

露子が皇帝陛下とエスデス將軍、シユラを連れて里帰りをした日

宮殿では大騒ぎになっているかと思いきや、意外と静けさを保っていた。ブドー大將軍などはいつものよりも厳つい表情で練兵場にいるようだし、オネスト大臣は自室で寝込んでいられるけれども。

アカメ達子供組はいつも通り、ゴズキやシユテンの指示で鍛錬をしていたり、皇帝陛下やエスデス將軍がいない分の簡単な雑務を行っているようだ。このあたりはナジェンダ將軍やスサノオの協力があつてこそだろう。

そんな中でチャンプとスズカという珍しい組み合わせが中庭のベンチに座っていた。近くではコルネリアやポニイたちが組み手をしていたり、ナハシユが木陰で読書をしている。その光景を見たいがためにチャンプはここにいる。ちなみにスズカは露子もエスデスもいないため、正直暇を持って余しているらしい。

「いやー、あのロリコン大臣がおとなしくなつてくれて助かったぜ。それに天使たちが遊ぶ姿を見ていると癒されるしな」

「大臣が大人しいのは良いけれど私は不満だらけよ。せっかく修行が休みだから露子に

拷問してもらって快樂の世界にイキたかったのに……エスデス將軍もシユラ様もいらないじゃあ誰が私を責めてくれるのよ」

「誰も責めたくねえよドM」

「うっさいわねペドフェリア」

お互いにそんな会話をしながらも、どこか心ここにあらずといったような態度である。状況が状況なのだから、あまり穏やかな、または変態的な気持ちもあまり湧かないのだろう

「つつーか、エスデスちゃんはともかくシユラに責められてるのか？」

「……エスデス將軍をちゃん付けて……」

「引くなよ！ドSだろうが天使だろ!?!……じゃなくて！質問に答えろ！」

「そうねえ、露子はいつも責めてくれないしエスデス將軍だつて忙しいじゃない。だからシユラ様に時々責めてもらってるわよ。拷問技術はエスデス將軍に比べたらまだまだだけど、腹パンとかすごく気持ち良いし。まあ、代わりに身体を好き放題されてるけど、その時だつて首絞めのサービスもあるんだから」

「好き放題……」

「私としては拷問のほうが好みだけど、乱暴に抱いてくれるからそこそこは気に入ってるのよ」

スズカがあまりにもすばつと答えたのに対してチャンプは動揺を隠しきれないらしい。

「えつ、ちよつと待て。ガチか、ガチなのか」

「なんなのよー、その態度」

「・・・シユラは俺と同類だつて思つてたからな。露子のことも気に入つてみたいだろ？」

「あ、そつちね。ないない。ナジエンダ將軍も勘違いしてたつて聞いたけど、それはないわよ。というか、シユラ様にそれ言つたらきつと痛めつけられるわよ。・・・今度私も言つてみようかしら。きつと本気で殴つてくれるわよね」

チャンプの言葉にスズカは答える（ついでにいつものドMも発動しているが）

「どうやら何かしらスズカは察しているものがあるようで、チャンプのピエロ用の付け鼻に人差し指をあてる。」

「あれはね、出来の悪い妹を心配するお兄ちゃんみたいなものよ」

「そう言つてくすくすと小さく笑うスズカ」

「コミュニケーションつて点で言えばシユラ様のほうがまだマシなもの。それに比べて露子つて友達少ないし謙虚つていうより卑屈じゃない。だから見えてもどかしいのよ、あれは」

「・・・そりやまあ、露子はおどおどしてて本当にかわいらしくて俺好みだけど。それだけで妹扱いか？」

「まー、予想よ予想。でも、今まで一人っ子で育ってきたシユラ様としたら、面倒見がいのある人間だと思うわよ。手のかかる妹ができたって感じで。実際はシユラ様も結構子供っぽいけど」

「ふーん・・・ってか、お前案外よく人を見てるんだな」

チャンプの言葉にスズカは少しばかり沈黙する。

よく見ている、というよりもループ時空だったところからの経験から基づいた推察なのだから。とはいえ、このことを説明してもチャンプには到底理解できないだろうし、露子にも禁止されている。

破ったら破ったで拷問してくれそうではあるが、その露子自身が宮殿にいないのだから言ったところで彼女の得にはならない

ともかく、チャンプの言葉への切り替えしが思いつかず「ありがと」と適当にスズカは返答した。

さて・・・露子もエスデス將軍もいない上にキープしていたシユラも不在

生粋のマゾヒストであるスズカにとつては満足することができない現状をどうにか変えなければならないと考えている。

ぶっちゃけスズカ自身も露子の故郷に行けば良いのだろうが、帝都からかなり離れて
いるし自分だけでは時間が掛かってしまうだろう。

「そういえばあなたは心配じゃないの、露子のこと」

「そりゃ心配だが、俺が行って露子の心の傷が癒されるとは思わないぜ」

「あら、俺の愛で癒してあげる」とかくつそ気持ち悪いこと言っちゃったりしないの
？」

「殴るぞ」

そんな会話をしていた彼らだったが、ふと、会話が途切れる。

「……迎えに行きたいよなあ」

「……迎えに行きたいわよね」

実家に帰省しております

現在、露子は実家へと戻っていた。テーブルにはタツミと露子の父親であるミカドが座っており、母親であるタママは晩御飯の支度をしているらしい。

露子の隣にはエスデスと皇帝が座っている。

エスデスからすればもつとタツミと触れ合いたいと思っていたようだが、タツミと露子の両親への顔合わせも重要だと感じたらしい。

皇帝は見慣れない民家の様子に少し落ち着かないようで、部屋の様子を伺っているようだ。

「露子、よく戻ったね」

「い、いえ・・・大丈夫、です」

「怪我とかは無いみたいでよかったよ」

「ありがとうございます・・・ミカドさん」

「・・・露子」

「心配させて、すみません」

実父への態度に皇帝は露子のほうへと振り向くが、露子はうつむき加減でバツが悪そ

うにこじんまりと座っていた。皇帝からすれば、なぜ露子が実の父親に他人行儀になっているのがわからなかった。

もちろんそれはエスデスも違和感を感じたらしい。

ループしていた頃の親と違うからなのだろうかとも予想を立てるが、やはり核心に迫ったものではないとは感じていた。

「それにしても・・・エスデス將軍、ですか。初めまして」

「初めまして。タツミの父親だったな・・・早速話がある。将来的にはタツミと結婚をしようと思っているのだが、式はこちらであげるべきか、それとも帝都で盛大にやるべきか？」

「エスデス將軍やめてください、ミカドさんが引いています」

「そうか・・・では質問を変えよう」

「(タツミ君のことか、私のことかな?)」

「はやく孫の顔を見たいと思わないか？」

「やめてください、お願いしますからやめてください」

まるでコントのような流れではあったものの、このやりとりのおかげかその場の空気も少し和らいだかのように思える。それから少しずつではあるが、露子が帝都に行つてからのことをミカドに伝え始めた。

もちろん変態的な部分などは省かれてはいるものの、現在の状況やなぜ帰省してきたかを把握できるほどには説明ができたようだ。

「・・・そうかい、オネスト大臣が・・・」

「す、すまぬ！余の家臣である大臣がそんなことをしてしまうとは・・・」

ミカドの沈んだ表情に皇帝は思わず椅子から立ち上がり、謝罪の言葉を述べようとする。しかしエスデスが静かに皇帝を引き留めて椅子に座らせた。

「陛下が謝ることではないです。この一件は露子が決めあぐねていたのがそもその原因です」

「しかし・・・」

「嫌ならば嫌だと答えればいい。良いなら受け入れてしまえばいい。たったそれだけのことを決められない・・・そういった露子の弱さが原因です。決めることができたならそもそもこんな風に実家に戻りません。決断を先送りしたくて、逃げたくて戻ってきたんですから」

「そ、そうなのか・・・?」

エスデスの言葉に皇帝は判断がつかないようだ。いや、というよりはエスデスの言葉を聞いてなんだか居心地が悪くなってしまったのだ。それがなぜかは彼は自分自身で自覚することができないけれども。

そしてその場にいたミカドは黙ってうつむいたままの露子をただ見ていた。

「労わりの言葉も慰めの言葉もいくらでもかけることはできる。けれども彼はそうしなかった。」

そんなことをしたところで、露子を感わせてしまうだろうとわかっていたからだ。

露子自身は身の上のこともあるせいか血を分けた両親であるミカドとタマモに遠慮をして他人行儀にしているが、ミカド自身は露子のことも自身の大事な娘だと思つてい

る。・・・たとえそれが、繰り返してきた世界で、数え切れないほどの悪逆を積み重ねていても、だ

もちろん、何もかもを受け入れているわけではない。割り切れない感情だつていくらでもある。

それでも今は大事に育ててきた娘なのだから

「・・・ゆつくりするといい。部屋はちゃんと掃除してあるから」

「・・・ありがとうございます・・・ミカド、さん」

「気まづくなつたせいかな、露子は席を立つた。エスデスと皇帝と共に外にいるだろうシユラヤタツミの様子を見ることにしたのだ。」

「シユラは何をしているだろうな」

「さあ・・・ああ、でもシユラさん、タツミに絡んでそうだなあ」

「ふん。きつとタツミには嫌われているだろう」

露子達にそう言い切ったエスデスの視界に、信じられない光景が広がっていた。

「シユラ兄ちゃんすごい！おっきい雪だるま作れた！」

「おうよ。どうだ？」

「シユラ兄ちゃん、作るの上手いな！」

「・・・おう」

「じゃあな、じゃあ、次、もっと大きい雪だるま作ろう！」

「次は三段ぐらいの作るか？」

とても仲良く雪遊びをしているシユラとタツミの姿

しかもタツミがやたらと懐いている、ものすごい懐いてる、エスデスに見せなかった満面の笑みを見せている。とつても幸せそうな、笑顔である。

たつたそれだけのことだったが、エスデスにとつてはかつてタツミに言われた「付き合ってる子がいるんだ」という言葉と同じぐらいの衝撃であった。

まずエスデスはタツミ自身から笑顔を向けられることが少なかった。というか、ほとんどなかった。

それはそれでいいのだが、やはりエスデスだつて人間なのだから・・・好きな人に自分への好意を含んだ笑顔を向けられたいとも思っている。

それをまさかオネスト大臣の息子であるシユラに見せるだなんてありえなかつたし信じたくなかつた。

だからそう、殺気を放つてシユラに威嚇するのも仕方ないことだ

「つうわあああー！」

「エ、エスデス・・・」

その殺気たるや、子供であるタツミにもわかるほどの冷たさと怖気を感じるものだ。すぐさまタツミはシユラの後ろに隠れてしまう。

その殺気を向けられたシユラも正直すぐに殺されると覚悟するほどの、とても純度の高い殺意だ。

「シユラ、今すぐそこに座れ、直々に拷問してやる」

眼も笑つてないし顔もまるで般若、いや阿修羅像のようだ

女の嫉妬つて怖い

久々のエスデスの殺気に怯えて涙目になりながら露子はそう思った

外伝：皇帝陛下と悪魔の話

皇帝は現在、精神世界にある椅子に緊張した面持ちで座っていた。目の前にいるのはいつも一緒にいた存在（始皇帝）ではなく・・・初めてみる、銀髪片翼の男である。

彼は皇帝の緊張した様子を楽しんでいるのか、小さく微笑んでアールグレイを一口飲んだ。

「初めまして、株式会社レイクオブスワン社長のロッドバルトと申します」

「・・・余は、この帝国の皇帝、だ・・・」

「そんなに緊張しないでください。始皇帝から事情は聞いていますと伺いましたよ？私がすべての発端であることも、露子さんのことも全部ね。ループを繰り返したのも、そもそも露子さんがこちらの世界に来ることになったのも私の会社の仕事のせいだと」

「・・・」

ロッドバルトの言葉に皇帝は言葉につまった。

彼は物怖じすることもなく悪びれることもなくにこやかに皇帝に対して話しかけた。

「まだ理解に追いつかないが、その・・・お前は本当に、悪魔なんだな？」

「ええ、こう見えてかなり有名な悪魔ですよ。もつとも、あなたのいる世界では無名です

がね」

「その角や羽も本物・・・なのか？」

「ええ、もちろん。自前の角と黒翼です。まあ、今では翼は片翼しかありませんが・・・」
触つてみますか、とロッドバルトは皇帝に笑いかけた。

しかし皇帝はぎこちなく遠慮する・・・それもそうだろう。悪魔といえは人間を陥れる存在として語られている。

このロッドバルトも物腰は穏やかではあるが、異世界の人間に契約を持ち掛けて異世界トリップや数え切れぬループを引き起こした原因でもある。

カリスマ性があるとはいえ、幼い皇帝からすれば恐ろしい存在に見えても仕方がない。

エスデス將軍やブドー將軍の威圧感とは違う、明らかに人間とは違う恐ろしき、畏怖。そういったものを感じる。

「・・・余には、わからぬ。何故お前はそのようなことをして、余の住む帝国を・・・この世界を混乱させたのだ」

「私ではないですよ。あくまで私は仕事として、異世界の人間に営業しているだけです。」

「だからなぜ、そんなことを・・・」

「需要と供給、ですな」

戸惑う皇帝にあっけらかんとロッドバルトは答えた。

その言葉の意味が分からない皇帝はじつとロッドバルトを見つめた。

「自分が愛した世界の歴史を変えたい、自分の愛した誰かの命を守りたい、そう思っている人間の需要があるからこそ、お金になると思つて会社を設立しました。いわゆる、需要があるからこそ、供給を満たしたわけです。原理自体は人間社会と大差はありません」

「・・・必要とする人間がいたから、なのか？」

「ええ。始皇帝から聞いているんでしょう？あなたの住む世界は、別の世界では娯楽作品として愛されていると」

その言葉に皇帝は答ええない。答えられるはずもないが、ロッドバルトはその沈黙を肯定の意味だと受け取つて話を続けることにした。

「貴方のことを救いたいと思う人間がいました、エスデス將軍に恋する人間がいました、ナイトレイドの力になりたいと思う人間がいました、イエーガーズと穏やかな日常を送りたいと願う人間がいました、この世界の悪人を断罪したいと決意した人間がいました、かわいらしい女性たちに好かれたいと欲望を持った人間がいました、誰にも負けないう圧倒的な力を欲した人間がいました、憧れの人物と仲良くしたいと思う人間がいま

た、気に入らない相手を倒したいと思う人間がいました、自分の主張が正しいと論破したいから行きたいと望んだ人間がいました」

「……………」

「その誰もが根底にある気持ち……この醜くて美しい世界を好きになったからです。どうしようもなく愛したから、私の言葉に乗ってやってきたんです」

「……愛したから、か……わからないな。余には、全然」

ロッドバルトの言葉に苦笑いをしながら皇帝は小さく答えた。

しかしロッドバルトはすぐにその言葉に反応した

「わからないわけがありません。だって貴方も人間ではありませんか」

「……………」

「皇帝という宿命、というか職業ですかね。そういったものの前に貴方だって一人の人間です。誰かを好きになったり嫌いになったり泣いたり笑ったり怒る、ただの人間ではありませんか」

ロッドバルトのその言葉は、皇帝にとっては衝撃だった。

だって彼はそんな言葉を……誰からも言われたことが無かったのだから。

「貴方も露子さんも、ついでにオネスト大臣とシユラさんも似たようなものですね。自分のことをかっこつけるところが、実に似てる」

面白そうに笑いながら、ロッドバルトは更に続けた。

「いつそ開き直ってみればどうでしょうか？」

「開き直る・・・？」

「ええ、もういつそ自分の好きなように生きてみればいいじゃないですか。もうあなたは十分に役目を果たしてます。帝国も1000年続けば人間の歴史の中じやあ大したもんなんですからね」

「・・・それでは余はどうすればいいんだ。余は、立派な皇帝として生きなければならぬ。それしか、選べないのに」

「そんなことありませんよ。人間その気になればなんでもやれますし、なんでもできます。・・・ただの人間の王子が・・・悪魔だって倒せるんですから」

ロッドバルトの苦笑交じりの言葉に皇帝は言葉を返せず、黙ってしまふ。

立派な皇帝になるという選択肢・・・それ以外が自分にもあるということに戸惑っていた。

「まあ、今は悩めばいいですよ。人間は迷い惑って答えを選ぶのが仕事です」

「・・・」

「さて、私はそろそろ帰りますね。始皇帝とこれからどうするべきか、相談するように」
皇帝にそう言い残して、彼は部屋の扉を開けて出て行ったしまった。

「・・・これから、か」

ぽつりと、皇帝が呟いた

露子さんの本音の話

実家にある露子の部屋

現在ここには部屋の主である露子とエスデス、シユラと皇帝陛下がいた。

泊まる場所も村には無かったため、露子が率先して彼らを部屋に泊めることにしたのだ。

すっかり寝ているタツミと皇帝陛下をよそに、エスデスは寝間着姿で露子に迫っていた。

「いい加減、何かあるのか教えろ」

「な、何がって…」

「お前の能力のことや、なぜループすることを決意したか。お前は何か隠しているのだろうか？」

エスデスの強い語気に露子はたじろぐ。

シユラも気になるようで適当な言葉でエスデスを煽っていた。

「今日こそ話せ、露子」

殺気が混じり始めたエスデスの言葉に、露子は覚悟を決めようとしていた。

今まで散々誤魔化し続けていたが、どこかで…話さなければならぬだろう、と。秘密にしたいことに変わりはない。言うべき真実ではないだろう…露子は、悪戯にエスデスたちを混乱させたくはなかった。

そして彼女は、いつかのループしていた頃のことを思い出しながら、エスデスたちに問い掛けた。

「とあるループ回にて」

「貴方は、万人が幸せになるハッピーエンドというものが存在すると思いますか？」
夜の闇を思わせる漆黒のローブを脱ぎ捨てながら露子は彼に尋ねた。

彼：ロッドバルトと名乗る悪魔はワインを飲む手を止める。

露子がループを繰り返して、数百回は越えたあたりだっただろうか。
殺して殺されて助けて助けられなくて

そんなことを繰り返していた露子をロッドバルトは傍観者、いや観客として楽しんでいた。
いた。

露子が死ぬたびにループを続け、そのループを巻き戻す間や、誰もいない場所でこう

して露子と会話に興じるといふ……なんとも悪趣味なことをしていたのだ。

「やけに唐突な質問ですね。」

「……どう、思いますか？」

「私個人としてはあり得ると思いますよ。もちろん、そこに至るまでに犠牲もある場合や、困難すら存在しない世界線もあるとは思いますが」

ワインをグラスに注ぎ直しながらロッドバルトは返答した。

答え方としては、中々に逃げ道を作ったものだろう。

悪魔の意見自体、信憑性は低いが露子はそのままの言葉として受け取ったようだ。

「そうですね……」

「そういう露子さんはどうなんですか？」

「……私は、無いと思います」

とても静かに、彼女はロッドバルトに答えた。

「へえ、自己犠牲真つ最中の貴方がそんなことを言うなんて、少し驚きましたよ」

「……そんな、綺麗なものじゃないですよ」

面白がるロッドバルトに露子は言葉を続けた。

「私のしていることは、ただの自己満足です。私が勝手に「幸せになつて欲しい」だな

んて思っただけで、相手にとつての幸せではないんですよ」

「……自分の価値観を押し付けている、と?」

「……はい」

「馬鹿ですね」

沈んだ露子に対して、ロッドバルトはその考えを一蹴した。

「人間は誰しも価値観を押し付けたり、他人の価値観に簡単に染まるもんです。そんなことを気にしていたら貴方が幸せになって欲しい方々を幸せにはできませんね。」

「そんなことって……」

「そもそも人を助けるといふのは自分勝手極まりないことなんです。貴方はもつとそれを自覚すべきですよ」

「……………」

【回顧録終了】

「万人が幸せになる、ハッピーエンドは存在すると思いますか?」

露子はエスデスとシユラに問い掛けた。

二人は突然の質問に閉口した。どうやら露子の意図を読みかねているようだ。

「私は無いと思つてます。誰かが不幸せにならないと、他の誰かは幸せにならないと。だから私は、敵になりました。帝国の敵に、革命軍の敵に……」

ここから先の言葉を少し露子は躊躇う。あのロッドバルトにすら言っていないかった考えを出すのが……酷く羞恥心を覚えたのだ。

情けなくてカツコ悪いことだけれども

「本当はただ……ただ、悔しかつただけ、なんです」

「……悔しかつただけ、だと？」

エスデスの言葉に露子は頷いた。

「……………私、あのとき、何も出来なくて、悔しかつたから」

そう、本当のことを言えば露子はただ、悔しかつただのだ。

他の参加者のように何か力があれば何かできたかもしれない

本気で誰かに語り掛ければ何か変えることができたかもしれない

何も変えられなかつた自分に、変えようとすることを諦めていた自分に、最初から他の参加者のように戦う力や知恵を得ることを怠つてしまつていた自分に……大人ぶつてしまつた自分に憤つた。

・・・ああ、それなら

最初から「主人公（それ）」を目指せばよかった

主人公にはなれないだなんて、かつこつけずに、青臭くてもいいから何かのために最初から「何か」を成せばよかったじゃないか。

後悔ばかりが先だって、ただただ悔しかったのだ。

あのタツミに憑依した人間に、何も言い返すことができなかった。
だから彼女は選んだのだ。

今度こそ自分の力で何かを選びたいと

誰かに翻弄されて諦めてしまわぬように彼女は決意した

「・・・エスデスさん、シユラさん、聞いてくれますか」

露子は二人の視線に合わせて、声を震わせながら彼女たちにこう言った。

「今から話します。嘘みたいな話だけれど、本当の話です。だけど信じてください・・・
お願いします」

それぞれ之夜

【露子の実家にて】

露子が事情を一通り説明し終わり、エスデスやシユラの質問に答え終わった。

シユラは事情を把握しきれておらず、未だに露子の話の真偽や意味合いを掴み切れていなかった。それもそうだろう。いきなり〈悪魔〉やら〈異世界〉と単語が出てきたところでそれを信じる人間は中々いないものだ。

しかしエスデスは疑問点だけ解決できると「そうか」とだけ答えた。

「・・・お前の力のことも、いつのまにか消えた者たちのことも分かった」

一息ついて「じゃあ寝るか」とだけ言ってすぐに布団に横になった。

あまりにもあつさりとした態度に露子とシユラは顔を見合わせるが、お互いにそれ以上会話するのも気まずい。

エスデスの言葉にそのまま従ったほうが良いだろうと彼らは判断した。

「そ、それじゃあ・・・おやすみなさい」

「・・・おう」

そこから20分程度経過した頃、エスデスが布団から起き上がった。隣にはタツミが露子にぴったりと寄り添って眠っている。

それを見て彼女はいつもの冷酷な戦闘狂の顔とは違う、恋する乙女の顔つきになった。

「……ふふつ、これからはずっと一緒だぞ、タツミ。露子が少々邪魔だが、何としても帝都に連れ帰って私が独占してやろう」

「……起きてたのかよ」

自分の独り言に反応する言葉にエスデスはすぐさま露子の向こう側にいたシユラのほうへと視線を向けた。

「聞いていたのか貴様……いや、起きていたのか」

「あんなの聞いて寝れるわけねえだろ」

「そうか？ 私はひと眠りしていたぞ」

「……本当にあんた、豪胆っつーかなんっつーか……」

エスデスの器の大きさ、凶太き……そういうものに感心しつつシユラも起き上がる。

「エスデスの姉ちゃんよ、露子の話聞いて……よくもまあ、そんな態度できるな。違う世界だとか、悪魔だとか、いつぱんに信じられるわけねえだろ？」

「そうか？」

「そうかって・・・」

「お前の持つている帝具シャンバラとて、空間を操る帝具だろうか？そういう存在や違う世界とて無いとは言いい切れない。実際に露子の説明と質問への返答は今までの疑問を払拭した。だから私は信じる」

エスデスの強気の言葉にシユラはめんどくさそうに頭を搔いてため息を吐いた。

彼はエスデスほどの柔軟な発想力と受け入れる技量は持ち得ていない。確かに帝具・次元方陣シャンバラの能力は帝具の中でも素晴らしい技術力が込められている。

だが、違う世界やら悪魔という架空の存在となると話は別だ。

あくまでも帝具は1000年前に存在した一流の技術と素材で作られた人工物。

異世界や悪魔の存在はこの世界では物語にしか登場しないようなものなのだ。

「・・・仮に本当だとしても、露子のやったことは明らかに普通じゃねえだろ」

「そうだな、尋常じゃないぐらいの負けず嫌いだ」

「自己犠牲とやらじゃねえのか、そこは」

「言っただろう？弱かった自分が悔しかったと、何もできないことが悔しかったと。方向性はどうかであれ、結局露子は、他の“モニター”とやらに勝ちたかつたんだらう」

「そういう認識でいいのかよ」

「本人もそういう認識なんだろう」

「・・・でもまあ、俺たちに対して一線引いた態度の理由は分かったよな。俺が思ってた以上に馬鹿だな、露子は」

「馬鹿者というよりは、強欲なのだろう。あれこれ欲しがって、捨てるのを嫌がるあたりはな」

苦々しい顔つきのシユラに対して、エスデスはあつけらかんと答える。

人物像なんてものは他人の主観でしかない・・・と言えればいいだろうか。

「ふふつ、私は少し露子を見直したぞ。ただの卑屈な女かと思つたが、存外気の強い頑固者のようだ。100万回などと気の狂うような回数をやり直したあたりは根性もある」

「俺にはただの自己犠牲したがるお人好しの馬鹿にしか思えねえな」

「ただのお人好しや自己犠牲などというくだらないもののためにそこまでは繰り返さないとと思うがな。むしろ強欲で傲慢だからできたんだ」

「・・・あんたとは考え方が合わねえのがよく分かったわ」

「それはそうだろう。私もお前と合うとは思ってないからな」

エスデスはシユラに皮肉を返しつつ、いつも通りのサディスティックな笑みを浮かべた。

「とはいえ、これで超級危険種を狩る以外にも楽しみが増えた」

「はあ？あの話のどこで楽しみが増えたんだよ」

「この世界以外にも、他にも世界があるならば行ってみよう。どんな強者がいるか楽しみでたまらないな。その前にまず、その悪魔とやらを捕まえなければいけないが」

「おいおい、あんた何を言ってるんだ？ただの女を魔王にしちまうぐらいの反則ができるんだぜ？いくら帝国最強つつつても捕まえられないだろう？」

エスデスの言葉に慌てるシユラであったが、当の本人は実に楽しそうに・・・新しいおもちゃを見つけた捕食者の笑みでこう答えた。

「絶対に捕まえてみせるぞ」

「・・・あんたに狙われた悪魔に同情するぜ」

シユラはエスデスの言葉に呆れることしかできなかった・・・が、同時に「こいつならやりかねない」とも思ってしまう。

それほどまでに自信満々にやり遂げるのが帝国最強の座に居座る將軍なのだから、仕方ないと言えば仕方ないだろう。

「・・・ま、捕まえたら俺も言いたいことは山ほどあるけどな。俺たちで遊びやがって」「お前も帝都の民で遊んでいただろう。お前が言うな」

「それを言うなよ。というか、俺よかその悪魔のほうが厄介だろ」

「・・・シユラ、世の中には五十歩百歩という故事がある。知っているか？」

「おいそれどういう意味だ。あんただって拷問してるだろうが」

「拷問は趣味だ」

「そんな趣味捨てちまえ」

お互いに皮肉を言い合いつつ、ふと会話が途切れる。

「そういやあ、あんたところとして話すのは初めてだな」

「そうだな。100万回も繰り返し返してきたというのに、不思議なものだ」

「・・・さてと、さっさと寝るか」

「ああ、そうだな」

【帝都：宮殿にて】

その頃、帝都の大臣の自室のベッドに大臣が寝込んでいた。

露子の態度に不満があつたが、まさか皇帝陛下やシユラ、エスデスまで連れて実家に戻るとは思つても無かつた。

しかも婚約指輪までご丁寧置いていったのだ。

・・・正直なところ、オネスト大臣は露子が一時は態度が固くなるだろうが最後は自分を選ばざる得ないと高を括つていた。

例えば露子は実家のある村や、帝国が引き取つた子供たちのことをちらつかせば折れ

てくれると思っていた。

また、露子は押しに弱いから押ししていけばその勢いで了承が得られるだろうとも……だが、あまりにも甘すぎた

露子がそこまでにも自分を拒絶するだなんて、オネスト大臣は思わなかったのだ。

「……はあ。お人好しの善人だから脅せばちよつといけると思ったんですがね」

「随分と露子さんに甘えてますね」

自分の独り言に返事をする誰かにオネスト大臣は飛び起きた。明らかに羅刹四鬼とは違う、自分の知らない声なのだ。

「だつ、誰です?!」

「気にしないでください、通りすがりの者です」

部屋を見渡すオネスト大臣。彼はすぐに声の持ち主が窓際にいることに気が付いた。

銀色の髪をたなびかせた、真っ黒な片翼を持つ男がそこにいた。頭にはヤギか羊のような大きな角が生えており、顔にはペイントもされている。

「なつ、なな、なんですか貴方は!?だ、だれか……」

「ああ、周辺の兵士や上で控えていた方々にはちよつとだけ眠ってもらっています」

「なんですって!?!」

わけのわからぬ侵入者に命の危険を覚えるオネスト大臣であったが、侵入者のほうはそんなことも気にせず、部屋のテーブルにワインとグラスを置いて堂々とテーブルに座った。

「行儀が悪いですが、多少はいいですよ。このほうが会話しやすいですし」

「か、会話って・・・貴方はいったい何者ですか!?!私の命でも狙って」

「狙いませんよ、たかだか人間一人殺すなんて、無駄です。それにもう私も随分長生きした悪魔ですからねー、血気盛んな若者とは違うんですよ?」

その言葉にオネスト大臣は口を紡ぐ。

自称悪魔の男には殺意は見当たらないようだし、普通に目の前でワインを飲み始めている。姿形は異質ではあるが、帝具の力の可能性を考えられる。オネストは自身が持つ帝具〈絶対制限イレイストーン〉によって帝具を破壊できる。

「・・・ほお、悪魔ですか」

「信じてない言い方ですね。構いませんよ?ですが、私が表舞台に出てきたのですから警戒心ぐらいいは解いてほしいものです。露子さんの知り合いなんですよ、私」

「露子さんの!?!」

「ええ、こう見えても彼女とはとても深い付き合いがありました」

目の前の男に対して、珍しくオネスト大臣は狼狽えた。

よくよく見てみるとかなりの美青年で、露子とも深い付き合いがあると言っている。それが本当ならば・・・嫌な想像ばかりが彼の中で展開されていた。

「この展開はとても面白いのですが、悪役（あなた）が落ち込んで動かないのはつまらないですよ」

「・・・露子さんの知り合いとは、いったいどういう」

「そこ気になりました？実は恋人です」

「恋人!？」

「嘘です」

慌てふためくオネスト大臣にさらりと真実を告げつつ、彼はワイングラスを傾ける。

オネスト大臣はこの青年に対してイラつきを覚えたものの、相手がどう出てくるかわからない以上、下手な反論は控えることにしたようだ。

「ちよつと焚き付けたかったですよ。貴方、ここで寝込んでる暇あるんですか？」

「・・・なんですかいつたい。いいじゃないですか」

「いえ、貴方は欲しいものを欲しいままに奪いとり、好き勝手自由に生きるのがアイデンティティでしょう？露子さんにちよつと冷たい反応されただけで気絶するなんて貴方らしくもない」

「いきなり失礼な人ですね。見知ったようにそんな……」

「知っているから言ってるんです。それはともかく、さつきと腹を決めて行動したらどうですか。まだるっこしい」

「……」

男の言い分にオネスト大臣は黙り込む。

確かに正論かもしれないが、いきなり知らぬ相手にそんなことを言われて納得するはずもない。

「露子さんは絡め手よりストレートに押ししたほうがよっぽど落ちますよ。貴方ならばちよつとギヤップ萌えを目指せばすぐに落とせます」

「ぎやつぶもえ……?……なぜ私にそんなことを?」

「悪魔ですからね、多少引つ掻き回すのが好きなんですよ。さて、言いたいことは言えましたから私は帰ります」

いつのまにかワインを一本開けた青年がさつきと窓へと歩き始める。

「ま、待ちなさい!いきなり現れて言い逃げですか!」

「ええそうですよ、私は本来表舞台に出るべきじゃないですからね」

「だからなにを……」

「私のことは露子さんに聞いてください。ロッドバルト、と言えばすぐに顔色変えて慌

てますから」

そう言つて彼は窓から飛び降りた。

思わずオネスト大臣は駆け寄つて真下を覗き込むが、下には何も無かつた……いや、窓の付近や真下に落ちゆく黒い羽根だけが残された。

「……」

オネスト大臣は踵を変えてクロローゼットに向かい、すぐさま着換え始めた。

しばらく準備をしていると、やっと羅刹四鬼であるゴズキが降りてきた。

「大臣、何してんですか？ さつき寝てたはずなのに、いつのまに……」

「露子さんの実家に行きますよ。護衛を頼みます」

「はあっ!？」

「危険種に乗りますのでナジエンダ將軍を叩き起こしてください。彼女なら扱えるでしょう?」

「いやほんと、いきなりですね。深夜に何を……明日でもいいじゃないですか」

「焚き付けられて腹が立つたんです。受けてやろうじゃないですか。ついでに露子さんにあの男のことを聞き出します」

「……焚き付けられた?」

「分からなくていいです」

状況把握できてないゴズキに適当に返しながら、オネスト大臣はすぐに露子のいる村に行く準備を始めたのであった・・・

美食家で人間好きの悪魔と、ただの人間の話

ぐっすりと眠っていた露子が目を開ける。もう朝なのだろうか・・・いや、違う。起きてみるとキングサイズのベッドの上で眠っていたらしい。だが、眠る前とは明らかに場所も空気も違う。

「露子さん、お久しぶりですね」

聞き覚えのある声に露子はあたりを見渡すと、すぐにその声の主を見つけることができた。ベッドから少し離れた椅子に腰掛けたロッドバルトがアールグレイを飲んでいたら。テーブルの上にはスコーンにサンドイッチ、バタークリームなどが置かれている。

「・・・ロッドバルト・・・さん」

「貴方が転生してから10年そこらですか。私はいつも観察していましたが、露子さんは私に会うのは久しぶりでしょう？ねえねえ、どうですか、転生した気分は？」

「・・・」

「おや？どうしたんですか？あまりに感動して声にも出ないんですね」

朗らかに笑うロッドバルトに対して、露子は何かを察したようで苦虫をつぶしたような表情を浮かべた。

「・・・私が転生したのは、貴方の仕業でしたか」

「仕業だなんてとんでもない！今度こそあなたが楽しめるように私はセッティングしただけですよ？面白がっているような言い方はやめてください」

「じゃあ面白がってはなないんですか？」

「面白いですけど？」

「・・・」

相変わらず読めない悪魔だ・・・と、露子は溜息を吐いた。

久しぶりの再会とはいえ、あまり良い気分とは言い難い。

「転生したのはいいです。貴方は人間が右往左往するのを面白がるような悪魔ですから。ですがなんで魔王の力を残したんですか？もう必要のないものなんじゃないんですか？」

「二次創作でありがちなチート特典っていいわけで納得しますか？」

「しません」

「でももしも戦いになった時にあなたが死なないための心遣いとか」

「しません」

「新たな敵が露子さんに迫っているから魔王の力を残したままにしましたとか」

「しません」

「魔王の力を回収し忘れましたとか」

「しません」

露子の言葉にロッドバルトは「つまらないですねー」と笑いながら、ティーカップのアルコールを飲み干した。

露子はベッドの上でロッドバルトをじっと見つめた。

「どうやら道化を演じてみたところで露子は納得しないし、なあなあにもしたくないよ
うだ。」

「露子さんも冗談が通じない人ですね！もう、少しぐらい騙されてくれたっていいじゃないですか」

「……」私で「何がしたいんですか。いえ、貴方の場合だと、何が観たいんですか？」

露子の言葉に、ロッドバルトは一瞬真顔に戻る。

だがすぐに口角をあげて露子に話しかけた。

「ねえ、露子さん。今のあなたの状況って結構詰みじゃないですか？」

「……」

「オネスト大臣は皇帝陛下の両親暗殺もしましたし、軽度とはいえ汚職役人や賄賂も横行してます。露子さんがオネスト大臣の花嫁になればすべて丸く収まりますが、そうで

ないならば彼はなんだってしますよ?」

「……」

「ループ能力とか、使ったりしないんですかねえ?」

とても面白そうに、愉快そうに、ロッドバルトは露子へと惑わせるような言葉を吐いた。

確かに今の彼女はかなり弱体化したとはいえ、魔王としての基礎的な能力は付属されたままだ。もちろん、ループ能力も使用できることは彼女も自覚していた。

「……私にループ能力を使わせたいんです?」

「いえいえ別にいい?ですがほら、エネルギードレインや危険種を従えるような能力は使っているのにループは未だに使ってないでしょう?」

「基本的に魔王の能力は使わないようにはしてますし、ループの能力なんて……使えるはず、ないですよ」

「誰かが死んだとしても、使わないと言い切れますか?」

ロッドバルトの言葉に露子は言葉を詰まらせた。

「アニメルートの言葉にクロメさんが死にますし、原作だとランさんが死にますよね?そう、I Fの世界線なんですから誰かが死ぬことなんて当たり前じゃないですか。もしも助けることができずに死んだときに……それでも、貴方はやり直さないと?」

「・・・やり直さない、です」

「そうですか」

露子の弱弱しい言葉にロッドバルトはどうやら満足したらしい。

満足して・・・悪魔らしい笑みを浮かべた。

「貴方が魔王でなく人間になった今、その能力に溺れてくだされば私は満足できるんです」

「っ・・・」

「人間らしく欲望に身を任せて、自分の強大な力に酔いしれて、墮落する様を見せてくださればもつと美味しい魂になると思うんです」

真つ赤な舌で唇を舐めつつ、ロッドバルトは露子を見つめる。

・・・とても美味しそうな、料理を見るような目で。

「今までのモニターの皆さまも、とても美味しかったですよ」

「・・・やっぱり、食べたんですね」

「もちろん。彼らも自分無双に酔いしれて、私と個人契約を交わしていったんですよ・・・だから食べたまでです。とても、そう、とても美味しかったです。世の中にはそういう、自分が主人公になりたいと願う人間が多くて助かります。だってそれだけ、料理し

甲斐がありますから」

「・・・そう、ですか・・・」

「きつと露子さんも食べたら美味しいでしょうね」

恐怖心を覚え始めた露子へロッドバルトは笑いかける。

「安心してください。食べたくて仕方ないですが、それ以上にあなたのごことはそれなりにお気に入りですから・・・できれば、もつともつと、面白いものを見せてくださいね」

「・・・人間は一度きりの人生ですから、今度の人生はループなんてしませんよ。」

「ふふつ、本当にそうなればいいですね」

ロッドバルトのその言葉を聞くと、少しずつ景色が暗くなり始める。

「ああ、もう起きる時間ですか・・・それではまたいつか会いましょう」

皇帝陛下の決意

「ふふふふ．．．寝起きのタツミもかわいらしいな」

早朝からエスデスの機嫌はほぼ100%で良かった。寝直した時からタツミをホルドオンした上に朝からタツミの寝顔を間近で見ることができた。そのうえ、寝ぼけたタツミの一举一動があまりに可愛らしくて胸の高鳴りが収まらない始末である。

朝食も隣でタツミに食べさせることを達成したエスデスはまさに幸福を味わっていた。

なお、タツミが朝から眠そうにしていたため、エスデスを警戒しなかったからできたことであるとここに記しておこう。

「エスデス将軍がこんなにも年相応になるとは思わなかった．．．」

皇帝は身なりを整えながら、今のエスデスの態度に驚くと同時に引いているようだ。

最も、皇帝自身がループし続けていたのにも関わらず．．．エスデスの恋愛モードを見たことが無かったというの也要因の一つだろう。

「エスデスのやつ、本当にいつもあれならいいんだけどな」

「シユラさんの意見が少し分かる気がします……けど、一応私の弟がその対象ですし、なるべく控えてもらいたいですね」

「ああ？ いいだろ別に」

「12、13歳の少女が7歳の少年に手を出しているのは健全だと思いませんか？」

「あつ、そりや無理だわ」

シユラと露子はそんな会話をしながら身支度を整えたらしい。

朝食も食べ終わった彼らは一度外に出て、朝日を浴びる。少しばかり寒い気もするが、山奥の田舎の村だから仕方ないだろう。

「ねーちゃん！ いっしょにあそぼう！」

「いいよ」

「シユラおにいちちゃんもいっしょにあそぼう！」

「おう」

「ええつと……こーていへーか、だっけか？ いっしょにあそぶか？」

「そうだな。余も一緒に楽しむか」

「……エ、エスデスねーちゃんもあそぶ？」

「タツミ、なんでそこで露子の後ろに隠れながら聞くんだ。他の奴らには普通に聞いていただろう、なぜそんな怯えた小動物のようになってる」

もちろんあなたが怖いからです。

・・・なんてことを露子もシユラも、皇帝ですら思ったがぐつと堪えた。

「しかしせつかくのタツミの誘いだが・・・私はこれからお前の両親と村人に交渉せねばならないからな。一緒に遊ばなくてすまない」

「よかつたー」

「おいタツミ、なんで良かったんだ！私がいらないぞー！」

「エスデスねーちゃん、こわいもん」

無垢な少年の一言にエスデスは数秒間停止した。まるで心臓の鼓動すら止まったかのような雰囲気である。

「ふ、ふふふ・・・かまわない。今は仮にそうでも私がタツミを自分色に染めるんだからな。どんなに拒絶されてもかまわないぞ、そんなもの繰り返し過ぎて慣れたからな」

ドSのメンタルはどうやら強いらしい

この場合は恋する乙女のメンタルだろうか？ただ少しダメージは負つたらしい。これがギャグマンガなら確実に吐血していたであろう心のダメージだ。

「いや待て、慣れてるってどういうことだよ」

「大体タツミさんと敵対したりしましたからね・・・マインさんやチエルシーさんと付き合ってたこともありますし・・・」

「他に女がいれば諦めないか？」

「諦めないのがエスデス將軍です。略奪愛も良いみたいですし」

「まじかよ最低だな」

「シユラさんも大概だと思うんですが・・・」

「はあ？俺はエスデスよりマシだろ？」

「・・・失礼を承知でいいですが、それって本気で言ってるんですか？」

「当たり前だろ」

「即答なんですわ・・・」

シユラと露子の会話を傍目に、タツミは皇帝へと近寄った。

皇帝の服の袖を掴んで、何かを言いたそうにしている。皇帝はすぐにしやがみこんで、タツミと同じ視線で「どうした？」と話しかける。

「なあなあ、こーていへーかってなまえなのか？」

「いや、違うぞ。皇帝というのは名前じゃないが・・・」

「じゃあ、なまえは？」

「・・・すまないな。皇帝であると、自分の名前を名乗ることが出来ないのだ」

この帝国の皇帝は、皇帝の座に就いた時から人としての名前を名乗ることを控えるようになる。と、いうのも皇帝は帝国の民の上に立つ者であり、民と同じような名前を公

で晒すことを長年忌避していたからだ。

「……一種の信仰、とさえばいいのだろうか」

「……?」

「自分の名前をあまり言つてはいけないんだ」

「なんでだ?」

「……そういう決まりなんだ。すまない」

「へんなの。ともだちのなまえがわかんないと、よぶときこまるのに」

「……友達?」

「うん! ねーちゃんのともだちだから、おれともともだちだろう?」

屈託のないタツミの笑顔とその言葉に皇帝は呆気にとられた。

友達、という概念は書物を読んで知っていた。

けれども自分は……そう、次期皇帝として生まれ育てられ、皇帝として生きて死んだ。だからそういう、対等な存在は彼にはいなかった。

……そもそも、自分に手に入ると思つてなかった。

「……友達、なのか」

「ともだちだぜ。あ、じゃあな、じゃあな、おれのともだちもよんで、いつしよにあそぼうぜ!」

「・・・ああ、そうだな」

きつと皇帝という存在を理解していないから、そういったことも言えたのだろう。成長して理解してしまえば、対等でなくなるかもしれない。

・・・けれども、仮にそうなったとしても、今この瞬間、そういつてもらえたのが何より嬉しかった。

「露子、シユラ、少し話がある。あとでエスデスにも伝えることだ」

タツミが友達を呼びに、エスデスがタツミの両親と村人相手にタツミを引き渡すように交渉しに行っている間に皇帝は露子とシユラに自分のことを話した。

ループをしていた記憶があること

自分の中に始皇帝がいること

そして・・・

「余はこの帝国を民たちに渡したいと思っている」

帝位を廃して、新しい国へとすることだ

「・・・陛下さんよ、それは本気で言ってるのか？」

「ああ、何度も繰り返し返して、似たような間違いをしてきた余に国を治める資格はないだろ

う」

「ですが、その……いいんですか？今の世界なら、きっと良い皇帝になれます」

「もしかしたらそうかもしれない。けれど……この国の民たちが幸せに暮らせるならば、より良い政治の仕方もあるだろう」

ロッドバルトに言われ、自分とよく似た人物が始皇帝であると知らされ、彼はずっと考えていた。

自分自身がどう生きるのか、このままでいいのか、と……

「そりゃあ無責任つてもんじゃねえのか？」

「……シユラは手厳しいな。確かに、無責任極まりないと思っている」

「……」

「だが、こうして未熟な余が国を治めることも無責任であつたと思つている。今も始皇帝の存在が無ければ、またオネストや周りの者たちに依存してしまつていただろう」

どんなに繰り返してきたとしても、「今度こそは」と皇帝は信じてしまう。

それは善行でもあるし、悪癖と捉えられても仕方ないかもしれない。

人としてはそれは善人だろうが、人の上に立つ者としては……賛否が分かれてしまふことだ。

「じゃあ、その……本当に帝位を……」

「露子、そんな心配そうな顔をするな。少しずつ新しい国のための基盤を作ってから、余は帝位を廃するだけだ。まだまだ時間が掛かるし、きつと大臣たちにも反対されるだろう。それでも余は民たちが求める幸せに、今の国のままではいけないと思っている」

皇帝はそう答えながら、少し恥ずかしそうに露子とシユラへと話しかける。

「余が皇帝を退いたら、一緒に世界を旅してみないか？」

「は？」

「えっ……？」

「ずっと宮殿にいて、知らないことが多かった。だが、こうして露子についてきて、民たちの暮らしを間近に見たり、触れるのが楽しかった。もつと余は、この世界を見てみたんだ」

「……」

「陛下……」

「約束、してくれるか？」

皇帝が露子に手を差し伸べようとしたその瞬間、頭上から何かか聞こえてきた。

「……ん？この声は」

「すごい既視感が」

「・・・？」

「露子さん!!! 見つけましたよ!!!」

そう、危険種に乗ったオネスト大臣と、疲れ切った顔をしたナジエンダとゴズキが現れた。

結婚には責任を持ちましょう

オネストと疲れ切って死んだ魚のような目をしたナジエンダとゴズキが危険種から降りる。オネストはすぐに露子のもとに駆け寄ったが、ナジエンダとゴズキは心なしか足元がふらついている。

夜中にたたき起こされ、危険種に乗って帝都から離れた田舎までやってきたのだ。疲れないわけがない。

「露子さん……」

「……オネスト大臣、来たんですね」

「親父！……って、おい、なんだよゴズキ！離せて！」

オネスト大臣へと話しかけたシユラをゴズキが引き留める。心配そうに露子達を見ている皇帝陛下にナジエンダが跪いた。

「陛下、お迎えにありがとうございました」

「そうか……だが、オネストと露子は大事な話があるのだろうか？少し余たちも離れておこう」

「承りました。それではシユラとゴズキも少し席を外すぞ」

「ああん？なんでだよ」

「シユラ様、大臣もお嬢ちゃんと募る話もあるんでしょ・・・別れ話とか」

ゴズキが「なーんてな！」と付け足しながらシユラの腕を掴んで、ナジエンダと皇帝陛下と共に少しばかりその場から離れた。

「露子さん」

「はい」

「私は悪くありませんから」

二人つきりになった途端にオネストは露子に言い切った。

「普段から流されがちな態度をしていたあなたが悪いんです。押せばいけるような雰囲気を出していましたし、異性と安易に二人きりになる油断もありました。私は据え膳あれば食らうタイプです。私に隙を見せたあなたに責任があります。」

「・・・」

「正直私は自分のしていることが悪いだなんて思ってません。前皇帝も妃を殺したことも、今も賄賂やある程度都合のよい法律を通そうともしてますよ。あなたが否定するよくな非合法的な愉しみも嗜んでます」

オネストの言葉を露子は黙って聞いていた。何も反論することなく、静かにしている。

「結婚して私のものになれば、それらすべてを辞めると約束します。今後のことについては貴方の意見に合わせるつもりです。あまりにも横暴でなければ全てあなたの意見を聞いてあげましょう」

「・・・」

「家出だなんて勝手なことをしてしまったことも今回は多めにみます。いくらでもあなたの我儘だつて聞いてあげましょう。この私がここまで譲歩したんです。その意味ぐらい、分かるでしょう?」

そう一度言い切つて、オネストは露子の前に跪いて婚約指輪を取り出した。

露子へと指輪を差し出し、一呼吸おいて彼は露子をまっすぐ見た。

「私のものになってください」

「・・・」

露子は黙ってオネストを見つめた。少しの間沈黙が続き、返事を待っているオネストに露子が話しかける。

「貴方は、結婚をどう思うものだと思いますか?」

「はあ?・・・なんですかいきなり」

「私、故郷に帰ってきてからずっと考えてたんです。私はオネスト大臣のことは嫌いではありません。それならばお付き合いするぐらいならば良いかもしれないとも考えました。結婚のことだって、もしかしたら良い事なのかもしれない、と」

「……それで？考えただけですか？」

「……昔、私のおじさんが教えてくれたことを思い出したんです」

少し気恥ずかしそうに笑いながら露子は続ける。

『結婚はお互いの人生を背負うことだ』『相手の良いところも、悪いところも、自分のものとして背負う覚悟が必要になる』『だから結婚するときには愛情や幸福だけじゃなくて、相手の不幸も一緒に背負えると思える人としなさい』……って。そんなことを言っていたんです」

「……随分とお綺麗な考えのご親戚ですね」

「ええ、そうかもしれない。そんなに重く考えなくたっていいかもしれないですね。けど……」

「……」

「私は今、自分がしてきたことの積み重ねで精いっぱいです。貴方の人生を背負える努力も余裕ありません。だから、ごめんなさい」

そう答えて露子はオネストに頭を下げた。

「・・・もう少し、時間をください。私が、私のしてきたことを背負えるようになった時までは、結婚できるかできないか・・・分かると思うんです」

「・・・やれやれ。いつまで待たせるつもりなんですか」

「すみません。今はまだ、自分の中でまだ整理が出来てないんです。」

苦笑いしながらも露子は婚約指輪を差し出していたオネストの手を両手で包みこんだ。

「だからまだ、仲の良い友人でも良いですか、”オネストさん”？」

「・・・友人ですか」

「はははっ、やっぱ、不服そうですね」

「当たり前ですよ、ここまで私を譲歩させて待たせるとは・・・あなたは極悪人ですね」
「これでも前世は魔王でしたから」

不満そうにため息を吐くオネストに対して、露子はいつもよりも表情を明るくしていた。

何か吹っ切れたかのような雰囲気さえある。

「・・・そういえば露子さん」

「なんですか、オネストさん」

「ロッドバルトという男、なんなんですか」

その名前を聞いた露子の顔が一気に真っ青になる。

さつきまでの良い雰囲気港台無しである。

「あー・・・あの、それは」

「私の目の前に現れて、煽るだけ煽って帰ったんですが」

「あー・・・ははははっ・・・」

「ちゃんと説明してもらいましょうか？ねえ？」

このあと滅茶苦茶説明した

後日編

家出騒動の後日談

【エスデス父の苦惱】

おつス！おら、パルタス族の族長！みんな元気にしてつか！

慣れない帝都暮らしもやつと慣れてきたぞ！

・・・冗談はさておき、俺の娘が帝国最年少の將軍として軍属となっているため、パルタス族も帝都へと引越してきたのだ。

元々危険種を専門に狩っていたのだが、俺の可愛いエスデスが幼いながらもカリスマ性を發揮して俺たちを説得したのだ。

ああ〜、うちの娘はなんて可愛くて才能があるんだ。本当あれだな、天才だな！でももう娘も12歳・・・ああ、不安過ぎてたまらない。

あんなに可愛い可愛い俺の娘がこれから成長したら、きつと隠れて男作つていちやいちやしてそのうち家に連れてきて「お父さん、紹介したい人が」って言い始めるのかと思ふと夜も眠れないし飯も食えない。

「お父さん、心配し過ぎですよ。まだエスデスも子供ですし・・・それに將軍としてのお

仕事もあるでしょう？あの子は貴方に似てとても強いですから、戦うことのほうが大好きなんですよ」

「そ、そうか・・・？」

愛しくて美人な妻から説得されて、ようやく平静を保てるが・・・

だつて俺のこの自慢の妻によく似てエスデスはそうとうに可愛いからな！世界一可愛いんだぞ！そんなエスデスが大人になったら俺の妻と同じレベルで美人になるんだ！！つまりは男の方から寄ってくる！

ああああああ、そんなの考えたくない！

俺の可愛い娘にどこの馬の骨とも知らない男があんなことやそんなことするなんて、もれなくぶち殺したくなるじゃないか！！

俺の娘は絶対に結婚なんてさせないからな！

むしろ男と付き合わせないいいい！

エスデスはずつと俺の可愛い娘なんだ！

「父さん、母さん、ただいま」

「あらエスデス、おかえりなさい」

「おお！エスデスカ。よく帰ってきたな！おかえり！」

そんなことを考えていたら久しぶりに娘が帰ってきてくれた。

ひやつほう！久しぶりにエスデスと一緒にご飯食べて、風呂に入って、一緒に寝ようじゃないか！

そう思つて玄關まで迎えに行くと、エスデスの隣に男の子がいた。

小さいからかなり年下だと思つたが、エスデスがしっかりと腕を組んでいる。

「私、このタツミと将来結婚する！」

エスデスが満面の笑みを浮かべて、まるで恋に溺れる乙女のように頬を染めて宣言した。

その瞬間、俺の意識は夜闇のような真つ暗な底に沈んだ。

【皇帝陛下の計らい】

露子に自分のことを伝えて、これからの指針がやつと決まった。

宮殿に戻つてからすぐに部下たちにも話を伝えて、ナジエンダ將軍やブドー大將軍を筆頭に新しい国造りの準備に取り掛かった。

もちろん、オネストや他の者たちからの反発も強い。

そうだろうな・・・予想はしていた。皇帝としては、きつと責任感が無いことかもしれぬ。ナジエンダやブドーも全面的な賛成とは言い難いところだ。

それでも、何度も繰り返してきて、それでも失敗を続けていた余が帝国を治める器はないのだろう。

ならば、新しい民にとつての国を作ることが、この国の最後の皇帝となる余の使命だ。余の記憶のことは、シユラを通してオネストも知つたらしい。

「陛下、それはただの逃げですよ。貴方は責任が問われない人間になるために皇帝を、国を捨てる気です」

「・・・そうかもしれぬな」

「ですから、陛下はまだ皇帝として・・・」

「お前の傀儡になれ、と?」

「・・・」

余が始皇帝に教えてもらった皮肉で返すと黙ってしまった。

少し意地悪だっただろうか・・・

「すまないな。ちよつとした意趣返しだ」

「・・・随分と始皇帝と悪魔に入れ知恵されたんですね」

「そうかもしれないな。ああ、でもロツドバルトの言葉は新しいものだったな」

「……へえ。私はあんな顔だけの性格悪そうな悪魔は信用なりませんなあ」

オネストはどうやらあのロッドバルトが嫌いらしい。

露子と仲良しだったからか、嫉妬していると露子に聞いた。

「私は止めますよ、この国を変えるなんて」

「余は成し遂げるぞ、本当に民のためになるならば、国の形は変わってもいいんだ」

「民のため？あなたは自分のために……」

「そうそう、オネスト。お前もそうして策略を巡らすのに忙しいだろうから露子にはしばらく国づくりのために旅に出てもらおうことにしたぞ」

余の発言にオネストは何秒間か沈黙していた。

ちなみにこれも意趣返しだ。

……これについては、余が考えてやったものだがな。

「露子一人だと危ないから、シユラと道化師のチャンプにエスデスとアカメとクロメを付けておいた。心強い仲間がいるから大丈夫だろう。そうそう、タツミもその旅に同行するそうだ。」

タツミについてはエスデスの要望と故郷の村人たちの意見を聞いて、余が判断した。

ten years after

皇帝陛下の命で世界各地を回る旅も早十年。

帝政から民主政治に完全移行できそうだと吉報をもらって帝都に戻ってきた。

一年に一度ぐらいいは帝都に戻っていたけれど、大体はナジエンダさんに旅の報告と回収した帝具を預けているだけだった。

あとはアカメちゃんやクロメちゃんが宮殿にいる子供たちとの訓練への顔出しなどだろうか・・・

エスデス將軍は自分の軍の鍛錬もその時に兼ねていた。

拷問については何も言えない。まあ、以前よりはマシになっているはずだ。ここ数年でダイダラさんやニヤウさんも軍に引き込んだし、リヴァさんも絶賛勧誘しているらしい。

帝政から民主政治になったら軍だって縮小されるだろうに・・・

私は少なくとも不安なのだが、エスデスさんは「その時はその新しい国の軍部に残るか、傭兵団でも運営するつもりだ」なんて言っていた。

・・・オネストさんと皇帝陛下にはここ10年、一度も会っていない。

陛下から「自分が国を民に譲るまではオネストと余に会わないでほしい」と言われた。もちろんシユラさんから不満があつたので私が代わりに尋ねると、陛下はこう答えた。

「そのほうが、心置きなく大臣と戦えるからな」

吹っ切れた笑顔でそう答える陛下に頼もしさを覚えた。

陛下は陛下なりに、大臣とけじめをつけようと思つたのだろう。オネストさんのことだから、とてつもなく悪だくみをするに違いないからね……

「久しぶりに帝都に戻ってきたな。ツクシたちは元気にしてるだろうか」

「ナタラやギンに早く会いたいなあ」

「そうだな。クロメに恋人ができたと知ったらきつと驚くぞ」

「ちつ、違うもん！ウエイブは恋人とかじゃなくて……と、友達、とか、だから……！」

「その割にはウエイブに手紙を送っているみたいだな」

「ううつ……お姉ちゃんのいじわる」

「ふふつ、クロメは可愛いからな。モテてしまっても仕方ない」

「もー！違うつてばー！」

アカメちゃんとクロメちゃんがそんなことを離しながら、仲良く手をつないで歩いていた。二人とも武器を持って戦う道を選ぶことにはなつたが、これまでの繰り返し返してきた世界とは違う。

二人の道が違えることなく共にいる姿をこの目で見る事が出来て、本当に良かった。

良かったけど……

「タツミ、ナジエンダのところに行くな」

「なつ、なんでだよ！ いいじゃんか別に！ ラバックやブラートの兄貴と話したり鍛錬したいし……スーさんとも鍛錬したいし……」

「お前はあのマインという女が目的なのだろう？」

「つつ、なななな、なに言ってるんだよ！ そんなことないって！」

「じゃあチエルシーとかいう女か？」

「だから違うって！」

「それじゃアレオーネとかいう獣女か？」

「だーかーらー！ 姐さんも違うってば！ 確かにセクハラはされるけど……」

「私以外の女が目的ならば阻止するまでだ」

……私の隣で、こんなやりとりさえなければもつと喜べただけだなあ……

エスデスさんは少し膨れた顔をしつつタツミに詰め寄っていた。これだけならまだ可愛らしいが、更に強力になったデモンズエキスのせいで冷気が漂ってきている。

ああ、歩いた傍から霜が降りてるなあ……

「おいおい、あんまり詰め寄ってやんなよ」

「シユラさん！」

タツミをフォローしたシユラさんに、タツミは懐いた様子で後ろに隠れた。

この10年でよく懐かれたなあ……主にエスデスさんの猛アプローチのせいだけども。

けれど、それぞれのチームで敵対していたことを思い出せば……これはこれで幸せなのかもしれない。

「相変わらず賑やかな奴らだぜ」

「そうですね……」

私の隣にちやつかりといるチャンプさんに相槌をうった。

チャンプさんも子供を殺す連続殺人鬼になることなく、普通にちよつと危ない子供好きの人で済んでいる。

ちなみにワイルドハントのメンバーともこの10年の間に巡り合ったが、その全員が軽度の悪人で済んでいる。

これもきつと良い事だろう。

「いやあ、露子はいっつ見ても女神だな。まさか成長しても女神のままだなんて俺の心の目は間違つてなかつたぜ！」

・・・良いことだと言ひ難いなあ・・・

そんなこんなでやつと宮殿にたどり着いた。宮殿は未だに機能しているものの、完全に政治形態が変わればある程度解体されたりするだろう。

アカメちゃんたちやエスデスさんと別れて、私は一人で中庭にやってきた。

さすがに疲れてしまったから、ここで一休みをしよう。

またアカメちゃんたちと合流してから謁見するだろうから、それまではゆっくりしておきたい。きつとオネストさんとか人目を憚らずに飛びつきそうだからね・・・

中庭にある大木の根元に腰掛けて一息吐くと、視線を感じた。

辺りを見渡すと少し先に二人ほど誰かがいるようだ。

「露子さん・・・！」

一人は10年前からあまり変わっていないオネストさん

その隣にいるのは・・・私と同じぐらいの年齢の美青年だった。最初は誰か分からなかったけれど、10年前に見た面影がうっすらと残っている。

・・・皇帝陛下だ。

私に急いで駆け寄りそうになったオネストさんを制して、彼は話しかけてきた。

「久しぶりだな露子、覚えているか？」

「・・・ええ」

陛下が成長した姿を、ちゃんと見る事ができたのはこれが初めてだ。

「露子さん、やはり女性らしい服装じゃないんですね」

「・・・余計なお世話です」

「あはは、露子でもそんな顔をする事もあるのだな」

「陛下は黙っていてください！久しぶりに露子さんに会えたんですから上から下まで嘗

め回すように見たいんです！」

「嘗め回すつて表現やめてください」

こんな会話をしながらも、ついつい口元が緩んでしまう。

こうして・・・こうやって、仲良く話せるのが嬉しいと思う。

「・・・露子、おかえりなさい」

陛下が嬉しそうに微笑みながら私にそう言ってくれた。

「ただいま！」

【後日談】それからどうなった【日々は続く】

【オネスト大臣と露子】※大臣視点

初めて知った頃は一般市民だと思っていました、魔王であった頃は敵だと思っていました。本当にいつの間にか好意を抱いていたのです。

拗らせているタイプの女性を相手にしたこともありません。自分の手でどうにかしたくなるんですよ。私色に染めたいというか。

めちやくちやにしたいんですよ。自分のものとして、自分だけのことしか考えられなくなるような……

独占欲というんですかね。私だけのものになりたい。

「……と、いうわけです。露子さん、いい加減結婚してくれませんか？」

「オネストさん、それ聞いて結婚したいと私が思うと？」

「ちよつとお試しで結婚するだけですよ？」

「お断りします」

露子さんは相変わらず冷たいです。ですが彼女は押していけばいつかは落ちます。

そういう人間性ですし？

強い人間の強い意志に、つい絆されるタイプなんですよ。

そのくせ自分の意見も通そうとするあたりが実に頑固ですけど。

【シユラさんの話】※露子視点

「前から思ってたんですが、シユラとは随分仲良しのようにですね」

「は？」

オネストさんにそんなことを言われてつい変な声が出た。

仲良し・・・なのだろうか？確かに多少、会話はしてるし付き合いはあるが、仲良しなのかと問われると首を傾げる。

そもそも、仲良しだとシユラさんは思っていないだろう。

仲良しな相手を殴りつけたりはしない（確信）

「確かにここ10年でかなり気やすく話すようにはなったな」

エスデスさんは何故かその言葉に同意した。しなくていいです。やめて。

オネスト大臣に勘違いされたら面倒なのに

「でも、そういう仲じゃないですよ、ね？」

「あー、そうだな」

シユラさんがめんどくさそうにいいながら、オネストさんにこう続ける。

「というか俺、結婚する奴いるし」

その言葉に、私もエスデスさんもオネストさんも黙ってしまった。

あのアカメちゃんは肉を落としたぐらいだ。

タツミもこれには驚いたのか、目を見開いている。

「えっ、けっこ・・・え？」

「おう」

「誰とです？」

「普通に帝都に住んでる女」

「貴族とか、ああ、もしかして実は他国の王族とか？」

「いや、平民。書店で働いてる」

「美人なんですか？」

「普通」

オネスト大臣の質問に淡々と答える。

まって、え？いつのまに？え？まって、10年旅してたけど、まって。

わたし、それ、しらない

「つつーことだから、露子はねえわ」

それはいいけどお前いつのまにだよ!!!!

ここにいた全員が、多分同じことを思ったと思う。

【皇帝陛下とオネスト大臣】※オネスト大臣視点

「陛下、結局貴方は露子が好きなんですか?」

「どうだろうなあ、お前はどう思ってる?」

皇帝陛下・・・いや、今は皇帝の肩書すら捨てようとしているタダの馬鹿な子供に言われて非常に腹が立った。

まるでこちらをからかっているかのような態度・・・一体、誰に似たんですかね!?

「露子さんが好きなら渡しませんよ」

「・・・ふふつ、そうかそうか。まあ、かまわない、頑張ったらいいと思うぞ?」

「はぁ~~~~!?!あなたに言われなくても、露子さんは私と結婚するんですよ! 決定事項

です。絶対に彼女を手に入れるんですから！」

私が宣言すると、彼は「そうか」とだけ笑っていた。苦笑交じりで。本当につ……そういう煽り方を誰に教わったんですかねえ!!!

【ロッドバルトと露子の話】※露子視点

「いやー、面白い方向に話が進みましたよねえ」

あれからロッドバルトさんは、ちょこちょこ私に会いに来るようになった。

もちろん、エスデス將軍たちに知られないようにこつそりと……ではあるが。

「話が進んだ、なんて。本当に人のことをキャラクター扱いしてますね」

「だって俯瞰視点で見えますからね。あくまで私は作家兼読者みたいなものですよ。

ああ、舞台装置でもいいですが」

「性格が悪いことに変わりないです」

「ふふふふ、よく言われます〜！」

相変わらず、よく分からない悪魔だ。

……契約はしていたし、今も死んだあとだから、「私」で楽しんでるんだろう。

「……こうやって魂を使って楽しんでるんですね。悪趣味極まりないです」

「いえいえ、普段はわりとすぐに食べたりますよ?」

舌なめずりしながら傍で囁かれて、思わず距離をとってしまった。

「……やっぱ、死ぬことには慣れない。」

「そう怖がらないでくださいよ」

「……怖いものは怖いです」

「酷いですねえ。でも、わりと今の生活だつて楽しいでしょう」

「……」

「……楽しいと言えばそうだけど、お試しでちよつとトリップしただけでこうなると思つてなかった。」

「……家族が心配してそうだなあ」

「楽しいですけど、元の世界も恋しいです。元々はお試しだけのはずでしたし」

「?そんなんです?」

「……あの時、タツミ君に憑依した、あのモニターの人と対話してなければ。帰つてましたよ、多分」

「へえ、そうだったんですか」

「これもまあ、めぐりあわせなのかもしれない。」

「……家族には、会いたいけどね」

【書き下ろし】おまけのおまけ【後日談】

【ナジエンダさんとラバックさん】

※ナジエンダさん視点

何度も繰り返された悪夢は去り、戦わずに国を変革することができた。

ひとえに、皇帝陛下がオネスト大臣と袂を別つことができたからだろう。

苦労も多かったし、暗殺されかけたこともあるが・・・暗殺機関に所属するはずのアカメの同胞たちが護衛してくれたおかげだ。

「国の情報やシステムも移行しつつある。あと数年はかかるが、民たちがよりよく暮らせる政治システムになるだろうな」

「ナジエンダさん、お疲れ様です！」

・・・この10年の間に、ラバックと再会した。

再会、はおかしいだろう。

ラバックは転生前の記憶は持っていないかった。

だが、こうして巡りあって、また私についてきてくれたのだ。

「軍も縮小されるか、運営自体が変わるだろう。ラバック、家に戻らなくていいのか？」

「いいんですよ。兄貴たちが後を継ぎますし。俺がいたところで実家の手伝いをやるぐらいですよ」

「そうか……」

「それに俺はナジエンダさんについていくつて決めましたからね!どこにだつてお供しますよ!」

何度繰り返しても、お前は変わらないな。

そんなことを言えるはずもないが……

「なあ、ラバック」

「なんですか、ナジエンダさん!」

「もう少し落ち着いたら、一緒に暮らさないか?」

「……えっ?」

なんとか恥ずかしさや照れを抑えて、ラバックに伝えてみた。平常心、平常心、平常心……落ち着け。焦ってはだめだぞ。

「あつ、あの、ナジエンダさん。一緒に暮らすつて、あの」

「そ、そのだな……あの……」

私から伝えようと決めたが、いざとなると言葉が中々出てこない。

あまりにも恥ずかしすぎる。どうやったらいいんだ?!告白なんてエスデスたちはさ

らりとやっていたじゃないか！

わ、私にだって、告白できるはず……

「わ、私も、その……お、落ち着いて暮らす時期がきたというか……で、出来たら……その……」

「ナジエンダさん、もしかしてそれは」

あ、駄目だ

恥ずかしすぎる

そう思った途端、気がつけば宮殿の執務室の窓から飛び降りて走っていた。

た、次こそは最後までいうからな！

私から告白するんだからな！見てろよ！

※おまけ※

露子「ナジエンダさん、また告白してなかったんですか……」

ラバツク「ナジエンダさんが告白したいなら、俺は待つけど。めちやくちや焦らされてるなあ……」

タツミ「俺は応援してるぜ」

アカメ「私もだ。ナジエンダ將軍が告白するのを見届けたい」

×××××
 【ギヤラクター画像】

★久多良木露子

作中軸のため、魔王として振る舞った後のオッドアイになっている。

服装自体は魔王になる前の普段着だが、タツミの姉として転生したあともジャージを好んで着ている。

シユラ「先生さんよ、いっつも芋ジャージきてダサイよな」

露子「ジャージって過ごしやすくて。汗かいても吸収してくれますし。それなりに温かいですし」

オネスト大臣「もつとスカートとか履きませんか？ミニスカートでガーターベルトとかオススメですよ」

チャンプ「馬鹿野郎！そこはふわふわのフリルスカートにかぼちやパンツが正義だろ！ニーハイつきの絶対領域があれば、なお最高だ！」

シユテン「ふむ、ロリだったら彼シャツならぬ彼胴着を着せたんだが・・・下着は無しがいいな。いやまで、ロリなら胸に絆創膏も有りか」

露子「性癖で勧めないでくれません・・・？」

シユラ「ほんとそういうのやめろよ・・・」

アカメ「本当に気持ち悪いな」（便所蟋蟀をみるような視線）

スズカ「その視線、最高ね。私にも向けてほしいくらい・・・！」

★ロツドバルト・ナーヴェ・シユーリピアカ

【氷雪の魔王】シリーズ他、アカメが斬る！二次創作の連載作品で大体出演している舞台装置。

チート臭いのは舞台装置の役割のため。

前書きや後書きで狂言回しを担当したり、作中で引つ掻き回したり、なんだかめっちゃくちやキャラクターが勝手に動く。

動くというか、本当に意図しないときに動くので修正したり方向性ごと変える羽目になる。

通常モード

プライベートモード

人間擬態モード

社員1（イウリアーノ）「は？久々に呼ばれたと思ったたら、なんで社長の挿し絵三連発なんだよ。まじおこ」

社員2（パウルス）「なんで主役の露子差し置いて差分あるのか意味不明。訴訟不可避」

社員3（蓮華輪廻命）「どれだけ出番増やせば満足するんですかね。目立ちたがり屋とどうか自己顕示欲強すぎじゃないですか？」

社員4（内藤結月）「朕たちの出番までもぎとっていくアルし、ほんと最低アルな」
ロツドバルト「社長に対しての反応じゃないですね？」

社員1「いや、本気で社長の出番多過ぎつすよ」
社員2「自重したらどうですか？」

ロツドバルト「世の中に溢れている神様転生のテンプレートと比べたら微々たるものじゃないですか」

社員3 「全世界の神様転生を敵に回してますよ、その発言」

社員4 「さすが社長、敵を作ることだけは上手いアル」

社員1 「そもそもなんで社長の差分がこんなに・・・」

ロッドバルト 「別の機会で差分が増えたので、ついでです。」

社員2 「ついでが許されるなら自分たちも立ち絵ぐらい欲しかったな・・・」